

て英驅逐艦ストロングホルドを、また翌三日米砲艦アセヴィルを捕捉、交戦少時にしてそれぞれ撃沈せり、本戦闘において我方損害無し

大本艦隊表(午後四時三十五分)

比島方面帝國海軍部隊は、三月二日、ミンダナオ島西端の要衝サンボアンガ敵前上陸に成功、所在の敵を撃破しこれを完全に占領せり

昭和十七年三月六日

大本艦隊表(午前十時四〇分)

一、帝國海軍航空部隊は三月三日濠洲本土西北岸の要衝ブルームを急襲し發進準備中の敵最新飛行艇群その他を攻撃し、所在機全部二十八機を撃破せり、本攻撃に並行し他の一隊はウインダムを襲ひ敵輸送機一機および格納庫一棟を銃撃炎上せしめたり

二、帝國海軍航空部隊は三月一日、二日東部ジャバ島及び同島以東スンダ列島各敵航空基地を徹底的に攻撃し残存機新來機合計二十六機を撃墜破せり

三、帝國海軍航空部隊は三月四日大舉ジャバ島バンドンを強襲し敵機十八機を撃墜破せり

大本艦隊表(午前十一時三十分)

ジャバ方面帝國陸軍部隊は隨所に敵の抵抗を撃破しつつ進撃を續行し昨五日午後九時三十分敵首都バタビヤを完全に攻略せり

大本艦隊表(三月六日午後三時)

特別攻撃隊の壯烈無比なる眞珠灣強襲に關しては既に公表せられたるところ、この世界の心膽を寒からしめたる攻撃の企圖は、攻撃を實行せる岩佐大尉以下數名の將校の着想に基くものにして、數箇月前、一旦緩急あらばこれを以て盡忠報國の本分を盡し度しと案を具し秘かに各上官を経て聯合艦隊司令長官に出願せるものなり、聯合艦隊司令長官は慎重検討の結果成功の確算あり、收容の方策また講じ得るを認め志願者の熱意を容れることとせり、本壯舉に参加せる下士官また帝國海軍優秀者中の最優秀なる人物たり、いづれも參加將校の平素より固く信頼せる部下にして、各上官と生死を共にすることを念願しありしをもつて、今回の企圖に際しても特に志願者を募ることなく、淡々たる心境のうちに上官よりそれぞれ隊員として參加せしめ度旨願出で、聯合艦隊司令長官より希望通り參加を命ぜられしものなり

爾來部内に對しても嚴に機密を保持しつつ短時日の内に用兵者、技術者渾然一體となり工員に至るまで不眠不休、晝夜兼行にて製造實驗に、或は準備訓練に心血を注ぎたる結果、

今次開戦に先立つ緊急の際に完成を見たるものにして、攻撃に参加せる將士の盡忠無双の精神および技術工作關係者の熱誠とともに帝國海軍の卓越せる技術を廣く世界に誇るに足らん

而して實行に當りては收容に關し萬全の方策を講ぜられたるは勿論なるも、敵主力を攻撃したる後は警戒一層至嚴を極むべく海底に横はる沈没敵艦の残骸を縫ひ、狭長なる水道を通過、猛烈なる反撃を脱過歸還することの困難は豫想に難からず萬一に備へ自爆の準備を整へたることは帝國海軍軍人として當然とするところなり

かくて御稜威の下、天佑神助を確信せる特別攻撃隊は某月某日枚を銜んで壯途につき、眞珠灣目指して突進、沈着機敏なる操縦により嚴重なる敵警戒網ならびに複雑なる水路を突破、全艇豫定の部署に據り港内に進入、或ひは白晝強襲、或ひは夜襲を決行、史上空前の壯舉を敢行、任務を完遂せるのち艇と運命をとみにせり、なかんづく夜襲による「アリゾナ」型戦艦の轟沈は遠く港外にありし友軍部隊よりも明瞭に認められ、十二月八日午後四時三十一分（布哇時間七日午後九時一分）即ち布哇における月出二分後、眞珠港内に大爆発起り、火焰天に沖し灼熱せる鐵片は空中高く飛散、須臾にして火焰消滅、これと同時に敵は航空部隊の攻撃と誤認せるものか、熾烈なる對空射撃を開始せるを確認せり、また同

日午後六時十一分（布哇時間午後十時四十一分）特別攻撃隊の一艇より襲撃成功を無線放送、午後七時十四分以後放送途絶、同時刻ごろ自爆もしくは攻撃せられたるものと認めるものもありたり

晝間強襲に關しては敵艦隊において僅にこれを認めたるものあるが如きも、殆どその何ものたるかを判別し得ざりしが如く港内混亂の際のため戦果の絶大なりしことは確信しあるも今のところ航空部隊による戦果と判別困難なり

出發に際しては攻撃終了せば歸還すべき命を受けありしも遂に歸還するもの無かりしは或ひは味方航空部隊の爆弾、魚雷雨下しつある敵艦に肉薄（史上類例なき至近距離）強襲し或ひは長時間海中に潜伏、月出を待ちて露頂し晝間攻撃による損傷少き敵主力艦を確認攻撃したるなど全隊員生死を超越して攻撃效果に専念し、歸還の如きは敢てその念頭に無かりしによるものと斷ずるの外なし、かくの如く古今に絶する殉忠無比の攻撃精神は、實に帝國海軍の傳統を遺憾なく發揮せるものにして、今次大戦史劈頭の一大偉勳といふべし

海軍省發表（昭和十七年三月六日午後三時）特別攻撃隊員中の戦死者に對し、昭和十六年十二月八日附特に左の通り二階級を進級せしめられたり

任 海軍中佐

海軍中尉 横山 正治

任 海軍少佐

同 古野 繁實

海軍少尉 廣尾 彰

任 海軍大尉

海軍一等兵曹 横山 薫範

同 佐佐木 直吉

任 海軍特務少尉

海軍二等兵曹 上田 定

同 片山 義雄

同 稻垣 清

任 海軍兵曹長

海軍省發表 (昭和十七年三月六日午後三時) 昭和十六年十二月八日布哇海戦において、特殊潜航艇を以て布哇軍港に突入し、偉功を奏したる特別攻撃隊に對し聯合艦隊司令長官より左の通感狀を授與せられ、右の旨海軍大臣より奏上せり

感 狀 特別攻撃隊

昭和十六年十二月八日開戦劈頭、挺身米國太平洋艦隊主力を布哇軍港に襲撃し、友軍飛行機隊と呼應して多大の戦果を挙げ、帝國海軍軍人の忠烈を克く中外に宣揚し、全軍の士氣を顯揚したるは、その武勳拔群なりと認む
仍て茲に感狀を授與す

昭和十七年二月十一日

聯合艦隊司令長官 山本 五十六

昭和十七年三月七日

大本營發表 (午前十一時四十五分)

一、曩にニューギニア島北東方洋上において我決死の攻撃を受けたる敵航空母艦は沈没確實ならずと發表せるも、その後寫真その他當時の狀況より察し沈没確實なること判明せり
なほ本航空母艦は中型新式航空母艦なり

大本營發表 (午前十一時四十五分)

一、帝國海軍航空部隊は二月二十七日スラバヤ沖海戦に先だちバリ島附近海上において敵特設航空母艦を攻撃し、命中弾六發を以て大火災を起さしめ同艦艦上待機中の敵三十機および格納庫搭載中の飛行機全部を爆破炎上せしむるとともに、同艦に致命的損害を與へた

り、同艦は間もなく左舷に大傾斜し速力急速に減退せるを視認せられたり、なほ附近に警戒中なりし大型飛行艇二機を撃墜せり、
 大本艦隊表 (午後三時三十分)
 開戦以來三月七日迄に判明せる帝國海軍の綜合戦果左の通

魚雷艇	九	二	三	二	一	二
掃海艇	四	三	三	二	一	二
特務艇	二	三	三	二	一	二
敷設艦	四	四	二	二	一	二
砲艦	七	七	六	一	一	二
潜水艦	四	四	一	五	五	六
驅逐艦	八	一〇	四	六	五	一
甲級巡洋艦	四	一	四	八	一	一
乙級巡洋艦	三	二	二	四	一	一
航空母艦	三	三	三	三	三	三
戰艦	五	二	四	四	四	四
擊沈	米	英	蘭	米	英	蘭
大破	米	英	蘭	米	英	蘭
拿捕	米	英	蘭	米	英	蘭

二、船舶
 船 一〇五隻六十萬噸 九一隻卅萬二千噸 調査中
 三、飛行機
 飛行機 擊墜四六一 擊破炎上一〇七六 同上合計一五三七
 我方の被害 甲巡小破一 (修理完成) 乙巡小破二、 (修理完成)、驅逐艦沈没四、中破二
 潜水艦沈没四、特殊潜航艇沈没五、特務艦沈没二、掃海艇沈没五、大破一、船舶沈没二七、
 飛行機自爆、未歸還一二二

大本艦隊表 (午後五時三十分)

比島方面帝國海軍部隊は二月二十八日より三月一日にわたり比島周邊海面において二千トン級乃至五百トン級敵船八隻、監視艇一隻を撃沈し、二千トン級および八百トン級敵船各一隻を拿捕せり

昭和十七年三月八日

大本艦隊表 (午後五時十五分)

スマトラ方面帝國陸軍部隊はムアラテポ附近に敵敵を捕捉、撃滅して四日午後五時中部スマトラの要衝ジャンビを占領するとともに同地南方一帯の油田地帯を確保し、五日南部ス

マトラ一帯の掃定を完了せり

昭和十七年三月九日

大本營發表(午前十時五十分)

帝國海軍航空部隊は、三月四日夜半、ハワイ真珠港を奇襲し同港復舊工事に狂奔中の敵海軍工廠に數トンの命中爆弾を浴びせ、その重要箇所を爆砕せり、我方敵の照射、砲撃を受けたるも被害なし

大本營發表(午前十一時十五分)

ビルマ方面帝國陸軍部隊は、ベグー及蘭貢附近に於て敵軍主力を撃滅し七日午後ベグーを、八日午前十時蘭貢を完全に占領せり

(註)ビルマ方面陸軍部隊は二月十日マルタバンを占領後、我が企圖を秘匿しつつ所在の敵を撃砕して果敢なる進撃を續行し、二月十六日乃至十九日に至る間ピリン河畔において執拗なる抵抗を續けし一師團強の敵を撃破し、更に急迫してシツタン河以東の地區にこれを捕捉殲滅し、三月二日夜以降逐次シツタン河を敵前渡河し三月三日夜より蘭貢攻略戦を開始せるものにして蘭貢攻略に依りことにビルマ方面作戦の主目的を達成するに至れり

大本營發表(午前十一時二十分)

ビルマ方面陸軍最高指揮官は陸軍中將飯田祥二郎なり

大本營發表(午後零時十分)

ジャバ島攻略作戦に行動中の帝國海軍部隊は、三月一日より三月八日にわたり、ジャバ島周邊海上ならびに印度洋に脱出または救援企圖中の敵船五十二隻約二十一萬トンを撃沈破し、そのほとんど全部を覆滅せり

大本營發表(午後十時二十分)

蘭印方面帝國陸軍部隊はジャバ島の敵軍主力をスラバヤ及びバンドン附近に兩斷包圍してこれに猛攻を加へ上陸後僅かに九日にして蘭印軍約九萬三千、米英濠軍約五千をして全面的無條件降伏せしめたり、時に三月九日午後三時なり

大本營發表(午後十時二十五分)

蘭印方面陸軍最高指揮官は陸軍中將今村均なり

昭和十七年三月十日

大本營發表(正午)

一、帝國陸軍は、わが海軍と緊密なる協同のもとに、開戦と同時に南方各方面の敵に對し

空陸相呼應して雄渾果敢なる攻撃作戦を開始し、十二月二十五日香港島要塞を、一月二日比島の首都マニラを攻略し、マレー方面においてはあらゆる困難を克服して長驅神速隨所に頑敵を壓倒撃滅し、二月十五日シンガポール要塞の敵をして無條件降伏せしめ、以て米英の東亞における三大據點を覆滅せり、この間グアム島、英領領ボルネオその他の戦略的諸要衝をも相亞いで敵側の連絡線を寸断し、また英緬國境ジャン山系の天嶮を突破して深くビルマに、更に南方遠く赤道をこえて蘭領東印度諸島に作戦行動を開始し、ビルマ方面においてはベグーおよびラングーン周辺において敵軍主力を撃滅したる後、三月八日首都ラングーンを完全に占領し、蘭領東印度方面においては三月五日首都バタビヤを攻略し爾後敵軍主力をバンドン附近およびスラバヤ附近に兩斷包圍して、これに猛攻を加へ、三月九日遂に敵全軍をして全面的無條件降伏せしめ、茲にわが陸軍は開戦以來三箇月にして西南太平洋における敵聯合軍の主要根據地を覆滅し皇軍の武威を中外に宣揚せり

二、わが占領地は適切なる軍政のもと治安着々回復し、かつ住民の眞摯なる協力により復興の氣運旺盛なるものあり

三、開戦以來各方面とも將兵の士氣極めて旺盛にして、わが軍陣醫學の完璧と相俟つて療

病酷熱の地に行動すること、すでに九十余日にわたるも熱性疾患極めて少數にして作戦上に及ぼすこれが影響は殆ど皆無なり

(註) 某兵站病院一月末日における調査によれば入院患者千二百卅二名中マラリア患者はわづかに九十名なり

四、開戦以來三月七日までに判明せる帝國陸軍の綜合戦果左のごとし

種 目	飛行機	戦車	火 砲	機關銃	銃器	自動車	鐵道車輛	船 舶	舟艇	人員
馬 來	一七三	〇	六六	三、八二	三、六〇	一、八五	二、五五	六	七、八〇	八、三〇
比 島	一七三	〇	六六	三、八二	三、六〇	一、八五	二、五五	六	七、八〇	八、三〇
緬 甸	一七三	〇	六六	三、八二	三、六〇	一、八五	二、五五	六	七、八〇	八、三〇
英 領	一七三	〇	六六	三、八二	三、六〇	一、八五	二、五五	六	七、八〇	八、三〇
英 領	一七三	〇	六六	三、八二	三、六〇	一、八五	二、五五	六	七、八〇	八、三〇
英 領	一七三	〇	六六	三、八二	三、六〇	一、八五	二、五五	六	七、八〇	八、三〇
香 港	一七三	〇	六六	三、八二	三、六〇	一、八五	二、五五	六	七、八〇	八、三〇
グ ア ム	一七三	〇	六六	三、八二	三、六〇	一、八五	二、五五	六	七、八〇	八、三〇
合 計	一七三	〇	六六	三、八二	三、六〇	一、八五	二、五五	六	七、八〇	八、三〇

(備考) マレー方面の遺棄死體は「ジロホルベル」突入までのものなり

(参考) 飛行機撃墜破敵中、括弧内の数字は本数字とは別に「不確實」なるものを示す

大本艦隊表(午後三時五十分)

大元帥陛下には本日陸海軍幕僚長を召させられ南方軍總司令官並に聯合艦隊司令長官に對し左の勅語を賜りたり

勅語

東印度諸島方面ニ作戰セル陸海軍部隊ハ緊密適切ナル協同ノ下ニ長途幾多ノ困難ヲ克服シテ勇戦奮闘克ク敵航空兵力及艦隊ヲ撃滅スルト共ニ諸方面ニ至難ナル上陸作戰ヲ斷行シ隨所ニ勁敵ヲ破摧シテ神速果敢悉ク其主要根據地ヲ覆滅シ以テ敵勢力ヲ一掃セリ
朕深ク之ヲ嘉尙ス

昭和十七年三月十一日

大本艦隊表(午後三時五十分)

一、帝國海軍巡洋艦隊は三月二日、濠洲西方印度洋上において、濠洲方面に通竄中の米

巡ヤーブルヘッドを長驅捕捉し、これを撃沈せり

二、帝國海軍驅逐艦は三月九日未明バリ島ロンボク水道附近において、蘭掃海艇ヤン・ファン・アムステルを撃沈せり

三、帝國海軍艦艇は三月七日早朝、ジャバ島南方クリスマス島を砲撃し、その軍事施設に大損害を與へたり

大本艦隊表(午後五時二十分)

蘭印方面帝國陸軍部隊のジャバ攻略作戰において收めたる戦果の主なるもの左のごとし

(註) 本數量は敵の無條件降伏に當り提示し來りしものなるを以て實際においては若干の差異あるべし

一、俘虜 九萬三千(内將校約二千) 内譯在ジャバ部隊六萬、在外領部隊一萬八千、義勇軍一萬五千

二、鹵獲品 飛行機百五十二機、内譯爆撃機二十四機、戦闘機四十五機その他八十三機、戰車(裝甲車を含む)三百六十七輛、火炮七百三十二門、機關銃千五百六十七挺(主として航空機用)銃器九萬七千三百八十四挺、爆彈四千五百五個、爆藥十二萬箱、各種砲彈二十三萬發、手榴彈三萬四千發、各種銃彈七千二百三十一萬七千百發

昭和十七年三月十二日

大本艦隊表(午後三時十分)

帝國陸海軍部隊は緊密なる協同のもとに、三月八日未明、ニューギニア島東岸の要衝サラモア並にラエの敵前上陸に成功、十日敵約六十機の反撃ありしも四機を撃墜してこれを撃退、目下戦果を擴大中なり、本戦闘において我方の損害左のごとし

- 一、沈没擱坐 徴用船二隻、輸送船一隻
- 二、損傷 巡洋艦一隻(小破)、驅逐艦二隻(中、小破)、徴用船三隻(小破)

(註)輸送船は上陸完了後にして、戦死一名のほか、人員の損傷なし

昭和十七年三月十三日

大本艦隊表(午後三時四十五分)

- 一、帝國海軍航空部隊は、ニューギニア島ポート・モレスビーに對し、三月十日までに數次の大爆撃を敢行、同地潜伏中の敵機十六機を撃破炎上し、その重要軍事施設を爆砕せり

大本艦隊表(昭和十七年三月)

二、帝國海軍驅逐艦はジャバ海殘敵掃蕩中三月五日英掃海艇一隻を撃沈せり

昭和十七年三月十六日

大本艦隊表(午後三時二十分)

米本土西岸方面に作戦中の帝國潜水艦は三月一日サンフランシスコ沖合において一萬トン級油槽船一隻、同二日メンドシノ近海において七千トン級貨物船一隻を撃沈せり

昭和十七年三月十七日

大本艦隊表(午後三時十五分)

帝國海軍潜水艦は目下印度およびビルマ沿岸方面に作戦し、敵海上交通に甚大なる打撃を與へつゝあり、三月十六日までに撃沈せる敵船左の如し

- 一、コロソボ方面 武装商船二隻六千五百トン、油槽船二隻二萬トン
- 二、マドラス方面 武装商船三隻二萬四千トン、油槽船一隻七千トン
- 三、ラングーン方面 武装商船二隻一萬九千トン、貨物船一隻五千トン

昭和十七年三月十八日

大本營發表(午前十一時)

一、帝國海軍航空部隊は三月十三日ニューギニア島ポート・モレスビーを強襲し、敵増援機十一機を撃破、更にソロモン諸島フロリダ島およびワナワナ島附近の敵要地を爆撃せり

二、帝國海軍航空部隊は三月十四日濠洲本土北端ホーン島敵航空基地を急襲し、敵機十四機を撃墜破せり

昭和十七年三月二十四日

大本營發表(午後三時二十分)

帝國海軍航空部隊は三月十七日以來連日濠洲本土北部、ニューギニア島、ソロモン諸島並にベンガル灣アンダマン諸島一帯を制壓、敵要地を爆撃し、その軍事施設を破壊せり、主なる爆撃個所次の如し

ポート・ダーウイン、ダービー、ブルーム、ウインダム、ホーン島(濠洲)、ポート・モレ

スビー(ニューギニア島)、ツラギ(ソロモン諸島)、ポート・ブレア(アンダマン諸島)

昭和十七年三月二十六日

大本營發表(午前十一時)

帝國陸海軍部隊は、三月二十三日未明、南アンダマン島ポート・ブレアに奇襲上陸を敢行し、同島英軍をして無條件降伏せしめたり

昭和十七年三月三十一日

大本營發表(午後四時)

帝國病院船朝日丸は、三月二十六日午前七時五十三分、チモール島クロバン灣を單獨航行中、突如英國所屬の飛行機ロッキード型一機の爆撃をうけ、爆弾五個同船左舷後方百米に炸裂せり、當時同船の二湮圍内には他に船舶なし、同船はジエネバ條約の原則を海戦に應用する條約に基き船名及び船型を敵國政府に通告すみの病院船にして條約所定の塗粧及び標識を施しあるほか、對飛行機用標識として最上部短艇甲板及び後部電信室上部に縦横六・五米の赤十字旗を描き、併せて後甲板に縦横六米の赤十字旗を展張しあり、當時の視

界は良好にして上空より一見して病院船なること明瞭なりしに拘らず、英國飛行機は條約に認むる病院船の保護を無視し甚だしき不法行爲を敢てせるものなり

昭和十七年四月一日

大本營發表(午後四時三十分)

一、帝國海軍航空部隊は三月二十日ポート・ダーウインを爆撃、諸軍事施設を破壊し、擬裝隠匿中の敵機三機を炎上せしめ歸途、米増援戦闘機七機の追躡をうけ敢然これと空中戦を交へ、その四機を撃墜せり、更に三十日同地を猛襲し、我戦闘機隊は敵戦闘機十機と交戦數合にして九機を撃墜、攻撃機隊は飛行場ならびに諸軍事施設に全弾命中せしめこれを破壊せり

二、帝國海軍航空部隊は、三月二十四日より二十八日まで、連日ポート・モレスビーを攻撃、敵戦闘機六機を撃墜し、飛行場、高角砲陣地、兵舎等を爆破せり

昭和十七年四月二日

大本營發表(午後三時二十分)

帝國海軍航空部隊は三月二十四日以来三十一日まで、コレヒドールに對し連日數次の大爆撃を敢行し、同要塞高角砲陣地を覆滅し、その機能を喪失せしめたるほか飛行場、兵舎並びに中央官舎地帯その他主要箇所を徹底的に破壊せり

昭和十七年四月四日

大本營發表(午前十一時)

ビルマ方面に活躍中の帝國陸軍航空部隊は敵航空兵力を略々撃滅するとともに敵主要軍事施設を徹底的に破壊せり

三月二十一日より同月三十一日までの間において撃墜破せる敵機は百三機なり

(註)この敵機は主としてラングーン陥落以後英本國および西亞方面より増援せられたるものなり

昭和十七年四月六日

大本營發表(正午)

支那派遣の帝國陸軍部隊は、大東亞戰爭勃發とともに機を失せず敵性全租界に進駐し、かつ香港を攻略して米英勢力を支那大陸より完全に一掃するとともに、適時適所に重慶抗戦

力を撃碎し、以てわが南方作戦に呼應しあり、大東亞戦争開始以來三月末日までにおける支那方面綜合戦果左の如し

- 一、主要なる作戦 三〇回
 - 二、遺棄死體 五八、三一三、俘虜 一八、四五三
 - 三、鹵獲品 飛行機五機、戦車一七輛、自動車一、四七〇輛、鐵道車輛三〇九輛、魚雷艇二隻、各種火炮二〇一門、重輕機一、三五三挺、小銃一二、四四三挺
 - 四、擊墜(破)飛行機 三〇機
 - 五、擊沈(破)艦船 砲艦四隻、船舶一三隻
- 本期間における我軍の損害左の如し
戦死二、五三六 戦傷六、三八二

大本營發表(午後四時)

帝國海軍部隊は四月五日、印度洋上英國最大の軍事據點コロンボその他を攻撃し、同方面の所在敵艦艇、船舶、航空兵力ならびに重要軍事施設に大損害を與へつつあり

昭和十七年四月七日

大本營發表(正午)

- 一、蘭印軍スマトラ總指揮官オブヒアーカー少將は、三月二十七日クタラジャにおいて帝國陸軍部隊に降伏せり、ここに赫々たる戦果を以て全スマトラを戡定せり
- 二、北部および中部スマトラ方面にて獲得せる俘虜左の如し

蘭印兵約一千、英國兵約九百、その他一千二百、合計三千一百名のうち、英國兵はシ
ンガポールより乗船逃亡中船舶擊沈せられスマトラに辛うじて上陸せるものにして、
航空將校中佐以下三十名を含みあり

(註) オブヒアーカー少將は、本年一月スマトラ總指揮官として派遣せられたるものなるが、帝國陸軍部隊の上陸をみるや部下とともに山中に遁入せるものなり

第二編

CHINESE UNIVERSITY

... (faint vertical text) ...

大東亞戰爭を繞る國際外交戦 棟尾松治

第一章 日米交渉の決裂

東條内閣の成立

日米關係は緊迫悪化し、英國類りに對日威嚇恫喝を試む。日本帝國の周邊は、A B C D包圍陣に包圍されて、經濟、軍事、外交の對日壓迫、日に日に加はる。日本國民たるもの如何でか、これを黙視し得んや。『腰の朱鞘は伊達にはささぬ。日本刀の斬味見せよ』『A B C D包圍陣をズバリと斬れ』との對外強硬論は野に滿ち、國に滿つるの概があつた。

しかし當時の近衛第三次内閣は、アメリカ政府に對し、昭和十六年八月『メツセーヂ』を送り、

日米兩國の國交調整のため、日米兩國首腦が會見し、平和の裡に解決せんことを提議した。世にこれを『近衛メツセーヂ』といふ。かくしてひたすら事勿れ主義、平和主義を執り、日米交渉に望みをかけ、これが打開に努めたが、アメリカはこれに應ぜず、『日獨伊三國條約問題、在支日本軍の撤退問題の解決』を先決問題として、極めて横暴なる態度を示した。

然るに近衛内閣は、アメリカより斯くの如き横暴なる回答をうけても、なほかつその態度をはつきりせず、梅雨空のやうなうつたうしさに政界はなんとなくもやもやとして割切れないものがあつ

内閣總理大臣	陸軍大臣	外務大臣	大藏大臣	海軍大臣	司法大臣	文部大臣	農林大臣	商工大臣	逓信大臣	鐵道大臣	厚生大臣	國務大臣
東條英機	東條英機	東郷茂徳	賀屋興宜	嶋田繁太郎	岩村通世	橋田邦彦	井野碩哉	岸信介	寺島健	寺島健	小泉親彦	鈴木貞一
五八	五八	六〇	五三	五九	五九	六〇	五一	四六	六〇	六〇	五八	五四
前陸軍大臣	前陸軍大臣	前駐ソ大使	前大藏大臣	横領長官	前司法大臣	前文部大臣	前農林大臣	前商工大臣	前逓信大臣	前逓信大臣	前厚生大臣	前企業院總裁
岩手	鹿兒島	鹿兒島	廣島	東京	高知	鳥取	東京	山口	和歌山	和歌山	福井	千葉
明三八	明四一	明四一	明三六	明三七	明四三	明四一	明四六	明四九	明三六	明三六	明四二	明四三
陸士	陸士	東大文	東大法	兵學校	東大法	東大法	東大法	東大法	兵學校	兵學校	東大醫	陸士

た。
その近衛第三次内閣も對米交渉の自信を失ひ、突如として昭和十六年十月七日總辭職をした。即日、陸軍大臣東條英機中將に後繼内閣組織の本命が降下した。東條陸相は、陸軍大臣官邸を組閣本部として、組閣に着手し、翌十八日拂曉には大體の組閣を終り、閣員名簿を捧呈、親任式を執り行はせられ、同夜初閣議を見るに至つた。
ここに一言するが、近衛第三次内閣の總辭職が十月十七日、東條内閣の成立が、十月十八日である。古來より、日本の發展には、七と、八との數字に因縁深く、この東條内閣によつて大東亞戦争に、赫々たる大戦果をあげたのも幸先よい。殊に東條英機中將は、十八日陸軍大將に昇任、年齢もこの時、五十八歳であつた。
想へば明治二十七八年戦役、明治三十七八年戦役、明治三十八年五月二十七日の日本海大海戦の大戦捷、時の聯合艦隊司令長官東郷平八郎大將、昭和六年九月十八日の滿洲事變、さらに昭和七年

十二月八日はジュネーヴにおいて四十二對一をもつて國際聯盟が日本を蹴飛ばした日であり、日本は聯盟から脱退した日である。これによつて國際聯盟は没落の一途をたどり、英、佛の聯盟主義崩壊となつたのである。また昭和十二年七月七日の支那事變勃發、續いて昭和十六年十二月八日こそ大東亞戦争開戦の日であり、ハワイ海戦において赫々たる大戦果をあげた日である。長くも宣戰の大詔を拜した『大詔奉戴日』である。
嗚呼、七と八の日よ。皇國日本、神國日本を永遠に祝福されんことを。さて東條内閣の開僚は次頁の如き顔觸れであつた。
但し、政府は、その後鐵道大臣に八田嘉明氏を起用、拓務大臣は、井野農相の兼任となり、また内務大臣には次官湯淺三千男氏昇任し、結局東條首相の内務兼任、東郷外相の拓務兼任、寺島逓相の鐵道兼任は、それぞれ解かれることになつた。東條内閣の成立によつて、國民はほつと安心した。それは、東條内閣によつて、『何かやつてくれ

るであらう』といふ信頼であつた。近衛内閣當時のやうなもやもやしたうつたうしさを吹き拂つてくれるであらうといふ期待であつた。

これに反して、アメリカ、イギリス、重慶、蘭印諸國は、非常に驚愕した。東條軍部内閣の出現によつて、積極政策が遂行せられ、結局戦争は不可避であらうといふ恐怖感を與へたのである。かくしてABC包圍態勢は益々強化せられ、英、米の威嚇宣傳、恫喝外交は一層輪をかけてに至つた。大東亞の風雲いよいよ急を告げんとし、息づまるやうな緊迫感が、太平洋を覆ふてゐたのである。

わが華府大使館の聲明

日米交渉容易に進まず、日米關係は、日に日に悪化しつつある時、突如十月二十九日のニューヨーク・タイムスに、ワシントン特電として、駐米日本大使館のスポークスマンの談話が發表され、全米、全世界の注目を惹くに至つた。この華府大

使館スポークスマンは、誰あらう野村駐米大使その人である。ニューヨーク・タイムス記者を引見して次の如く語つたのである。

『もし日米間の危機を回避しなければならぬものとするならば、少くとも、日米兩國は、兩國間の經濟戦争を停止すべき措置を講じなければならぬ。日本の政府首脳部も日米關係の現状がそのままの形で維持されることは、不可能であることを言明してゐる。日米關係がなり行くままに放置されねばならぬとすれば、兩國間の關係は、良好になるか、悪化するか、いづれかであらねばならぬ。』

米國は日本に對して、輸出禁止を行つてゐるから、日本政府が石油その他の物資を手に入れるために、自存自衛上の措置を執らざるを得なくなる情勢に立至ることは現實的な事實である。

日本議會は、日米將來の情勢に對處するため、必要なあらゆる増稅案を通過せしめ、日本政府を思ひ切つた立場に立たしむることになるやも

測られない。余は、日米兩國政府ともに、太平洋の平和を確立せんとする目的においては、一致した見解を有してゐるものと確信する。』

この華府大使館スポークスマンの談話、否、野村大使の言明は、各方面の注目を惹いたが、さりとて、これによつて、アメリカ側が反省するといふ色は、見えなかつた。

しかし米國の反戦派の一部は、アメリカを戦争の渦中に入れることを危険として、ルーズヴェルトの戦争政策に反對する者もすくなくなかつた。十月三十日ニューヨーク市のマジソン・スクエア・ガーデンで開催された『米國第一委員會』主催の演説會で、彼の有名なリンドバーグは、ルーズヴェルト大統領を痛撃して曰く。

『歐洲戦争は歐洲人のものである。われわれは戦争の直前に立つてゐるが、まだ最後の一步、すなはち宣戰布告が送つてゐる。この際全米國民は團結して、米國を參戰から喰止めねばならぬ。』

ルーズヴェルトをはじめ參戰派は、米國國防の

危機を宣傳してゐるが、米國の危機とは、外敵の侵入よりも、むしろ内部の獨裁政治の危機にあるといふべきである。米國は現在の國防を充實すれば外敵の侵入の危険は絶対にない。』

リンドバーグ等反戦派のいふことも、要するに、『アメリカ程立派な偉大な國はないのだから、他へ手出をしなければよい。戦争に捲込まれる必要はない』といふにあり、『ルーズヴェルト等參戰派の戦争政策を危険として、これに警告し、反對してゐる』のである。

しかしながら反戦派、孤立派の運動も、結局、ルーズヴェルトの戦争挑發政策を阻止することが出来ず、アメリカは、戦争に捲込まれ、その緒戦に大敗を喫して全米國民が苦悶焦燥してゐるのである。

來栖大使飛ぶ

東條内閣の日米交渉、對米外交は如何にと注目されてゐたが、前駐獨大使來栖三郎氏を起用し

て、特命全權大使の資格をもつて、アメリカに派遣し、野村吉三郎大使を援助せしめて、日米交渉に當らしむることになつた。

よつて來栖大使は十一月五日早朝、羽田飛行場を發し、空路、香港に赴き、香港よりアメリカのクリツパー機に乗換へ、マニラ、ホノルル、サンフランシスコを経て、華府に乘込むことになつた。

この來栖大使派遣は、十一月五日午後、大使出發後に、内閣情報局において發表され、一般國民は、十一月六日の朝、新聞紙上ではじめて知り、『おや／＼、まだこれからアメリカと交渉を続けるのか』といふ感じをうけた。

國民の一部には、『日米間には、出来るだけ話し合つて、平和の裡に解決した方がよい』といふ意見を持つ者と、『この上話を續ける必要はない。日本は斷乎自衛措置を執ればよい。來栖大使を派遣するのは無駄だ』との意見も強かつた。

殊に徳富蘇峰翁の如きは、十一月十日、日比谷

公會堂の東日時事講演會において、『日米の間に

は平和の便、すなはち鳩の便といふものが出かけた。今最後の鳩が飛んでゐる。やや大きい鳩である。それは來栖大使である』と説き起し、『アメリカは世界攪亂の元兇であり、いくら説いても解るものではない。聖人も二度すれば可なりと言つてゐる。三度する必要はない。帝國は宜しく、獨往邁進すべきである。一億國民が、ひとしく北條時宗の決意をもつて起てば、なんぞ恐るるに足らん』と國民の奮起を促してゐる。

一方アメリカ側は、來栖大使のワシントン派遣をどう見たか。十一月五日、ハル國務長官は、記者團の質問に應へて

『國務省は、日本政府が、野村大使を援助するためワシントンに特派した來栖大使の太平洋横斷飛行に便宜を與へることを、日本側に協力した。これは、外國の特派使節に對し、米國政府の與へる好意的措置に過ぎない。米國政府は、これ以外に、今回の特使とは、何等關係はない』と語つて

ある。

アメリカの參戰論

來栖大使が、太平洋を飛びつた時、米國では頻りに對日挑戰、參戰論が、ルーズヴェルト大統領、ノックス海軍長官、ウェルズ國務次官等の政府首脳部によつて、公然と論ぜられてゐた。

十一月十一日は、前大戰の休戰記念日である。ル大統領は、アーリントンの國立墓地無名戰死の墓前で演説して曰く。

『米國は前大戰において、世界の自由とデモクラシーとを擁護するため戦つたが、今や米國は自由を守るためには戦ひをも敢て辭するものではない。』

若し米國が戦ふことを餘儀なくされるならば、自由擁護のために、永久に戦ふであらう。これは單に、われわれ自身のためではなく、この世界をして自由が生存し、今後も永遠に繁榮し得る場所とせんがために戦つて死んだ多數の人々に對する

我々の義務である。』

またノックス海軍長官は、ロイドアイランドの新海軍航空隊根據地において、休戰記念日講演を行つて曰く。

『米國は、もはや米國の權益を侵害する日本の行動を黙視し得ない。決意の時は來た。米國は大西洋と同時に太平洋においても、直ちに、行動を起し得る準備をなすべきである。』

米國の安全にとつて死活の問題たる權益は今や重大なる危機に直面してゐるのである。從來日本との友好關係を持續せんとする米國政府の努力は、苦難に満ちたものであつた。米國の權益は度度侵害されたにも拘はらず、米國は日本へ輸出を許可し來つた。この忍耐は平和を求めんがためであつた。しかし今や根本原則を犠牲にし得ない時に到達した。これ以上この態度を續けることは、米國の自由および寛容に關して誤解を生ずる。米國は完全な國防を有することを考慮して、大西、太平洋兩洋に行動を起すべきである。』

このノックス海軍長官の演説は、いやしくも一國の海軍大臣が、かくの如き軽率な言辭を弄しても良いのかと思はれる。まづたく驚くの他はない。『米國は完全なる國防を有することを考慮して、大西、太平洋に行動を起すべきである』といふことは、『米國海軍をもつて、大西洋、太平洋において戦争を起せ』といふことになる。なんたる暴言、なんたる對日挑戦ぞや。

ノックスは、『米國は日本に對して輸出を許可して来た』といふが、昭和十六年七月二十五日、日佛印防衛協定成立によつて、日本軍が佛印に平和進駐以來、アメリカは日本の在米資産を全面的に凍結し、對日輸出を事實上禁止して、日米關係は經濟的、通商方面において、事實上の斷絶状態に入つてゐる。しかも、一方ABCD包圍陣を組織して、日本を包圍壓迫威嚇してゐるのである。そのアメリカの海軍長官が、『米國は忍耐をもつて對日輸出を許可して来た』と説き、『大西、太平洋に行動を起すべきである』とは、口舌をもつて

する一種の『對日宣戰』である。しかも、來栖大使が、太平洋をアメリカに飛びつつある十一月十一日の暴言である。

さらに、ウェルズ國務次官、スチムソン陸軍長官等は、口を揃へて、日、獨、伊を誹謗し、米國の參戰をあふつてゐるのである。このアメリカの態度、このルーズヴェルト政權首腦部の對日挑戦により、如何に、日本が、隱忍自重するも、これを平和的に解決するは、不可能と見られるに至つたのである。

日米交渉の開幕

平和の鳩、來栖大使は十一月十四日午前九時五十分、サンフランシスコのクリッパー空港に到着した。まづ米國新聞記者團の質問攻めに會つた。ニューヨーク・タイムスの如きは、わざわざ桑港まで記者を特派して、來栖大使の意見を聴かせた。大使は、

『自分は外交官としてもつとも重要かつデリケ

ートな特別使命を帯びて渡來したが、すべては大

統領と國務長官に會つたのちのことである。自分の使命は、至難であることは痛感してゐるが、絶望はしない。ワシントン着の上は、野村大使とガツチリ組んで、難關突破に當り、見事タツチダウンを獲得した』

とて、アメリカの蹴球季節を引用して蹴球用語を使つて新聞記者を喜ばせた。さらにNBC放送局から、同放送網を通して全米に放送し、着米の挨拶を行つた。

『私は日本の特使として當地に参りましたことを、非常に嬉しく思つてをります。太平洋の旅は、實に楽しいものでした。これから米大陸を横斷して、首府ワシントンへ参ります。この旅行も楽しいものと考へてゐます』

同じ十一月十四日、ワシントンの白雲館では、ルーズヴェルト大統領が、記者團と一問一答をやつてゐる。

記者『米國民は太平洋の危機をよく認識してゐる

か』

大統領『自分はさう信ずる』

記者『太平洋戦争を回避する方法ありや』

大統領『如何なる方法が戦争を回避するかは、質問者の知つてゐる以上のことは自分も知らぬ』

記者『天津、上海、北京からの米國陸戦隊引揚によつて、米國の權益は保護されずに、放任され

はせぬか』

大統領『米國市民の財産は、支那各地に散在してゐる。陸戦隊は約一千名で、支那の三箇所に駐

在してゐた。陸戦隊は、駐屯地以外を保護すべき方法はな

い』

記者『太平洋戦争は、刻々切迫してゐるものと思

ふか』

大統領『自分は眞剣に、戦争勃發が迫つてゐるもの

とは思はない』

右の様な問答が繰返されてゐる眞つ只中に來栖

大使は、桑港からニューヨークに飛んだ。十一月

十五日午前十時ニューヨークのラ・ガーディア飛行

揚で、新聞記者に捕へられた來栖大使は、ニュー

ヨーク記者團と次の一問一答を行つた。

記者『もし貴下が、善い外交官でなかつたならば、この度の場合、戦争を意味するか』

來栖『私は知らない。私は出来る限りのことはす

るが、現下の情勢において、人間一人の努力

は、餘りにも小さ過ぎる。われわれは全部一緒

になつて努力しなければならない。』

記者『戦争に入ることについては日本國民はどん

な風に考へてゐるか』

來栖『それは米國民の考へてゐることと同じであ

らうと思ふ。日米間には和解決し難い問題は極め

て抄す。』

記者『米國中立法の改正と、支那駐屯米國陸戰隊

の引揚に關してどう思ふか』

來栖『ルーズヴェルト大統領自身でさへ、それに

對しては言明を希望されなかつたではないか。』

かくして來栖大使は、同日午後一時半（日本時

間十六日午前三時半）首都ワシントン飛行場に着

いた。野村大使、若杉公使、西山財務官、井口參
事官等に迎へられ、新聞記者、ニュース寫眞班の
包圍攻撃を受けたのち、野村大使と同乗してワシ
ントンのわが大使館に入つたのである。いよいよ
日米交渉の幕は開かれることになつた。

第七十七議會、東條三原則

ワシントンにあつては、來栖大使が到着して、

野村大使を接見、ルーズヴェルト、ハルを相手に、

日米交渉が開かれんとする時、東京にあつては、

東條内閣の初の特別議會、帝國第七十七議會が開

かれた。

十一月十七日、東條總理大臣は、貴、衆議院に

おいて施政演説を行ひ、東條三原則を闡明したの

である。その施政演説中の三原則をあぐれば次の

通りである。

『當に平和を欲する帝國としては、隱忍自重、

忍び難きを忍び、耐へ難きを耐へ、極力外交交渉

によつて、危局を打開し、事態を平和的に解決せ

んことを期して來たのであるが、帝國は今なほそ

の目的を貫徹するに至らず、帝國は今や文字通り

帝國百年の計を決すべき重大なる局面に立たざる

べからざるに至つた。

政府は帝國以來の國是たる平和愛好の精神に基

づき、帝國の存在と權威とを擁護し、大東亞の新

秩序を建設するため、今なほ外交に懸命の努力を

傾注してゐる次第であつて、これより帝國の期す

るところは

一、第三國が帝國の企圖する支那事變の完遂を妨

害せざること。

二、帝國を圍繞する諸國家が、帝國に對し直接軍

事的脅威を行はざること。勿論、經濟封鎖の如

き露骨行爲を解除し、經濟的正常關係を回復す

ること。

三、歐洲戰が擴大して騷亂の東亞に波及すること

を極力防止する。

ことである。以上の三項に互る目的が外交交渉

によつて貫徹せられるならば、獨り帝國のみなら

ず、世界平和のため誠に幸ひであると信する次第

である。』（以下略）

また同日、東郷外務大臣は、外交演説を行つた

が、そのうち、日米交渉に關するものは次の通り

である。

『平和を念とする帝國は、本年四月（昭和十六

年）より米國政府との間に話合を行つて來たので

ある。前内閣（近衛第三次内閣）においては、今

夏（昭和十六年）後における情勢の逼迫に顧み、

鋭意日米交渉の成立に努力いたしたにも拘はらず

彼我の意見一致を見るに至らなかつたのである。

現内閣（東條内閣）においても、國際危局を救

濟し、太平洋の平和を維持せむがために、右日米

會談を繼續するに決し、爾來交渉中である。もし

それ米國政府が、帝國政府と同様、眞に世界平和

を顧念するとともに、帝國の自然的要求と、東亞

における帝國の地位を諒解し、かつまた東亞にお

ける事態につき現實に即する考慮を加へるにおい

ては、本件交渉の妥結も、決して不可能ではない

と信ずるのである。

しかも彼我の見解は、過去半歳餘にわたる話合により概ね明白となつてゐるをもつて、技術的方面より見るも、今後の交渉に長時間を要することなきことは、米國側にも明かであると信ずる。

事態かくの如くであつて、帝國政府においては、本交渉の成立に向つて最善の努力を傾注してゐる次第であるが、我々の協調的態度にも自ら限度あり、事いやしくも帝國の生存を脅かし、または大國としての權威を毀損することとなるが如き場合には飽くまで毅然たる態度をもつて、これを排除せねばならぬことは、勿論であつて、私としては、この點について十分の決意をもつて交渉に臨んでゐる次第である。(以下略)

以上、東條首相の三原則、東郷外相の日米交渉方針によつて、帝國の對米交渉の限度は明白となつた。

要するに、アメリカが、

一、日本の企圖する支那事變の完遂を妨害せぬこと

二、A B C D包圍陣を解體、解消し、資産凍結、對日輸出禁止を解除して、通商貿易關係を正常化する。

これが、帝國の根本方針である。然るに、アメリカは、このわが方針とは正反對に、日本の支那事變處理完遂を妨害し、A B C D包圍陣を益々強化し、經濟壓迫を強めて、日本の咽喉首を締めあげ、日本が經濟的に參つて了つて兩手をあげ、アメリカの言ひなり放題になることを望み、かつ、それを空頼みにしてゐたのである。これでは、日米交渉は成立し得ない。果然、その交渉は暗礁に乗りあげたのである。

米、英頻りに策謀

來栖大使華府到着後、最初の日米會談は十一月十七日(日本時間十八日)に開かれた。來栖、野村兩大使は、同日午前十時半、國務省にハル長官を訪問、三者會談の上、午前十一時、三人同道ホ

ワイト・ハウスに赴き、ルーズヴェルト大統領と四者膝を交へて、水入らずに會談した。この會談は十一時より十二時過ぎまで一時間以上に達したが、これについては、何等公式發表なく、また記者團の質問にも明確な答へは與へられなかつた。翌十八日野村、來栖、ハル三者の長時間會談が行はれ、漸く事態の重大なることが、アメリカの新聞紙上に現はれるや、十九日米國上院議員ベツパーは、

『日本使節は、もし太平洋戦争なるものが、日本に對する抵抗の代價であるとすれば、戦争は、必ず起るものと覺悟せねばならない。もし日本が、平和を欲するならば、日本をして、その態度を改めしめよ。米國は、東亞新秩序なるものに、決して黙従しないであらう。』

と強硬論を公表して、間接射撃をはじめた。日米會談は、引續き二十日第三次會談が續行されたが、依然、如何なることが論議されたか一般には公表されなかつた。

この日米會談をめぐつて、英國は重大なる役割を勤めた。すなはち戦艦プリンス・オブ・ウェールズ號、レパルス號の二隻を東洋に派遣し、日本に壓力を加へ、日本に讓歩せしめ、もつて、東亞における英國の權益を擁護せんとの策謀をめぐらしてゐた。このころ、早くも、英國兩主力艦は、ケープタウンを経由、南アフリカを廻つて印度洋に向ひつつあるとの情報が、世界中に流布されてゐた。

十一月二十二日、四度目の野村、來栖、ハル會談が、二時間半にわたつて行はれたが、これより前に、ハル長官は、英國大使ハリファックス、濠洲大使ケーシー、和蘭大使ルドン、蔣介石重慶の大使胡適等を招いて、國務省に、英、米、蔣、蘭、濠五國會談を行つた。

日米交渉を行ひながら、一方では、英、米、蔣、蘭、濠五國會談を開き、日本側の主張、日米交渉の経過を報告し、併せて、關係五國が、對日策を協議し、その對日包圍のA B C D陣營の強化を圖

るといふことは、もはや、アメリカに何等の誠意を示すものでないといふことが判明した。

恐らく日本の主張は、残らず、英、重慶、蘭印、遼洲の知るところとなり、ワシントンから筒抜けに通報されてゐるものと見なければならぬ。したがつて、日米交渉頼むに足らず、否これは「恐るべき陥穽である」と見られるに至つた。

日米交渉の前途に、若干の期待を持つてゐた人達も、この事實の前には、その期待も消し飛んだ。「頼むべからざるもの」を頼んではならない。自己を防衛するものは、自己の力にまたねばならぬ。自存自衛あるのみである。

第七十七議會における衆議院の國策完遂決議に曰く「世界の動亂愈々擴大す。敵性諸國は帝國の眞意を曲解し、その首動益々激越を加ふ。隱忍度あり、自重限りあり、わが國策夙に定まり、國民の用意また既に成る。政府は宜しく不動の國是に則り、不拔の民意に信頼し、敢然起つて帝國の存立と權威とを保持し、もつて大東亞共榮圈を建設

この日ルーズヴェルトは、スチムソン、フックス、ウエルズ次官等招き、慎重討論を重ねた。

日米交渉の間接射撃の役割を持つイギリスの主力艦プリンス・オブ・ウェールズ號、戦艦レパルス號は、十二月二日シンガポールに堂々と入港したのである。プリンス・オブ・ウェールズ號には新任東洋艦隊司令長官トマス・フィリップス中將が坐乗してゐた。その八日後には、マレー沖で撃沈せられる悲劇の入港とも知らずに――。

十二月五日、わが野村、來栖兩大使は、午前十一時國務省にハル長官を訪ね、日米第八次會談を遂げ、席上兩大使より、十一月二十六日第五次會談によつて、ルーズヴェルトより帝國政府に手交された文書に對する、帝國政府の回答をハル長官に手交した。會談二十五分にして終り、ハル長官は直ちにホワイト・ハウスに至り、ルーズヴェルトと晝食を共にして、日本側の回答案を討議した。

雨か、風か、十二月五日(日本時間十二月六日)

し、進んで世界永遠の平和を確立すべく、右決議す。日本全國民の不拔の決意はすでに成つたのである。

嗚呼日米第八次會談

日米交渉第五次會談後、十一月二十六日、野村、來栖、ハル三者會談によつて行はれ、米側より對日要求の文書が提出された。

二十七日には、ルーズヴェルトの要請により野村、來栖、ルーズヴェルト、ハル四者會談が、白聖館で行はれた。

二十八日大統領は、ホワイト・ハウスに、スチムソン陸軍長官、フックス海軍長官、ヤーシヤル參謀總長、スターク海軍作戦部長等陸海軍首腦部を集め、日米交渉の経過を報告し、萬一の事態に處する方策を協議した。

十二月一日野村、來栖、ハル三者の第七次會談が行はれた。翌二日には、ルーズヴェルト大統領の命令に基づき、ウエルズ國務次官が、野村、來栖兩大使を招き、日本側の回答を要求した。

の第八次會談、日本帝國政府の對米回答書手交をもつて、日米交渉は、劇的な終止符の幕を閉ぢんとしてゐる。しかしそれは、神のみの知り賜ふところであつた。

嗚呼日米第八次會談、第八回目をもつて、神の審判が下されたか。思へば日米交渉、大東亞戰爭は、八の日、八の數字が、決定的にものを言つたのであつた。

十二月八日(米國時間十二月七日)帝國政府は、米國政府に、對米通牒「覺書」を送り、米、英に對し、宣戰の 大詔發せられ、帝國政府の聲明外務省よりは日米交渉の経過が公表されたのである。

米、英兩國に對する宣戰布告と共に、帝國陸海軍は、ハワイ、グアム、比律賓、香港、シンガポール、マレーの米英基地に一齊攻撃を開始し、その緒戦において勝々たる大戦果をあげた。殊にハワイ眞珠灣を奇襲猛爆した海軍航空部隊、特別攻撃隊の奮戦によつて、アメリカ太平洋艦隊の主力

は一擧に撃滅せられた。

この報に接したルーズヴェルトは、白聖館の一室にあつて、ワナ／＼と全身をふるはせ、持つてゐたシガレットホルダーを床に落し、顔色蒼白となり、記者團との會見の際も、驚愕狼狽して落着かず、彼のナポレオンが、セントヘレナ島に一步を印した時も、かくやと思はれるばかりであつたと外電は傳へてゐる。

奢れるものは久しからず、世界の警視總監をもつて任じ、常に大言壯語して、世界をわが物顔になし、アメリカの國境は、歐洲にあつてはフランスであり、亞細亞においては支那であると豪語した彼、日本の實力を過小評價し、已れの力を買ひかぶつた彼の今日の焦燥狼狽は、まことに痛快である。

孫子も言はずや『敵を知らず、已を知らざるも

第二章 帝國、米、英に宣戰布告

嗚呼十二月八日

嗚呼十二月八日、われ等は、生れてよりかくの如き感激の日を迎へたことはない。横暴極まりなきアメリカ、イギリス、幾十年、幾百年世界に覇を稱へ、亞細亞を侵略し、搾取壓制、暴虐の限りを盡したイギリス、アメリカ、滿洲事變、支那事變以來、日本を壓迫し、日本の大東亞建設にあらゆる妨害を行ひ、あらゆる露骨な敵性を振舞つて來た英、米アングロサクソンに對する膺懲滅滅の火蓋が切られたのである。

日本は忍ぶべからざるを忍び、耐へ得ざるを耐へた來た。われわれは、むしろ政府の隱忍自重は度が過ぎると内心甚だ不満であつた。何故に横暴なるアメリカの機嫌、氣樓をとらねばならぬか。何故に彼等をつけ上らせ、思ひ上らせるのか、理不盡な彼等のいふことは突つ放してしまへば宜しい。やつて來るならば一擧の下に叩き伏せれば宜しい。政府は、もつと強く、肚を据ゑてかからん

のは、百度戦ひて百度あやうし』と、神國日本を知らず、已れさへも知らざるルーズヴェルトが、百戦するも、百敗するのみ。今にして、思ひ知つたであらう。

ヘルマン博士といへる豫言者あり『今年中（一九四二年）には、ルーズヴェルトは、暗殺されるであらう』と、恐らく米國市民より戰爭挑發者としてその責任を追及され、また敗戦責任者として糺弾され、遂に、暗殺されるやも測り難い。暗殺されても、誰も恨むことはあるまい。自ら奢り高ぶり、世界平和を攪亂した元兇に對する天譴として、自業自得とあきらめるより他はあるまい。

十二月八日發表された帝國政府の覺書、外務省公表の日米交渉經過を見ても、如何に、ルーズヴェルトが日本に對し、無理難題の横車を押して來たかが明瞭である。

のかとわれ等は腹が立つて、拳骨のやり場がないくらゐであつた。

それが十二月八日の朝、一べんに吹飛んでしまつた。溜飲が下つたといふか、胸の悶へが取れたといふか、實に愉快であつた。とても嬉しかつた。しかもハワイ空襲、大戦果の報を聞くに及んで『よくぞやつて呉れた』『えらいぞ帝國陸海軍』『やつぱり日本は強いのだ』——ああなんといい有難い嬉しいことであらう。嬉し涙がこぼれた。生れてこんな偉大な感激に満ちたことはなかつた。恐らくこの感じは、日本人ならば、誰しも、同様であつたであらう。

長くも宣戰の 大詔は漢發せられた。世界の富強國をもつて自負するアメリカ、イギリスを敵に廻しての大戦争である。断じて戦ひ抜き、断じて勝たねばならぬ。しかもこの大戦争は、我から好んで迎へた戦争ではない。米英から挑戰され、仕掛けられ已むに已まれず起ち上つたのだ。暴虐なる米、英が、のしかかつて來たのだ。重慶、蘭印

等を手先に使ひ、A B C D包圍陣を作り、資産凍結、經濟斷交、軍備強化でちりちりとわが咽喉首を締めあげて来たのだ。さながら八岐大蛇が、巻き締めて来たやうなものだ。これは断じて斬り拂はねばならぬ。日本刀の斬味を見せる秋が来たのだ。これを寸断しなければならぬ。断じて米、英、アングロサクソンに最期の止めを刺すまで、戦ひ抜き勝抜かねばならないのである。

帝國政府の對米通牒覺書

ワシントンに於て、日米交渉をつづけ、太平洋の平和を保持せんことを念願とした帝國政府も、アメリカの非實際的な架空的原則論の固執、しかも一方ではA B C D包圍陣をもつて、經濟的軍事的に對日共同戦線を張つて、われに挑戦して来る。アメリカ自身は、口でいふことと、行ふところは全く相違し、太平洋の平和に對して一片の誠意すら認めることが出来なくなつた以上、帝國政府としては、最後の吐を決めて、自衛、自存の途

を講じなければならぬことは理の當然である。

よつて、帝國政府は、帝國の周邊を脅かしつつある敵性諸國家に對し、自衛自存の態度を明かにし、もつて彼等敵性國家の反省を促すことになつたのである。

東郷外務大臣は、十二月八日午前七時半、東京市麹町區三年町の外務大臣官邸に、グルー駐日米國大使を招致し、對米通牒を手交した。つづいて同日午前八時、クレイギー駐日英國大使を招致し、對米通牒の寫しを參考として手交したのである。

一方ワシントンにあつては、米國華府時間、十二月七日午後一時、野村、來栖兩大使よりハル國務長官に對し、同様の對米通牒が手交された。

かくして帝國政府は、暴虐極りなきアメリカ、イギリス兩國に對し、戦ひを宣したのである。これにつづいて、十二月八日午前八時半、内閣情報局において、『對米通牒の覺書』と外務省發表の『日米交渉經過』が公表された。

對米通牒覺書と、日米交渉經過とは、表裏一體の觀があるが、要するに、對米通牒覺書の骨子は、

一、帝國政府は、昭和十六年四月以來、日米交渉をつづけて、兩國の國交調整を圖り平和を維持せんとしたるにも拘はらず

一、アメリカ政府は、英國政府と共にあらゆる手段を盡して、重慶政權を援助して、日支全面的な平和を妨害し、さらに蘭印、佛印等を脅かして、帝國政府との提携を阻害し、もつて東亞の安定、東亞共榮國建設を妨害して来た。

一、英、米政府は、オランダ國を誘ひ、資産凍結、經濟斷交を行ひ、軍備を増強し、帝國包圍の態勢を整へ、もつて帝國の存立を危殆ならしむる情勢を誘致した。

一、帝國政府は、アメリカ政府に、日支和平を妨害せざることを約束されたしと要求したが、アメリカ政府はこれを拒絶し、依然援蔣行爲繼續の意思を明かにした。

一、アメリカ政府は、日獨伊三國同盟より日本が離脱、若くはこれを一片の空文にせんことを要求した。

一、アメリカ政府は、帝國に對し、重慶政權以外は、如何なる政權をも軍事的、政治的、經濟的に支持せざることを要求した。これ南京國民政府の否認抹殺である。

一、佛印に對しては、日、米、英、支、泰六ヶ國の共同保障の下に立たしめんとする一種の國際管理案を提案して来た。

一、帝國政府に對し、支那、佛印より全面的撤兵をが陸、海、空軍、警察の撤退を要求した。

一、アメリカ政府は、日米交渉のかたはら、英、法、蘭、重慶等としばしば協議し、殊に支那問題に關しては、重慶の意を迎へて、勝手極まる諸提案をなし、右諸國は、何れも合衆國と同じく帝國の立場を無視せんとした。

一、アメリカ政府は、英國その他と策動し、東亞における帝國の新秩序建設による平和確立の努

力を妨害せんとするのみならず、日支兩國を相闘はしめ、もつて英米の利益を擁護せんとする意圖が、日米交渉を通じて明瞭となつた。

一、かくして、日米國交を調整し、合衆國政府と相携へて太平洋の平和を維持せんとする帝國政府の希望は遂に失はれた。よつて帝國政府は、合衆國政府の態度に鑑み、今後交渉を繼續するも、妥結に達するを得ずと認むるの他なき旨を、合衆國政府に通告するを遺憾とするものである。

以上、『對米通牒覺書』の要點である。もつて、米英の無理難題の要求と、帝國の自衛自存の措置を執るの已むなきに至つた事情が明白となつた。

日米交渉の經過

十二月八日、帝國政府の對米通牒覺書と同時に外務省發表の『日米交渉經過』が公表された。この日米交渉經過は、『對米通牒覺書』と表裏一體をなすものであるから、重複の點を成るべく、避け

て、その要點をあげ、今次大東亞戰爭の眞因を明かにしたいと思ふ。日米交渉は、昭和十六年四月中旬、アメリカ側の提案によつて開かれた。右提案内容は

- 一、兩國の包懷する國際觀念及國家觀念
 - 二、歐洲戰爭に對する態度
 - 三、支那事變に對する態度
 - 四、日米兩國間の通商
 - 五、太平洋地域における經濟活動
 - 六、太平洋地域の政治的安定
 - 七、比律賓中立
- 等をふくみ、太平洋全般の問題に關する一般的協定を行はんとするものであるが、日本政府においては、受諾し得ない幾多の點があつた。それはアメリカ側より
- 一、米國が歐洲戰爭に参加した場合、日本は、日獨伊三國同盟條約を援用せず、太平洋方面から米國を脅威せぬといふ保障を求め
 - 二、支那事變は、米國の容認する條件の下に日支

和平の仲介を執らう

と申入れたのである。これに對し帝國政府は、

一、日獨伊三國同盟に對しては、わが軍事援助義務は、同條約規定の場合に發動する旨を明かにし

二、支那事變については、近衛三原則、日支基本條約、日滿華共同宣言を了承し、わが善隣友好政策に信頼して重慶に和平を勸告すべく、重慶において右勸告を聽從しなければ、重慶援助中止を申入れありなき旨を要求する

と回答した。これが五月中旬である。六月下旬米國政府は、四月案に對し具體的な修正案を提示して來た。

七月に至り、第三次近衛内閣成立後間もなく、帝國と佛印との間に締結した議定書に基き、佛領インド支那共同防衛の措置を講ずるや、米國は、帝國に對し資産を凍結し、經濟的壓迫を加へて來た。帝國は依然平和解決の希望を有し、八月近衛首相よりルーズヴェルト大統領に對し『メツセー

ヂ』を送り、帝國の平和的意圖を明かにし、危局打開のために、一刻も速かに、兩國首腦者會合の必要を説いた。

- これに對し、米國は主義上賛成したが、交渉中の懸案、特に日獨伊三國同盟、在支日本軍駐留問題、國際通商無差別待遇に關し、合意成立するにあらざれば、これを實行に移し難しと固執して來たのである。交渉は續けられてゐたが、十月二日に至り米國は四原則を要求して來た。すなはち
- 一、一切の國家的領土保全及主權尊重
 - 二、他國の内政不干渉
 - 三、通商上の無差別待遇
 - 四、平和手段に依るの外、太平洋における現状の不變更

この支那事變を全面的に否定し、根本的に覆すが如き横暴なるアメリカの提案によつて、日米交渉は遂に停頓するに至つた。

近衛メツセーヂの責任者である近衛第三次内閣は總辭職を行ふに至り、東條内閣の成立を見るに

至つた。

東條内閣は、日米交渉の難關を打開せんとし、三事項につき米國側に提案し交渉を繼續することになつたのである。

一、日獨伊三國條約に關聯する自衛權問題については、米國において自衛權の觀念を濫りに擴大せざる旨を明確にすることを要求し、

二、通商上の無差別待遇原則については、右原則が全世界に適用せられるにおいては、右が支那をふくむ全太平洋地域に適用せられることに異議なきこととし

三、撤兵問題については、支那事變のため支那に派遣せられたる軍隊の一部は、日支間平和成立後、一定地域に所要期間駐屯すべく、爾餘の軍隊は、平和成立と同時に、日支間協定に従ひ、撤去を開始し、治安確立と共に、撤去すべく、又佛印に派遣せられてゐる軍隊は、支那事變解決するか、または公正なる東亞の平和確立するにおいては、直ちにこれを撤去すべし。

右の交渉において、英國その他諸國とも、同時に瞭解の成立方を、米國側に斡旋を要望した。帝國政府は、ワシントン駐劄の野村大使を援助するため、來栖大使を派遣した。然るに米國政府は、

一、日米交渉による協定成立せば、日本は、三國同盟の必要はあるまい。これを消滅または死文とすることを反復力説し

二、通商無差別原則は、無條件に支那に適用することを主張し、列國共同の下に支那經濟共同開發を行ふこと等を包含する經濟政策に關する日米共同宣言案を提出した。

帝國政府はこれに對し通商無差別原則は、全世界に適用せられることを希望し、その原則として支那に適用することを承認し、また日米共同宣言は、支那を國際管理に移す端緒となるをもつて受諾し難く、米國側に撤回を求めたのである。

十一月十七日以來、來栖大使は、ワシントンにあつて、野村大使を援け、日米交渉に當つた。然

るに

一、ルーズヴェルト大統領は支那問題に就ては、日支和平の紹介者たる用意ありと述べ

二、ハル國務長官は、日本がドイツと提携してゐる限り、日米交渉は至難なるをもつて、先づこれを除去すべしと説き

交渉は依然として、日獨伊三國條約、支那における無差別通商待遇問題で進捗せず、よつて、帝國政府は十一月二十日次の新提案を行つた。

一、日米兩國は、いづれも佛印以外の南東アジア、南太平洋地域に武力的進出を行はざることを確認す。

二、日米兩國は、蘭印においてその必要とする物資の獲得が保障せられるよう相互に協力するものとす。

三、日米兩國は、相互通商關係を資産凍結前の状態に復帰すべし、米國政府は所要の石油を日本に供給することを約す。

四、米國政府は、日支和平の努力に支障を與へる

が如き行動に出ざるべし

五、日本政府は、日支間平和成立するか、または太平洋地域における公正なる平和確立する上は佛印派遣軍撤退を約す。

右の提案に對し、ハル國務長官は、日本が、日獨伊三國條約との關係を明かにし、平和政策採用を確言するにあらざれば、第四項を受諾し、援蔣行為を停止すること不可能であると述べ、また大統領の日支間和平の紹介者たらんとの提案も、日本の平和政策採用を前提とする旨を説いた。

越えて十一月二十六日、米國政府は次の如き要求を提出した。

一、日米兩國の採るべき措置として、日米兩國政府は英、蘭、支、蘇、泰と共に、多邊的不可侵條約の締結に努む。

二、日、米、英、支、蘭、泰六國間に佛印の領土主權尊重の協定締結に努む。

三、日本政府は支那および佛印より一切の軍隊(陸、海、空軍、警察)を撤退すべし。

四、日米兩國政府は重慶政府を除く如何なる政權をも軍事的、政治的、經濟的に支持せず。

これは實に言語同斷の要求である。この米國の要求を聽従すれば、日本は大陸より全面的撤退となる。五年に互る支那事變は水泡に歸する。南京國民政府は否認抹殺となる。佛印は、六國の國際管理下に置かれる。しかしして、支那、佛印から一切の陸海空軍、警察を撤退する。

かくの如きことが、容認され得ようか。何の顔あつて、靖國の英靈にまみえん。肇國以來三千年、未だ外侮をうけたことなき神國日本を、冒瀆するにも限りあるアメリカの要求。もはや、問答無益である。かくて遂に十二月八日の鐵火の回答となつたのである。

大東亞戰爭の味方と敵國

大東亞戰爭によつて、支那事變、歐洲大戰は、文字通り世界大戰に飛躍した。昭和十六年十二月八日をもつて、世界史は一大轉換を遂げたのである。

る。

この大東亞戰爭を通じて見るに、世界各國中、中立を守る國は、むしろ少くなり、味方か、敵か、この二つの陣營に分れてゐる。そしてわが國の大東亞戰爭より視れば、日本に味方するものと、敵側につくものとは次の通りとなる。

大東亞戰爭（第二次世界大戰）

日本帝國の陣營

日本、滿洲國、中華民國（南京國民政府）奉國、佛領印度支那、ドイツ、イタリア、フィンランド、ブルガリア、ルーマニア、ハンガリー、デンマーク、スロバキア、クロアチア、ノールウェー、

敵國の陣營（對日宣戰布告）

イギリス（濠洲、カナダ、南阿聯邦、ニュージーランド各屬領國）、アメリカ合衆國、キューバ、ドミニカ、ハイチ、グアテマラ、ボンデユラス、パナマ、ニカラガ、コスタリカ、サルバドル（以上中米）、オランダ（蘭印）、チエコ亡命政權、

ゴール亡命政權、重慶政權

國交斷絶（對日國交斷絶通牒）

メキシコ（北米）、コロンビア、ベネズエラ、ペルー、ボリビア、ブラジル、ウルグアイ、エクアドル（以上南米）、ギリシヤ亡命政權、ベルギー亡命政權、ノールウェー亡命政權（以上歐洲）エチオピア（アフリカ）イラク（亞細亞）中立國

第三章 帝國外交の勝利

世界各國驚愕す

長くも米英に對する宣戰の大詔を拜した帝國陸海空軍は、十二月八日拂曉よりハワイに、グアムに、比律賓に、シンガポールに、マレーに、香港に、米英基地を片つ端しから奇襲猛撃を加へた。殊にハワイ眞珠灣においては、わが海軍航空部隊、水中からは特別攻撃隊が潜航して、一舉に敵

ソビエツト・ロシア、スペイン、ポルトガル、スイス、スエーデン、フランス（ヴァイシー政府）、（以上歐洲）アフガニスタン、イラン（以上亞細亞）チリー、アルゼンチン（以上南米）右の中立國中、ソ聯は、ドイツ、イタリア其他諸國と戦ひ、日本とは中立條約で中立が保たれてゐる。またイランは中立國ではあるがイギリスの勢力下にあり、敵性國たるの態度を示してゐる。

太平洋艦隊の主力を撃滅した。

また比律賓、マレー半島に敵前上陸を敢行し、戦果益々あがる。グアム島に敵前上陸をする。ウエーキ島、ミッドウエー島を奇襲猛撃する。アメリカ、イギリスは、驚愕狼狽措くところを知らぬ有様であつた。ことに、世界中をあつと言はせぬのは、マレー沖における英東洋艦隊主力撃滅である。

イギリス海軍の至寶といはれた新主力艦プリン
ス・オブ・ウエールズ號、戦艦レバルス號は、日
米交渉を間接射撃すると共に、あはよく日本を
制壓せんとの野望を抱き、遠くアフリカのケープ
タウンを廻つて印度洋に出て、十二月二日シンガ
ポールに到着、一息ついてゐた。

然るに、十二月八日、大東亞戦争の開戦と同時
に、日本軍、大輸送船團が、マレー半島に向つて
ゐるのを、阻止砲撃を加へんと、新任東洋艦隊司
令長官トーマス・フィリップス中将は旗艦プリン
ス・オブ・ウエールズ號に坐乗、戦艦レバルス號
を率ひてマレー沖を北上して來た。十二月九日午
後わが潜水艦は、英主力艦の出動を發見、直ちに
海軍航空部隊と緊密なる協力の下に搜索中、十日
午前十一時半マレー半島東岸クワンタン沖に確
認、海の荒鷲は機を逸せず猛爆を加へ、遂にこの
二戦艦を撃沈したのである。

この報に驚愕、度肝を抜かれたのは、イギリス
海軍であり、チャーチル首相である。アメリカは、

既にハワイ真珠灣において、その太平洋艦隊主力
を失つてゐるので、今さらの如く、日本の實力、
日本海軍の威力、日本空軍の神業に驚嘆、恐れ
ののいた。

ドイツは、日本起つての報に狂喜し、さらにハワ
イ海戦の大戦果、マレー沖海戦の大勝利に、己れ
の耳を疑ふ程びつくりした。そして『日本のやる
ことは、まるで神業だ』と舌を捲いてゐる。ドイ
ツ自身は戦争には相當の自信を持ち、また空軍に
も自信を持つてゐた。然れども容易に撃つことの
出来なかつた英主力艦を一擧に、二隻撃沈せしめ
た日本の威力にはすつかり驚いたのである。

ドイツばかりでなく伊太利も狂喜し、日本軍の
奮戦、大戦果を絶讃する。世界中、敵も味方も、
これは、これほど驚いた。日本の實力をまのあた
り見、その日本を相手に戦争をすることが如何に
困難であるかを知つた。同時に、日本の味方とな
ることが、如何に有利であり、日本は十分信頼し
得る實力を備へてゐることをはつきり認識した。

これが、日本外交をして有利に導かしめ、帝國外
交の勝利となり、帝國の國際的地位を高め、悠々
と樂に、大東亞戦争を戦ひ抜くことの出来る基礎
的條件となつたのである。

獨伊兩國對米戰爭に参加

帝國政府は、十二月八日、米、英兩國に對し宣
戰を布告、その緒戦に赫々たる大戦果をあげた
が、帝國と昭和十一年防共協定を結び、また昭和
十五年九月二十七日三國同盟條約を締結した盟邦
ドイツおよびイタリア兩國も、三國同盟の精神と
情誼により對米戰爭に参加することに決した。

十二月十一日午前十一時（日本時間十一日午後
六時）ベルリンのヒットラー總統の官邸で、帝國
全權、大島駐獨大使、ドイツ全權リッペントロツ
プ外相、イタリア全權アルファエリイ駐獨大使との
間に、日、獨、伊三國協定に調印した。この新協
定の骨子は

一、日獨伊三國は、對米英戰爭を勝利獲得まで遂

行する。

一、相互の瞭解なしに單獨休戦または講和をしな
す。

二、戰爭が勝利をもつて終結したのちも、公正な
新秩序建設のために密接に協力する。

三、協約の効力は、昭和十六年九月締結の三國同
盟の効力期間、すなはち一九五〇年九月二十六
日まで有効である。

右の協定は、十二月十一日午後十一時情報局から
次の如く發表された。

對米英戰共同遂行、單獨不講和、および
新秩序協力に關する日本國、ドイツ國、
イタリア國間協定締結。

獨伊兩國は今般對米英戰に決し、十二月十一日ベ
ルリンにおいて、帝國全權大島大使、ドイツ全權
リッペントロツプ外相、イタリア全權アルファエリ
イ大使との間に、對米英戰の共同遂行、單獨不講
和及新秩序建設協力を内容とする左の如き日獨伊

間協定調印せられたり、アメリカ合衆國及び英國に對する共同の戰爭が完遂せられるまでは、干戈を收めざるの確乎不動の決意をもつて、大日本政府、ドイツ國政府、イタリア國政府は、左の諸規定を協定せり

第一條 日本國、ドイツ國及イタリア國はアメリカ合衆國及英國に依り強制せられたる戰爭を、その執り得る一切の強力手段をもつて、勝利に終るまで遂行すべし。

第二條 日本國、ドイツ國及イタリア國は相互の完全なる了解に依るにあらざれば、アメリカ合衆國及英國の何れとも休戦又は講和を爲さざるべきことを約す。

第三條 日本國、ドイツ國及イタリア國は、戰爭を勝利をもつて終結したる後に於ても亦千九百四十年九月二十七日、その締結したる三國條約の意義における公正なる新秩序招來のため最も密接に協力すべし。

第四條 本協定は署名と同時に、實施せらるべく、

「戦友よ。イタリアの歴史における決戦の日、また歐洲大戦に新しき日が來た。それは、日本と共に、今日、對米戰爭遂行に入つたからである。日獨伊三國同盟は、軍事同盟となり、その三國族の下には、勝利を胸に期した二億五千萬の人々が隊列を組んでゐる。」

彼の太平洋の廣大なる水域において米國に與へた恐るべき一撃は、東方の日出づる國の兵士の威力が如何なるものであるかを示してゐる。余は諸君に對し、イタリアが日本と共に戦ふのは特權であることを言明する。」

わが、東條首相は、十一日午後十一時次の如き談話を發表した。
『本日獨伊兩國は、米國に對して宣戰を布告した。さらに日獨伊三國は、その盟約を新たにして、共同の敵に對して、最後の勝利を得るに至るまでは、斷乎として戰爭を遂行し、また相互の瞭解なく、休戦および講和は行はざることを明かにした。』

且つ千九百四十年九月二十七日の三國條約と同一期間有効たるべし。締約國は、有効期間の満了前適當なる時期において、爾後における本協定第三條に規定せられたる協力の態様につき了解を遂ぐべし。

かくして、日獨伊三國は、共同の敵、米英兩國を徹底的に膺懲撃滅することになつたのである。

ヒットラー總統は、十二月十一日午後三時（日本時間十一日午後十時）、クロール・オペラに國會を召集し、『ドイツ政府は、盟邦日本に協力、對米宣戰を決意した』旨を聲明した。『ルーズヴェルト大統領は、全歐洲を戰爭に捲込んだ黒幕である』として、これに關する文書を公表し、獨米間を一步一步戰爭に捲込んで行つたと指摘し、『今や獨伊兩國は、その全力をあげて、日本の對米戰爭を支持しドイツは、日本と共に米國に對し、宣戰する』と宣言した。

またムツソリーニ首相は、十一日午後一時よりローマのヴェネチア廣場において演説して曰く。

「いまや世界は、徒らに現状を維持せんとする國家と、只管正しき新秩序を建設せんとする國家との兩陣營に分れて、有史以來空前の大戰爭が行はれつつある。しかして正しき理由と、充實せる實力とに鑑み、勝利は斷じてわが陣營の上にあることを私は信じて疑はぬものである。」

私はここに三國の結盟いよいよ固きことに滿腔の同慶の意を表すると共に、われわれの光榮ある將來に對し、不動の信念を披瀝するものである。東郷外務大臣は『目下世界は歴史上、ほとんど比類なき大轉換期に際會せる次第で、ここに帝國が光輝ある戰勝の確信と、覺悟とを固め、盟邦獨伊方面との緊密なる瞭解協力の下に、公正なる新秩序の建設、道義的世界の樹立に邁進するのは、欣快措く能はざるところである』と述べてゐる。これはまづもつて帝國外交の勝利として、視盃をあげようではないか。

日泰攻守同盟、日佛印軍事協定

日獨伊三國協定が締結せられた十二月十一日、日本と泰國との間に、日泰攻守同盟締結に關し、わが坪上大使と、泰國のピブン首相との間に、完全に意見の一致を見るに至つた。

十二月八日の大東亞戰爭開戦と同時に、イギリス軍が、タイ國侵入を企てたので、帝國政府は、泰國の獨立を維持するため、タイ國侵入の英軍を撃退せんとし、皇軍のタイ國內通過の便宜供與方を交渉し、日泰間に協定成立、帝國陸海軍は、友好裡に泰國へ進駐を見るに至つた。

今また日泰攻守同盟締結に意見一致を見たことは、兩國のために、慶賀に耐へない。タイ國は、これによつて大東亞共榮團の一翼として、盟邦日本と共に、大東亞建設の名譽を受くるであらう。

また佛印當局と、わが軍との間にも、軍事協定成立を見るに至つた。すなはち十二月八日午後八時三十分、佛印帝國陸海軍最高指揮官と佛印當局との間に、昭和十六年七月締結せる日佛印共同防衛協定に基づき、日佛印軍協同に關する軍事協定

が成立した。

これによつて、わが軍が、佛印および泰國との間に、行動の諸便宜が得られ、大東亞戰爭遂行に、如何に役立つかは、想像以上である。

かくして、帝國外交は、着々勝利の礎石を築いたのである。殊に日泰攻守同盟は、十二月十一日坪上、ピブン協定によつて意見一致を見、その後條約文を作製、検討の上、十二月二十一日に、正式調印を行つたが、その條約全文は次の通りである。

日泰攻守同盟條約

第一條 日本國および泰國は、相互獨立及主權の尊重の基礎において、兩國間に同盟を設定す。

第二條 日本國又はタイ國と一又は二以上の第三國との間に武力紛争發生する時は、タイ國又は日本國は、直ちにその同盟國として、相互に加増し、あらゆる政治的、軍事的方法により之を支援すべし。

第三條 第二條の實施細目は、日本國及タイ國の

權限ある官憲間に協議決定せらるべし。

月二十三日早朝には、ウエーキ島も陥落した。十二月二十五日にはさらに香港も陥落し、米、英の據點、基地は次々に陥落する。さすが剛腹なチャールズも、世界の警視總監をもつて任ずるルーズヴェルトも青くなつた。何んとか局面打開の途はないかと、チャールズは、英陸海軍首脳部を同伴してアメリカに飛んだ。

第五條 本條約は、署名と同時に實施せられるべく、かつ十年間有効とす。條約國は、右期間満了前、適當なる時期において、本條約の更新に關し協議すべし。

ルーズヴェルトも、弱り切つてゐる際だし、チャールズが、何か良い智慧でも貸すなら喜んで借りよう。二人で相談して見ようといふことになつた。

この日泰攻守同盟の締結は一に、ピブン首相の勇斷である。ピブン首相の令息は、二人までロンドンに留學中であつたといふが、その息子の身を想ふ時、如何なる感じがするであらう。暗澹たるものがあらうが、よくこの大東亞戰爭によつてタイ國の進むべき途を誤らなかつたピブン首相の態度は見あげたものである。

恰度香港陥落の日、十二月二十五日午後五時、ワシントン白雲館で第一回顔合せを行つた。出席者は

(米國側) からルーズヴェルトの他にスチムソン陸軍長官、マッシュナル參謀總長、アノルド空軍參謀次長、ノックス海軍長官、スターク作戰部長、キング合衆國艦隊司令長官、ホプキンス武器貸與局長官

米英の狼狽、華府會談

十二月十二日にはグアム島早くも陥落し、十二

〔英國側〕からチャーチルの他に、ジル前参謀總長、ポークル空軍参謀總長、パウンド海軍軍令部長、ビーヴァブルック軍需相

以上の如く、米英兩國の軍首腦部を網羅してゐる。ワシントンよりの情報によれば、チャーチルは、二十五日の英米華府會談を前に、二十三日夜ホワイト・ハウスに、ルーズヴェルトを訪ね、彼の私室で、午前一時過ぎまで話込んだといふ。またチャーチルの華府訪問一行は、總勢八十人ともいはれるが、これは少し大仰な宣傳であらう。

チャーチルは、ルーズヴェルトと一緒に、二十三日、新聞記者團と共同會見を行つた。この日、記者團側から相當突込んだ質問があつたが、例の強がり一點張りで、

『シンガポール方面の情勢は、憂慮すべきものがあるが、英軍は米軍と共に、全力を盡してこの基地を防衛し、情勢が有利に轉じたら、日本に對し反撃する』と語つた。その舌の根も乾かぬうちに、シンガポ

ールは陥落し、情勢はますますチャーチルの不利になつて行くのである。

この英米華府會談には、連んでソ聯、重慶、加奈陀、蘭印、濠洲代表を参加させることにし、ソ聯大使リトヴィノフ、重慶外交部長宋子文、同大使胡適、カナダ首相マッケンジー・キング、和蘭大使ハードン、濠洲大使ゲーシー等も出席した模様である。

一體に軍事會議、外交會議でも、眞に大事を決するには、一人か二人かで、肚から決めてかからねば、出来るものではない。それに利害相反し、感情思惑みな異にする各國の寄合、集合會議で、何が出来たものか。これが、英米流會議政治、會議外交の弱點である。

斯うなると、ニュージランド、南阿聯邦も、黙つてはゐないし、ノールウェイ、デンマーク、ベルギー等の亡命政府の代表者も、このこと出かけて来て、いろいろと陳情をする。結局華府會議は、敗將と幽靈亡者との愚痴と溜息の連發に終つ

大東亞戦争の進展を關する外交

たのが落であらう。

この會談で決定したことは、反樞軸聯合軍の編成であるが、これは、後に詳説する。ただここに見逃し難いのは、ルーズヴェルトも、チャーチルも、頻りに、ソ聯の大東亞戰爭参加を要請し、要望し、カムチャツカ、サガレンのソ聯領基地の提供を要求したことである。これには、リトヴィノフも、決定的な返答は出来ない。本國政府に傳達したのであるが、果してスターリンが、この要請を容れるか、英米の思ふ壺に入れば、ソ聯が大東亞戰爭に捲込まれることになり、かくては、ソ聯は腹背に強敵の挾撃をうけることになる。うかつに應ぜられぬ問題である。

今後のことは知らぬが、今までのところでは、ソ聯は、英米に對しカムチャツカ、サガレンの基地を提供してゐない。英米の身勝手な振舞、自分の足許に火がつくと慌てふためき騒ぎ廻るが、他所の火事には、ゆつくりと構へて、葉巻をくゆらしながら、成るべく自分の犠牲にならぬやうに、

要領よく援助するといふ手である。しかも人一倍恩を賣つて、その代價は十分採算出来る手をチャーンと打つことを忘れない。このすうい、轉んでも只は起きぬ英、米アングロサクソンのヤリ口は、ソ聯といへどもよく認識してゐるであらう。

イーデン英外相、ソ聯に飛ぶ

チャーチルが、鳴物入りで、華府に現はれてゐる頃、イーデン英外相は、ソ聯に飛びスターリンと會談して、ソ聯の積極的作戰を要請してゐる。

最初ロンドンでは、チャーチルの姿が見えなくなり、その行先が、噂されてゐたが、十二月十三日華府に現はれた。これと相前後して、イーデン外相の姿が見えなくなつたが、これはソ聯に赴いてゐることが判明した。ワシントンではチャーチル、ルーズヴェルト會談、モスクワでは、イーデン、スターリン會談、負けいくさとなれば、英國政治家も忙しいことである。

モスクワにおけるイーデン、スターリン會談の

内容に關しては、不明であるが、十二月二十九日
イトデン外相が歸國するや、英外務省は次の如く
發表した。

『スターリン、イトデン會議は、駐ソ英大使ク
リツプス（現國兩尙書、インド特派使節）、駐英
ソ聯大使マイスキーを交へて行はれ、戰爭遂行、
戰後歐洲の平和、ならびに安全保障の組織に關し
て、充分なる意見の交換を遂げた』

これに對し、十二月二十九日のニューヨーク・
タイムスは次の如く報じてゐる。

『イトデン英外相はソ聯をして、對日開戦を行
はしめようと盛んに工作した。現在では、ソ聯空
軍のみが、日本の爆撃を實行出来る地位にあるた
め、盛んにソ聯誘惑を試みた譯だが、ソ聯は、こ
の米英の誘引に對して、何等應じなかつた。

結局ソ聯は、對獨戰で、聯合國側に立つ義務を
遂行してゐるものと米英側でも考へねばならぬ譯
である』

またロンドンのデイリー・テレグラフは、『イー

驗したことの不幸なるクリスマスを迎へ、一
九四二年の新年を迎へたのであつた。

反樞軸聯合軍の結成

大東亞戰爭開戦以來、敗退また敗退に、アメリ
カ、イギリスの政府、軍當局も、驚愕狼狽、今さ
らの如く、日本の實力、日本陸海空軍の強いこと
を認識し、これを何んとか防衛せんと苦心奔走の
結果、ここに反樞軸聯合軍なるものを結成した。

これは、チャーチルはじめ、英國陸海軍首脳部
と、ルーズヴェルト以下アメリカ軍當局を中心と
して、ABCD諸國の参加によつて討議された華
府會議の結論である。かくしてホワイト・ハウス
は、昭和十七年一月三日次の如く發表した。
一、太平洋の西南地區における統一的な最高司令
部の設置は、米英兩國軍最高幹部が、ルーズヴ
ェルト大統領および、チャーチル英首相に提言
し、蘭印および諸屬領國の同意に基づき決定さ
れたものである。

デン、スターリン會議において、ソ聯側は、ソ聯
の頑強なる對獨抗戦を理由として、將來の平和交
渉において、ソ聯側に重要役割を振當られんこと
を要求したことは確かといつてよからう』
と報じてゐる。ニューヨーク・タイムスならびに
デイリー・テレグラフの報道記事を信するならば
イトデンのモスクワ訪問は、何等得るところがな
く、却つて、スターリンから、『英、米は何をして
ゐるのだ。しつかりやりなさい』とたしなめられ
た揚句に、『ソ聯は、ドイツと戦つてゐるのなか
ら、この點を充分認識して、平和會議には、ソ聯
の重要發言を支持しなさい』と要求されたことに
なる。

果せる哉、イトデンのモスクワ訪問は、何等の
收穫なく、英外務省、英政界に失望の色が濃く漂
つてゐた。

チャーチルの華府訪問も、これといふ收穫はな
く、鳴物入りの宣傳以上、實質的には意味なき工
作と終つた。かくしてイギリスは、未だかつて經

二、この地區にある海陸空軍の全勢力は、唯一の
最高司令官の指揮下に置かれる。しかしてウエ
ーヴェル大將（英インド防衛司令官）が各國の
同意を得て、この職に補補された。
三、現在東亞にある米陸軍航空部隊司令官ブレツ
ト少將が補佐し、ハート大將（米亞細亞艦隊司
令長官）が、ウエーヴェル大將の下にあつて海
軍を指揮し、ヘンリー・パウナル大將が參謀長
となる。
四、支那方面作戰には、蔣介石が最高指揮官とな
る。

以上の西南太平洋における反樞軸聯合軍は、結
成後二ヶ月にして潰滅し、ウエーヴェル司令官は
シンガポール、ジャバを見捨ててインドに歸り、
ハート大將は戦死し、反樞軸聯合艦隊は全滅し、
蘭印は無條件降服となつたのである。全く『烏合
の衆』の感が深い。

米國、中南米に魔手を揮ふ

アメリカは、ハワイ敗戦、グアム、ウエーキ島の陥落、比律賓マニラの陥落等、相次ぐ敗報に焦燥し、何んとかして頹勢を挽回せんとし、中南米諸國に猛烈に働きかけることになつた。

『南北米洲共同防衛』をスローガンとして、ブラジルの首都リオ・デ・ジャネイロに汎米會議を開くことになつた。もとより同會議開催の黒幕は、ワシントンの國務省である。

この汎米會議は、昭和十七年一月十五日開かれた。アメリカ代表として、國務次官ウエルズが出席、参加國代表を懐柔、リードすることに努めたことは勿論である。開會劈頭、ブラジル大統領アルガスが次の如き演説を行つた。

『アメリカは、日、獨、伊と戦ふ事になつた。今やアメリカ大陸の共存と通商は脅威されてゐる。南北アメリカは、その傳統的な外交政策を、強い共同の力によつて保障し、南北アメリカ諸國が一丸となつて、侵略を受けたところのアメリカと手を取つて、大陸防衛に邁進せんことを望む。』

などにある樞軸側の活動は、アメリカに取つて甚だ不利である。従つて大使館を中心に動く、樞軸側の情報機関、新聞記者などの活動を弾壓してほし。

ウエルズの註文は、差當り、このやうなものであつたが、進んで對樞軸國共同斷交案を上程させるに至つた。しかしアルゼンチン、チリ、ペラグアイ三國が反對して滿場一致可決は困難となつた。その共同斷交案の骨子は、次の如きものである。

一、米洲諸國は、その主權に基づき、各國の憲法の定めるところに従ひ、日本、ドイツ、イタリアと、外交關係を持続し得ることに意見一致す。何んとなれば日本は、この大陸の一國を攻撃し、他の二國は、これに宣戰を布告したからである。

右案に對し、アルゼンチン副大統領カスチヨは、次の如くのべて、反對意見を表明してゐる。

『アルゼンチンは、米洲連帯主義の傳統的態度

いかなる困難を忍んでも、目的を達するため、デモクラシーを守るため、戦ふべきだ』

次いで各國代表の演説があつたが、ウエルズ國務長官は次の如く、南米諸國の懐柔、煽動に努めた。

一、米國は、此の際南米諸國に、どうして呉れ、參戰して呉れとは言はない。南米諸國の行動は自由である。

一、中米諸國が既に對日宣戰を行ひ、またコロンビア、メキシコ、ヴェネズエラが、日獨伊との外交關係を斷絶してゐるが、それは、米國がやらしたのではない。

一、現在アメリカは、負けてゐる。しかしこれは軍縮會議の精神を正直に守つてゐたため、軍備が手遅れとなつた結果である。従つてアメリカが、軍備を整へ、立直るために必要な物資、軍需資材、原料を南米諸國は、どんどん賣つてほしい。

一、南米諸國のアルゼンチン、チリ、ブラジル

を持するものであるが、さりとて米大陸中の一國が、攻撃されても、自動的に參戰するとは考へぬ。戰爭は言ふに易く、行ふに難い。準備のない國が參戰して、如何なる運命に達したかは、最近の歴史が餘りに雄辯に物語つてゐる。殊にアルゼンチンは、米國を非交戰國と宣言してゐる。これ以上アルゼンチンが、樞軸國に對し、宣戰を布告しても、必ずしも、米國の利益になるとは考へられない』

かくして汎米會議も、米國の思ふ壺には、はまらず、結局、共同斷交案は、再三の修正によつて、次の如き骨抜きとなつて、漸く可決されたのである。

一、全米洲各國は、各自主權に基づき、各自憲法の條章に照して異議なき限り、米大陸一國家に對する攻撃ならびに、獨伊の宣戰布告により、日獨伊三國との外交關係繼續不可能に至るべし。かくして一月十五日に開かれた汎米會議は一月二十六日に至り、骨抜きではあるが、米洲諸國が

共同防衛、緊密提携の精神を盛る諸議案、決議を行つたのである。その採擇された決議事項の主なものを擧ぐれば次の如きものである。

- 一、對樞軸外交關係斷交案（ただし國交を回復する場合には、原則として共同たること）
- 一、樞軸國との通商ならびに財政關係の停止（アルゼンチン留保）

- 一、米洲大同團結に關する宣言を再確認すること
- 一、日本をもつて、西半球に對する侵略者と見做すこと

- 一、米洲防衛委員會をワシントンに常設すること
- 一、大西洋憲章（昭和十六年八月のルーズヴェルト、チャーチル大西洋會談）を確認し、ルーズヴェルト大統領に謝意を表すること

この他米洲諸國間の通商、資源開發等の決定を行つて、汎米會議の幕を閉じたが、アメリカとしては、かかる生ぬるい、骨抜き決議にとどまらず中米諸國同様に、南米諸國を對日戰線に捲込みたかつたのであらうが、それは失敗に終つたのである。

る。

しかしながらアメリカは、これをもつて對中南米工作を停止したのではない。あらゆる機會にドル外交、徳柔の魔手を揮つて、これを手馴づけ、思ふがままに導かんとしてゐるので、今後、中南米諸國の動向は、充分に、注意して置かねばならぬ。

チャーチル英内閣の危機

昭和十六年の歳末、敗戦に苦悶のチャーチル英首相は、本國を秘密裡に出發、ワシントンに急行し、ルーズヴェルト等と華府會談を行ひ、漸く、西南太平洋反樞軸聯合軍を結成し、インド防衛司令官ウエーヴェル大將を、最高指揮官に据ゑたが、それだけでは心許ない。アメリカの軍需品を、イギリスに輸送するよう骨を折つて見たが、何分船舶の不足と、大西洋上における反樞軸側の潜水艦の活動により思ふにまかせず、失意のままロンドンに歸來したのである。

イギリス議會は、チャーチルの失態、東亞における敗戦の責任を追究せんとして、待ち構へてゐた。チャーチルは、議會の反對攻撃を緩和せんと八方奔走し、遂にその困難なることを知るや、信任投票に訴へて、内閣危機を打開せんとし、一月二十七日、英下院において大見得を切つた。

『從來の戦況は英に取つて不利であり、事態はさらに悪化することを覺悟しなければならぬ。もし事態の悪化に對して、責任者ありとすればそれは余自身である。議會も英國国民もチャーチル自身を判決すべきである。』

このチャーチルの剛腹な信任投票要求に對しては、各議員間から反對は起つたが、如何にせん、現在の英國には、チャーチルに代つて難局を收拾する大政治家なく、結局議會は、チャーチルを信任し、チャーチルをして、内閣を改選せしめ、英國の危機に對處するより他はない破目に陥つてゐた。

しかし元英海軍軍令部長チャターパーフィールド

提督は、二十八日、上院において、マレー沖作戦の缺陷を嘆じ、チャーチル一派を非難攻撃して曰く。

『プリンス・オブ・ウェールズ、レパルス兩艦を東洋に派遣したのは、軍令部の出動命令によるものではなかつたと信すべき理由がある。兩主力艦の派遣に、なぜ有力な補助艦艇をもつて守らなかつたかは、國民ひとしく憤く不審である。余は、この兩主力艦は、海軍當局の命令によつて出動したものではなく、全く政治家の策動にあやまられたものであることを斷言するに憚らぬ。』

今世紀のはじめ英國は日本と同盟を結び、英國はその本土を距る一萬マイルの遠隔なる海上において強大なる日本海軍の支援を得て來た。日英は因縁淺からぬ間柄にあつたにも拘はらず、一部頭迷なる政治家に誤られて今日世界の最強國たる日本を敵として戦ふ愚を演じたことは千載の恨事である。

政治家にして世界の大局認識を把握してゐたならば、日本は決して英と戦争するやうなことはなかつたであらう。首相チャーチルは、責任はすべて彼一人にあると言つてゐるが、その言は壯とするも、彼がどれ程偉大であつても、國家の重責を一人で背負ふなどとは沙汰の限りである。シーザー、ナポレオンと雖も、彼等が一人で戦争したのでないことを知るべきである。』右のチャタールフイルド提督の言は、恐らく眞實であり、英國の本音であらう。しかし今さらどうすることも出来ない。チャーチルに代るべき政治家がゐない以上、議會は嫌々ながらもチャーチルを信任せざるを得なかつたのである。

泰國米英に宣戰布告

さきに、日泰攻守同盟を締結し、日本の大東亞戦争を支持し、大東亞建設の一翼をなす泰國政府は、昭和十七年一月二十五日、日曜日にも拘はらず、緊急閣議を開き、同日對米英宣戰布告を決定

し、わが日本と共に参戰、米、英殲滅の大東亞戦争に乘出すことになつた。

泰國政府の米英宣戰布告は、アンナグ・マヒドール王の名において次の如く宣言してゐる。

泰國、米英宣戰布告聲明書

米英兩國は泰國境内にその軍隊を越境せしめ、あるひは、泰國の都市を爆撃するなど、種々なる方法をもつて、泰國に對し侵略的行爲を行ひ來つた。かくの如き行爲は國際法に違反すると同時に、また人道に背馳するものである。それ故に、泰國は、泰國憲法第五十四條によつて、英、米兩國と二月二十五日正午より戦闘状態に入ることになつた。

泰國人民よ、最後の勝利を闘ひ取るために、全力をあげて、政府と協力せよ。誓つて平時の如く冷静に、各々職分に邁進せよ。泰國在住外國人および非敵國籍人よ。泰國政府によつて與へられた友邦人たるの名に値するが如く行動せられよ。かくして泰國十萬の軍隊に、進軍命令が發せら

れ、日泰攻守同盟の精神が發揮せられて、日本軍と友好裡に、協力作戦を遂行、ビルマ領に進攻したのである。

泰國が、米、英に對し、宣戰布告を行ふまでは、いろいろいきさつがあるが、決定的な事は、英國の飛行機がしばしばバンコックを空襲し、泰國國民の憤激が高潮した結果である。

坪上駐泰大使は、一月二十五日次の如く語つてゐる。

『泰國が英、米兩國に正式に宣戰布告を決定したことは、日泰攻守同盟條約上當然の歸結ではあるが、日泰兩國のため欣快に堪へない。大東亞戦争開始と同時に泰は事實上参戰したのであるが、今回の宣戰布告によつて泰は名實ともに日本と一體となり、その國運を賭し、大東亞共榮圏の建設に邁進することになつたわけである。泰國國民もこれによつて進むべき道が一層明確にされ、國民の士氣は一段とあがるであらう。』

しかしながら泰國をここまで指導して來たのは青年總理ピブン元帥である。この對米、英宣戰布告後、はじめて、二月二日、バンコックの首相官邸で、日本新聞記者と會見、次の如く述べた。その意氣込を見ても明白である。

『今回泰國が、米英に宣戰を布告したのは、目下東亞において行はれてゐる戦争を出来るだけ速かに勝利に導くためである。先般日本と泰國は、攻守同盟を締結した。泰國の参戰は、その具體化である。』

大東亞共榮圏の建設については、日本と充分なる協議を遂げねばならぬ。しかし、目下の使命は、大東亞戦争の早急なる終結にある。共榮圏建設に對するタイ國の役割は、一に、日本の態度如何にある。

この機會に、私は、日本の益々隆昌ならんことを祈つてやまない。しかしてその企圖する大東亞戦争の終局の勝利を衷心から望んでゐる。今後アジアの盟主として各方面の全アジア人を

幸福にして下さるやう希望してやまない。』
これは何んといふ純真な言葉であらう。お上手
や附焼刃ではこんな言葉は出ない。肚が出来てゐ

第四章 ABCD包圍陣の崩壊

ヒ總統日本を激賞

ドイツ・ナチスの政權獲得第九周年に當る昭和
十七年二月三十日、ヒットラー總統は、ベルリン
のシュボルツ・バラストにおいて一萬の參會者を
前に、日獨伊三國樞軸を謳歌して曰く。

『英國人と理解し合ふことの不可能なることを
知つた余はドイツ外交を明確な基礎の上に置く
ことを決意した。すなはち三國樞軸の確立であ
る。まづ同様の歴史をもつて發展して來たイタ
リアのファシストとわがナチ主義は結合した。
この結合に加つた三番目の國家が日本である。
そこで興味あるのは、何れの陣營が果してより

る。進むべき途が明確である。青年首相ピブン元
帥の御健在を祈つてやまない。

強いのである。失ふにも失ふ何物をも持たず、
ただ獲得すべき物のみを持つてゐる國家群と、
失ふもののみを持ち、新しく獲得する何物をも
持たざる國家群と何れが強いのか、英國はこの上
何を欲するであらうか。

ドイツが、ソ聯に與へた最初の一撃が、決定的
なものであつたことは、恰も日本が東亞におい
て、最初の一撃において、大勢を決した如くで
あつた。

日本海軍の活躍は、ドイツ海軍の負擔を輕から
しめた。今後如何なる事態が生ずるとも、また
數において如何に多數な敵が存在しようとも、
來るべき戦争は必ずや樞軸軍の大勝利に終ること

とは明かで、かつその上、われわれは、日本とい
ふ強力な盟邦國を有してゐる。日本が今日まで、
東亞において收めた戦果の如何に大であるかは、
吾人の評價し得るところではない。吾人にとつて
は、戦ひ、そして勝つといふ唯一の途があるのみ
だ。』

滅多に、他國や他人を賞讃せぬヒットラー總統
も、今度の、大東亞戦争における日本の大戦果に
は、頭が下つたのであらう。かくも『強國日本』
を讀へたのであつた。

さればこそ、日本は、大東亞戦争の緒戦三ヶ月
にして、ABCD包圍陣を寸断破砕してしまつた
のである。偉大なる哉皇國日本、その無敵陸海軍
は、英國のチャタールフィールド提督をして、『世界
最強國日本』といはしめ、ヒットラー總統をして
『われわれは日本といふ強力な盟邦國を有してゐ
る』と讃嘆せしむるに至つたのである。

ABCD包圍陣の發足

昭和十六年の夏、重慶の駐英大使たりし郭泰祺
が、歸國の途アメリカで『ABCD同盟を結んで
對日包圍陣を布かう』といつたが、その頃より蘭
印も、對日敵性陣營を強化するに至り、結局AB
CD包圍陣と八益しくいはれるやうになつた。

Aとは America Bは Britain Cは China
の頭字ではあるが、事實は重慶(Chungking)
を意味し、Dは Dutch East India すなはち蘭
領東印度を指すのである。要するにアメリカ、イ
ギリス、重慶、蘭印の各頭字を取つて、これらの
諸國が結合し、同盟して、日本を包圍し、これを
制壓せんとしたのである。

殊にこのABCD包圍陣が、最も、急速に具體
的な行動を起したのは、昭和十六年七月二十五
日、日本、佛印共同防衛協定を締結し、佛印に對
し、日本軍が平和進駐するや、俄然狼狽した英米
諸國が、日本の行動を曲解し、侵略行爲と呼び、
不法にもアメリカ政府は、日本資産を凍結し、對
日輸出の一切を事實上禁止同様の處置を執つたの

である。

これに對し、英國政府も、アメリカ同様の處置を執り、インド、濠洲、ビルマ、加奈陀に至るまで、本國政府の對日壓迫策に呼應して、それぞれ資産凍結、通商停止の暴舉に出て、重慶もどより對日抗戦を呼號し、蘭印政府も、英、米に追隨、日本資産を凍結、その對日石油輸出を全面的に禁止するに至つた。

このABC諸國の不法なる對日包圍壓迫、經濟斷交によつて、日本の疲弊を待ち、戦はずして勝を占めんとする横暴なる態度には、帝國日本一億の同胞は、憤激の極に達した。それ程彼等が挑戦して來るならば、『腰の尖鞘は伊達にはささぬ。日本刀の斬味を思ひ切り見せてやりたい』氣持で一杯であつた。しかしながら日本は戦争を好むものではない。出來るならば、平和の裡に、この包圍陣を解消せしめ、太平洋、大東亞の平和を望みわが政府においても、日米交渉を繼續したのであつた。

チャーチル、ルーズヴェルト會談

然るに、英、米の對日挑戦は、毫も緩和することなく、益々強化されて行くのみならず、昭和十六年八月十日より大西洋上において、英國の主力艦プリンス・オブ・ウェールズ號で、チャーチル英首相、ルーズヴェルト米大統領の會談が行はれた。この會談には、英、米兩國の陸海空軍の首脳部が參集し、英米合作による世界征覇を目論み、これが検討を重ねた上、八月十四日に至り次の如き八項目にわたる英米共同宣言が發表された。

英米共同宣言

- 一、英、米兩國は領土その他の擴張を求めざることを
- 二、關係國民の自由意志によつて、表明された希望に背馳するとき領土的變更を行はざること
- 三、大戰の結果政府ならびに主權を奪はれたるすべての國民に對して、彼等の意志に従つて、政府形態を選択し、主權と自治とを回復する權利

を尊重すること

四、戰勝國の大小、または戰敗國の區別なく、通商ならびに世界資源獲得の平等權について充分なる尊重をなす

五、英、米兩國はすべての國が、經濟の分野において、勞働水準の改善、經濟的發展、および社會安定の確保を目的として全的に協力することを欲する

六、ドイツ獨裁を完全に破壊したる後に、英米兩國はすべての國家に對して、彼等が自己の領土内で、安全に居住し得る方法を與へ、かつすべての土地において、すべての人間が、恐怖および缺乏から釋放されて生活し得る保證を與ふるが如き平和の樹立されんことを欲する

七、右の如き平和は、すべての人間が、公海および大洋を何等の妨害なしに通航し得せしむ

八、現實的ならびに精神的理由の下に、世界各國は武力を放棄しなければならぬと信ずる。しかして陸海空軍が、侵略者によつて使用される限

り、將來の平和は維持されないから、恒久的、

一般的安全保障體制樹立を前にして、まづ侵略國の軍備縮小は不可欠と信ずる。同様に平和愛好國家をして、軍備を制限し、その負擔を軽減せしめるための一切の手段を助長することに努める。

以上の英米共同宣言は、まことに、人を喰つたものである。戦後は英米が盟主となつて世界を指導支配して行かうとする『英米の世界支配宣言』であるが、果して今日の敗戦で、その様にうまく参りませうか。馬鹿々々しい彼等の妄想である。その乗艦プリンス・オブ・ウェールズが撃沈された如く彼等の妄想も雲散霧消するであらう。

そもそもこの會談は、ルーズヴェルトから提議され、英、米兩巨頭が、大西洋上に會して如何にしたならば、この第二次世界大戰に勝つことが出来るか。その戰略、政略の両面から審さに検討した。しかして、この戦争に勝ち抜き、戦後は、英米兩國が盟主となつて、世界を指導しようといふ

大雑把な結論に到着したのが前記八項目の共同宣言である。

彼等は、まづソ聯を徹底的に利用することを考へた。獨逸とソ聯とを闘はしめて兩虎互に傷つくことを望んでゐる。東亞においては、重慶を援助し、日本に抗戦せしめ、ABC包圍陣によつて日本を威嚇し、經濟斷交によつて日本の疲弊を待てば、坐して、日本を屈服せしめ得るものと甘く考へたに違ひない。それでこそ、あのやうな人を喰つた共同宣言が發表出來たのである。

ルーズヴェルトや、チャーチルの大西洋會談こそ、彼等の認識不足であり、日本の實力を過小に評價し、己れの自力を妄想したればこそ、大東亞戰爭の緒戦において大敗を喫するに至つたのである。

戦前チャーチルの豪語

大西洋上のルーズヴェルト、チャーチル會談で人を喰つた英米共同宣言を發表した彼等は、それ

ぞれ歸國したが、チャーチルは、八月二十四日ロンドンにおいて、歸國第一聲のラジオ放送を行ひ相變らず豪語をならべて、樞軸側を誹謗した。その東亞關係をあぐれば次の通りである。

『侵略によつて苦難をなめ、荒廢に沈淪すべき事情にある大陸は、ひとり歐洲だけではない。日本軍部は過去五年間の長期にわたり、ヒットラー及びムツソリーニの手法をもつて、新歐洲の啓示であるかの如くこれを受け容れすべてヒットラー、ムツソリーニのやり口を眞似てその態度、行動を定め、支那五億の民衆を侵略蹂躪してゐる。』

日本軍は、支那の廣大な地域を無益に彷徨馳驅し、至るところ殺戮、破壊、崩壊を恣にし、これを呼んで支那事變と稱してゐる。今や日本軍は征朝の手を南支那海にまで伸ばし、憐むべきヴィン・フランスから、インド支那を奪ひ、軍事行動によつてタイ國を脅威せんとしてゐる。

今や日本軍はシンガポールを威嚇し、英國、濠洲の連鎖を脅かしてゐると共に、米國の保護下に

ある比律賓を脅迫してゐる。日本軍のこの動きは阻止しなければならぬ。平和的解決を齎らさんとして、あらゆる努力がなされるであらう。

米國は、日本の合法的權益に對し、最大限の保障を與へんとする正しい友好的解決に到達せんとして無限の忍耐をもつて努力してゐる。われわれは、これ等の交渉が成功することを熱心に希望する。しかし余は、これ等の希望が、實現しなかつた場合には、勿論われわれは躊躇なく米國側に立つてあらゆることを言明する。

これはチャーチルの豪語である。大東亞戰爭の豪語である。大西洋會談といひ、また、この思ひあがつた放送といひ、彼等は、戰爭に訴へる前にあらゆる手を打つて、戦はずして目的を達せんとする謀略的意圖に過ぎない。從來この手で、屢々成功して來た恫喝外交の本音を吐いてゐるのである。それにしても、大東亞戰爭の緒戦において、大敗を喫し、あはてふために、ワシントンにルーズヴェルトを訪ね、漸く西南太平洋反樞軸聯合

軍を結成し、その最高指揮官にウエイヴエル大將を据ゑて歸英し、英國議會の非難攻撃の前に立つて、『敗戦の責任はチャーチルにあり、議會も、英國民も、チャーチルを判決せよ』と悲痛な演説を行つたのに比して、全く隔世の感がある。

ルーズヴェルト頻りに暗躍

大東亞戰爭開戦直前におけるルーズヴェルトの暗躍は、またチャーチル以上であつた。彼は、重慶を徹底的に利用して、日本に抗戦せしめ、日本の消耗を持つことにした。従つて重慶には次から次へと、ワシントンから顧問その他の軍事代表が送られた。すなはち政治顧問ラチモア博士、經濟財政顧問フォックス博士、軍事顧問マクルーダー代將の如きがそれである。

これ等の各顧問は、ルーズヴェルトの代表として、重慶に乘込み、蔣介石のお目付役となり、對日平和論を抑へて、徹底的抗戦を鼓吹し、支那人の血と肉を犠牲にして、その青年を銃口の前に立

たしめて、意義なき死の抗日戦を強要したのである。これに躍つた蔣介石、重慶指導部も愚劣の骨頂であるが、かくの如き無謀な抗戦を強ひたルーズヴェルトは、自己の野望を遂げるために、東洋人を相闘はしめたのである。その陰謀、謀略、罪悪は、断じて許すべからざるものである。

また比律賓に對しては、比律賓政府の軍事最高顧問マックアーサー大將を起用して、米國東亞軍最高指揮官に据ゑ、比律賓軍を再編成した。これが、大東亞戦争に當つて、バタン半島、コレヒドール島に立籠り、無益な抗戦を續けた米比軍の基礎をなしたものである。

またアジア艦隊司令長官ハート大將は、昭和十六年六月をもつて、滿六十四歳の停年になつたにも拘はらず、時局重大化の理由で、停年制を特に延長し、ハートを居据わらせ、マニラを根據地に、シンガポール、蘭印軍と連絡を取りABC包圍陣強化に奔走せしめたのである。

戦を布告した。その結果は、無條件降服となり、陸軍、海軍、空軍も國土諸共、一切残らず、失ふに至つたのである。

要するにルーズヴェルトは、己の野望を遂げるために、太平洋を隔て遠くアジアの地にまで手のはし重慶を煽動し、比律賓の軍事強化を圖り、蘭印を對日抗戦に驅立て、結局は、如何とも爲す能はず、すべてを見殺しにするといふ残酷なる仕打をなしたのである。これに躍らされた重慶、比律賓、蘭印、また英國側のマレー、新嘉坡等は、元も子も無くするの悲劇を招來した。これも自業自得、誰をうらむことも出来ないものであるが、それにしても、ルーズヴェルトの罪悪は大きいのである。

ABC包圍陣の潰滅

日本軍の佛印平和進駐以來、英米蘭の日本資産凍結、經濟斷交、さらに、チャーチル、ルーズヴェルト大西洋會談によつて發表した英米共同宣言

制を延期されたばかりに、大東亞戦争で、マニラを脱出し、ジャバ海軍と合體してゐたが、遂にジャバ沖海戦において、旗艦ヒューストン號(一〇〇〇〇トン)と共に撃沈せられ、海底の藻屑となつたのである。

さらに、ルーズヴェルトは、その祖先が和蘭のローゼンベルト家から出たもので、十七世紀にアメリカに移民したものである。従つて、オランダ人とは、祖先が血を同しくするといふ意味を強調し、アメリカは決してオランダ、蘭印を見捨てることはしない。必ず救援するから、ABC陣營の一翼として、對日包圍、敵性發揮をするやうに仕向けたものである。

蘭印側も、ルーズヴェルト家が、和蘭の出身であり、われわれと血を同じくしてゐる以上、ルーズヴェルト大統領が、ワシントン白聖館にゐる間は、必ずアメリカは、われわれを援助するものと妄信し、日本資産を凍結し、石油輸出を禁止した上、遂に米、英の尻馬に乗つて、無謀にも對日宣

——中南米諸國では、これを、大西洋憲章と呼び一月二十六日のリオ・デ・ジャネイロにおける汎米會議では、特に、この『大西洋憲章』を確認してゐるが——それ以來、ABCの對日包圍は日に日に加つてゐたのである。

殊に英國の東洋根據地シンガポールには、昭和十五年十二月、東亞軍司令部を設け、ポツバム空軍大將を派遣して、これが軍事施設の強化を圖つた。マニラ、香港、シンガポール、バタヴィアの間に、英、米、蘭、濠の司令官が頻りに往來した。

マニラのマックアーサー大將、ハート海軍大將シンガポールのポツバム大將、蘭印のポートルン中將等は、得意になつて、ABCの強化を豪語し、盛んに宣傳し、盛んに對日威嚇、恫喝のデモンストレーションを行つてゐたのである。

また重慶にあつては蔣介石一派が、日本の實力を輕視し、經濟的に日本は、今に手をあげるであらうと宣傳し、己れの抗戦力を誇大に放送し、こ

れ亦過信妄想してゐたのである。

ワシントンも、ロンドンも、これ等の放送、威嚇、恫喝外交に自らも酔ひ、日本の實力を過小に評價してゐた。孫子の曰へる如く『敵を知らず、己をも知らざるものは、百度戦ふて、百度危し』といふことを、彼等はこの度、身をもつて體驗したのである。

まづ十二月八日、ハワイ真珠灣を奇襲した海軍航空部隊、特別攻撃隊によつて、アメリカ太平洋艦隊の主力は撃滅され、十二月十日、マレー沖の海戦で英國主力艦プリンス・オブ・ウェールズ、レパルス兩艦撃沈され、十二月十二日には、グアム陥落し、十二月二十三日には、ウェーキ島陥落し、十二月二十五日には、香港に白旗があがつた。

一月一日には比律賓の首都マニラ陥落し、二月十五日には、シンガポール陥つ。三月八日にはピルマの首都ラングーンは皇軍の手に歸し、三月九日には、蘭印および英、米、濠洲合軍が無條件に降服した。かくして、ABC D包圍陣は完全に破

碎されたのである。

殊に二月二十八日のジャババ海戦、その附近の海戦において英、米、濠、蘭の聯合艦隊は、全滅の悲運に見舞はれ、西南太平洋、インド洋の制海權は、帝國無敵海軍の手に歸することになつた。

アメリカの太平洋艦隊、アジア艦隊、イギリスの東洋艦隊、蘭印艦隊、濠洲艦隊の主力諸艦艇が次々に撃沈された今日においては、如何に、英、米が、反撃に出んとしても、その掩護海軍力のない以上、手も足も出ない状態である。

かくてこそ、皇軍の占領せる大東亞諸國の各地が、未だ敵國の反撃をうけることなく安泰たる中に、戦後の建設に向つて猛進出来るのである。

この大戦果、かくの如き赫々たる戦捷をかち得た國が他にあるであらうか。そのあざやかなる戦果は、人間業ではなく、神業のやうに思はれてならない。嗚呼、神國日本。尊き哉、偉大なる哉、『日出づる國』、『東方の大八洲國』、一度起つて大東亞に不滅の金字塔を打建てたのである。偉大な

る哉神國日本、偉大なる哉帝國陸海軍、萬歳、萬歳、萬々歳。

英、濠洲共に悲鳴をあぐ

シンガポール陥落の悲報には、さすがに、剛腹なチャーチルも泣いた。チャーチルは、二月十五日午後九時（日本時間十六日午前五時）英國および反樞軸聯合國民に宛て、悲壯なる放送演説を行った。

『今晚、余は、オーストラリア、ニューギランド、インド、ビルマのわれわれの友人に話かけんとするものである。また米國、ソ聯、オランダ、支那のわれわれの友人にも話かけんとするものである。』

余は諸君のすべてに、英國の軍事的な大敗北の悲しきことを報告しなければならない。シンガポールは陥落した。全マレーは、今や日本軍の制壓するところとなつた。何人といへども、空に、海に陸に、肉弾戦にその眞價を發揮した日本軍の實力

とその實録を過小評價してはならない。英國はたとへ準備してゐたとしても、日本軍に對し些少の勝目さへ無かつたのである。

オーストラリア、オランダその他の西南太平洋の他の聯合諸國民は、英國がそれ等諸國に、さらに増援軍を送らなかつたことに對し、非難を浴せてゐるが、英國は大西洋戦、地中海戦、北阿戦ならびに對ソ援助で、英本國を持ち應へるだけで手一杯であつた。一臺の飛行機、一臺の戦車、一隻の艦船、一門の高射砲といへども無爲に遊んでゐたものはない。

しかし英國國民に告げたいことは、一九四〇年夏には英國は力盡き果てたものと全世界から信ぜられ、しかも孤立無援であつたが、今日はすべて孤立ではない。

余は諸君が、この不幸の時に際會し、冷靜と決意とを失ふことなく、世界に對し、如何なる不運をも悪びれず、かつ新しき力を奮起して切抜け得る能力あることを示されるやう切望する。』

このチャーチルの悲鳴を聴く時、昨年八月、大西洋會談後、彼の歸英第一聲のラヂオ放送を思ひ合せて、變轉極りなき國際情勢の悲劇を觀るの感がある。

しかしチャーチルが如何に悲鳴をあげ、如何に言ひ譯しても、オーストラリアが、それで満足すべき道理はない。殊に濠洲は、シンガポール陥落し、ジャバ、スマトラの蘭印が陥落し、ニューギニア亦皇軍の占領するところとなつては、危険刻々迫る。居ても、立つても安んじてゐられない不安焦燥に苦悶してゐる。

そこで英本國に救援を求め、アメリカに救ひを求め、盛んにS・O・Sを放送してゐる。折も折、比律賓の東亞軍總司令官マックアーサー大將は、バタアン半島、コレヒドール島要塞を死守してゐたが、到底防衛し切れなくなつて、部下米比軍將兵を見捨て、家族同伴、飛行機で脱出、濠洲に亡命して來た。それは、蘭印が無條件降服してから一週間の後三月十七日のことであつた。

件まで起つた。それは、チャーチルが、濠洲首相カーチンの同意を得ずして、駐米濠洲公使ケーシーを、西亞常駐相に任命した。これに怒つたカーチンは、チャーチルに喰つてかかり、濠洲各新聞も亦、一齊に非難攻撃を浴びせた。

そこでチャーチルは、三月二十二日、ケーシーの西亞常駐相任命に關聯して、チャーチル、カーチン兩首相間の往復電報を公表するに至り、兩者の和衷協同は、見られないところまで來てゐる。かくの如く英、濠洲に、意見の喰ひ違ひ、感情の疎隔が起るのは、一に濠洲に危機迫り、これを英本國が、救援せぬために、事毎に摩擦が起るのである。世の諺にも『貧すれば口論多し』といはれるが、英帝國も落目となり、濠洲も足許に火がつき騒ぎ立てる結果に他ならない。

インドの獨立運動

イギリスの悩みは濠洲問題ばかりではなく、印度に、獨立運動の火の手があがつたことで

濠洲政府は、直ちに、マックアーサー亡命大將を迎へて、濠洲における反樞軸聯合司令官に就任方を要請した。ワシントンにも同様の要請が發せられた。ルーズヴェルトは、濠洲政府の要請に應じて、マックアーサー大將を、濠洲における聯合軍司令官に任命した。濠洲軍は、米國の亡命將軍の指揮下に置かれ、完全にイギリス、濠洲軍の面目は、丸潰れとなつた。

英、濠洲の面目は丸潰れとなつても、一マックアーサー大將にすがり、アメリカの救援を待たねばならぬ弱味は、濠洲にあるのである。

濠洲はわが臺灣の百倍もある二百九十七萬四千方哩といふ廣大なる地域を領有しながら、人口は僅かに六百八十餘萬を出ず、わが東京市の人口ほどもない。しかも白濠主義を唱へて、東洋移民の門戸を閉鎖して來た濠洲は、自力で、その國土を防衛する自信がない。それは餘りに、人的資源が乏しいからである。

そこへ持つて來て英濠間に水をさすケーシー事

ある。

大東亞戰爭開始以來、日本陸海軍の赫々たる大戦果は、大東亞民族に偉大なる精神的影響を與へた。彼等は英、米、オランダ軍等は強いものと考へてゐた。どの強い英、米、オランダ等に及向つても、勝目はない。仕方がないからその壓制下に擯取されて行くといふより他に生きる途がなかつたのである。

然るに日本軍は、これ等の英、米、オランダ、濠洲軍などを一舉に叩き伏せた。その強大なる兵力、實力、兵備、機械化部隊には全く驚嘆した。その上日本海軍の強いこと世界無比である。敵國側が震へあがると同時に、大東亞民族の眼の前に見せた日本軍の實力、その腕前は、まことに偉大なる雄辯である。

ここにおいて大東亞の諸民族が、日本を父とし、兄として、その指導下に、多年の英、米、蘭の壓制より脱出せんとするは自然の勢ひである。殊に東條總理大臣が、帝國議會において『ビル

マ人のビルマ建設、インド人のインド建設』に協力を惜しまない、今こそイギリスの壓制下より脱出すべき絶好の秋であると強調されたことは、如何に、ビルマ人、インド人を感動せしめたか。かくて、ビルマ、インドに、民族國家建設の國民運動の火の手があがつたのである。

この情勢に驚いた英國政府は、チャーチル内閣改造に當つて、新たに國爾尙書として入閣した前駐ソ英大使クリツプスをインドに派遣し、國民會議派、インド教徒代表、回教徒代表等と會見せしめ、インド各派の指導者を懐柔し、その獨立運動の火の手を消し、進んでインド民衆を英國に協力せしめ、もつて、日本軍の進撃に備へて、インドの防衛をはからんと企圖してゐるのである。

そこでクリツプス特使は、三月中旬インドに赴き、インド懐柔に、血みどろの奔走を續けたのである。しかしながら、その使命達成は困難であつた。英國政府から、インド懐柔のために、提案された内容として傳へられたところに依れば、

得る。

右の英國提案は、何等即時獨立を許容するものではなく、前大戰の如く、インド民衆を、英國に戰時協力をさせて置いて、戦後自治を約してゐるに過ぎず、一種の先物手形であり、或は空手形となるかも知れない。

殊に、宗教上の少數民族保護の一機關を設けるといふのは、回教徒その他の懐柔を意味し、自治を許しても、宗教上、民族上の内争對立を激成するやうに仕向け、その間に處してイギリスが、インド全體の支配權を確保せんとする極めて陰險な謀略がふくまれてゐる。

かかるが故に、インド國民會議派は、英國提案を歓迎せず、クリツプスが、如何に前領袖ガンジー翁、現幹部ネール、同會議長アザツト等首腦部と屢々會見、勸説これ努めても、國民會議派を動かすことは出来なかつた。

かかる情勢のうちに、四月二日午前、印度國民會議派運用委員會は、三十七票對十六票の大差を

一、新しきインド聯邦（インデアン・ユニオン）は、一自治領を構成し、英國の王冠に對する共同の忠誠によつて、英本國および他の諸自治領と結合する。但し新自治領は、あらゆる意味において、英本國または、他の自治領と同等の地位に置かれ、内政外交に關し、如何なる點においても、從屬な立場には置かれぬ。

二、インド内の各州が、新憲法を受諾せず、現行憲法による地位を維持せんとする權利を認めらる。かつ新憲法起草委員會が、人種的ならびに宗教的少數民族に對し、保護を加へることを條件として、英本國は、新憲法を速かに受諾するであらう。インドは新憲法において、人種ならびに、宗教上の少數民族保護のため、一機關を設け、これに關し英本國との間に、條約を締結する。

三、新憲法起草委員會は、戰爭終結後、新選舉による英領インド各州議會の全員を選挙人として選出し、王侯領も亦、これに代表を參加せしめ

もつて、これを拒否することに決定した。クリツプスは、なほ最後の工作のために努力を續けてゐるが、これが成功は、困難である。

かく英國は、インド懐柔に手を凝らしてゐるが、さらに讓歩して、インド國民會議派の受諾を待つか、それとも、飽くまで強硬に彈壓して、インドの焦土化をはかるか。英國の臺所ともいふべき寶庫インドは、爆發直前の非常なる危険状態にある。

日ソ漁業暫定協定を延長

大東亞戰爭以來、わが國民の關心は、西南太平洋に向けられてゐるが、北方の重要性を忘れてはならない。殊に五月頃より北洋の漁場が開けるに及んで、北洋漁業はどうなるか、北方の護りはどうか、これに充分なる注意を拂はねばならぬ。

わが北洋漁業は、ポーツマス條約によつて獲得され、明治四十年の日露漁業協約で具體化されたものである。この協約は、有効期間十二年と規定

された關係上、大正八年に期間満了し、その後
は、自衛出漁を行つてゐたのである。なんとなれば、當時露國は革命政府が出現し、日露間に國交
が停止されてゐたからである。

大正十四年一月、日ソ間の基本條約が成立し、
同年末から漁業協約改訂交渉を開始、三年間にわ
たつて交渉が繼續された。漸く昭和三年一月、當
時のわが駐ソ大使田中都吉氏とカラハン外務人民
委員との間に、現行の日ソ漁業條約の調印を見る
に至つた。

田中、カラハン漁業協定は、有効期間八箇年で
あつたため、昭和十一年、同條約の更新期に當り、
わが方は、同條約の不備と紛争原因の根絶を期し
て、新條約の締結方をソ聯政府に通告し、當時の
酒匂代理大使とカスロフスキー樺東部長との間で
交渉を續けた。この交渉は、殆ど成立を見てゐた
が、折柄、日獨伊防共協定が出来たのを、ソ聯側
は不満とし、『國內手續未了』を理由として調印
を拒絶した。

わが外務當局としては、進んで、長期漁業條約
の締結に向つて努力するはずであるが、何分にも
今日の如き國際情勢である。

殊に、日ソ間は、中立條約によつて、中立關係
にあるが、日本は、大東亞戰爭によつて、アメリ
カ、イギリス、オランダ等と戰爭してゐる。一方
ソ聯は、イギリス、アメリカ、オランダ等と聯合
國を形成し、ドイツ、イタリアと戰つてゐる。極
めて複雑微妙な關係にあるので、外交交渉も亦微
妙にして、簡單には行かぬ。

しかしながら日ソ漁業條約も、現行協定が一年
間延長されたのであるから北洋漁業にはわが漁船
が出漁出来るわけである。ただし大東亞戰爭以
來、太平洋をはさんで、アメリカと交戦中であり
アメリカの北方基地、アラスカ、アリニューシヤン
群島も、北洋漁場に接近してゐるのであるから、
わが出漁を妨害するかも知れない。餘程の警戒を
もつて、これに當らねばならぬことは謂ふまでも
なし。

その後やむを得ず重光、スドモニヤコフ間に現
行條約の一年延期を内容とする第二次暫定協定が
締結されたのである。これより毎年暫定協定を續
けられて來たのである。

この間、昭和十四年九月歐洲大戰起り、一方ノ
モンハン協定によつて、日ソ間の調整氣運動き、
野村外相よりスメタニン駐日ソ聯大使に對し長期
新漁業條約締結を交渉したが纏まらなかつた。昭
和十五年にも東郷、建川大使が漁區安定を根本問
題とする條約締結を交渉したが、これまたものに
ならず、昭和十六年一月第六次日ソ漁業暫定協定
が締結されたのである。

これと同時に日ソ間は委員を設け、長期漁業條
約を結ぶことに決したのであるが、國際情勢の動
きは微妙で、これも實現せず、昭和十七年三月二
十日、クイブシェフ市に於て、わが建川大使と、
グイシンスキー外務人民委員代理との間に第七次
日ソ漁業暫定協定を締結し、一年間効力を延長す
ることになつた。

アメリカ陸海軍は、アラスカ、アリニューシヤン
列島を足場に、北方より反撃せんと意圖あるも
のと考へられる。アメリカ太平洋岸よりシトカを
經て、ロチャツク島基地に至り、それよりアラス
カ半島に沿つて、アリニューシヤン列島のウナラス
カ島グツチハーバーに出で、ここを根據地とし
て、アリニューシヤン列島一千キロを西に進攻し、
日本に最も接近せるキスカ、アツツ島に至り、こ
を基地に窺ひ寄りんとするものと推定される。

しかしながら、アリニューシヤンの西端、日本へ
の最短距離アツツ島から東京までに、三千五百キ
ロ、グツチハーバーから四千三百キロ、到底空の
要塞ボーイングC一七型、コンソリデーテッド双
發艇といへども、日本に飛來し、空襲して基地に
歸することは不可能である。

ソ聯が、基地をアメリカに提供せざる限り、ま
づ北方から、直接アメリカ機によつて空襲される
恐れはない。ただし航空母艦で接近して來れば、
これは別だが、無敵日本海軍の存在する限りこれ

も困難であらう。

もつとも、日本漁船が、北洋に出漁した場合、これは、アメリカのアツツ島またはキスカ基地ならば、哨戒圏内に入るし、また敵の潜水艦も考慮

第五章 帝國南方經營の構想

東條首相の聲明

東條總理大臣は、帝國第七十九議會の再開劈頭（昭和十七年二月二十一日）、大東亞戰爭の指導方針、大東亞建設の具體的方針を卒直明快に闡明された。

大東亞戰爭の指導方針としては、帝國は、大東亞における戦略的據點を確保すると共に、重要資源地域をわが管轄下に收める。これによつてわが戦力を擴充しつつ、盟邦獨伊兩國と協力相呼應して、積極的作戰を展開し、米・英兩國を屈服せしむるまでは、斷乎として戦ひ抜く氣魄を明確にさ

に入れねばならぬから、北洋漁業に當つては、飽くまで慎重に、警戒し、油断なく出漁することが絶対に必要である。

れた。

大東亞の安定は、一に帝國が根幹となつて、これを指導し得てはじめて確保される。ここに帝國の大東亞防衛陣の鐵壁の備へが必要である。この大東亞防衛に必要な據點は、帝國自らこれを把握して、これを適當に措置しなければならぬ。その他の地域においても、各民族が、生成發展を遂げる上においても、その民族の傳統、文化に應じて、それぞれ適當な措置を講じておかねばならぬ。

東條首相は、この點を明確にされた。

まづ香港およびマレーは、多年英領であつた上

に、東亞禍亂の基地となつてゐたので、帝國はこれを徹底的に、その禍亂の根元を排除するばかりでなく、これ等を大東亞防衛の據點たらしむる。

比律賓は、今後民衆が、帝國の遂行しつつある大東亞戰爭の眞意を解し、大東亞共榮團の一翼として、協力する場合には、帝國は欣然として獨立の榮譽を與へる。ビルマ等についても、帝國の企圖するところは、比律賓と同様である。

蘭印および濠洲は、現在のやうに帝國に對して抗戦を續ける場合は、容赦なく撃碎する。しかしその住民が、帝國の眞意を解して、協力的態度に出れば、その福祉と發展とのために、十分理解をもつて、これに力を添へるに吝ではない。

この雄大な構想の下に、大東亞建設は、着々遂行せられてゐるのである。また南方經濟建設の具體的方針は、

第一、資源獲得、特に戰爭遂行上、緊要なる資源を確保すること。

第二、南方資源が敵性國家群に向け流出するを阻

止すること。

第三、わが軍の生活を、現地に確保すること。

第四、在來の企業をわが方に協力するやう誘導すること。

以上の四原則によつて、南方經濟建設の巨歩が、歩一歩と進められてゐるのである。

さらに東條首相は、二月十六日、帝國議會において、シンガポール陥落に伴ふ大東亞戰爭第一次の祝賀日たる二月十八日を前にして、ビルマ、インドに對する構想雄大な施政演説を行つた。

『今や、かつて英米の東亞侵略壓制の根據であつたシンガポールその他の要衝は、大東亞諸民族のために、新秩序建設と防衛の據點として、限りなき前途の希望と榮譽の下に、甦りつつある。』

皇軍はビルマ方面においても、攻撃の歩を進め要衝は逐次我皇軍の手に歸しつつある。帝國のビルマ進攻の眞意は、英國の軍事據點を覆滅すると共に、英米の援蔭路を遮断するにある。固よりビルマ民衆を敵とするものではない。ビルマ民衆に

して、我方に協力して来るならば、『ビルマ人のビルマ建設』に積極的協力を與へんとするものである。

また數千年の歴史と光輝ある文化を有するインドも亦、英國の暴虐なる壓制下より脱出して、大東亞共榮圈建設に参加すべき絶好の秋である。帝國はインド人が『インド人のインド』として、本來の地位を回復すべきことを期待し、その愛國的努力に對しては、敢て援助を惜しまざるものである。もしそれインドが、その歴史と傳統とを省みず、その使命に未だ覺醒せず、依然として英國の甘言と好餌とに迷ひ、その願使に従ふにおいて、私は、ここに永く印度民族再興の機会を失ふべきを憂へざるを得ない。

右の東條首相の演説によつて、如何にビルマ人に力を與へたか、インド人に對して大いなる信頼の念を與へたかは、想像に餘りあるものがある。『ビルマ人のビルマ建設』運動は熾烈となり、インドにおいては、獨立運動の火の手が、全インド

に野火の如く燃え盛つてゐるのである。

南方經營着々進む

まづ南方經營の最初の人事として、一月十九日、陸軍中將磯谷廉介氏が香港占領地初代總督に親補された。この香港占領地總督は、臺灣總督、朝鮮總督など拓務大臣の指揮をうける一般總督とは、その性質、機能を異にし、純軍令機關として新設されたものである。それは占領地の防衛、治安の確保と、軍政の適正を目的とするもので、日露戰爭直後關東州に軍政が布かれたとの、同じ見地に基づくものである。

越えて二月三日には陸軍省から軍政顧問が發表された。政界より前鐵相永田秀次郎、前農林政務次官砂田重政、財界より前逓相村田省藏、華青界の逸材徳州義親侯が陸軍省囑託として現地に送られることになった。永田秀次郎、村田省藏、砂田重政三氏は、特に親任官の待遇を賜ふことになった。

ついで二月六日には、海軍省顧問委囑が發表された。前商工大臣藤原銀次郎、前企畫院總裁竹内可吉、前大藏次官大野龍太、前警視總監山崎巖、日商會頭藤山愛一郎の五氏である。

さらに三月七日には、昭南特別市長に、大連茂雄氏が任命され、八田三郎、久保田峻、久慈學氏等の内務省前知事組、片山省太郎中將、伊丹政吉、助川靜二、砂川泰藏各少將等がマレー各州の知事にそれぞれ任命された。

三月十七日には、前内務省警保局長大塚惟精、前ブラジル特命全權大使林久治郎、前シンガポール總領事郡司喜一、マレーの實業家千田幸其太郎、前南洋拓植會社常務理事杉田芳郎氏等を陸軍司政長官に任命した。

同日付で前内相兒玉秀雄、前拓務政務次官櫻井兵五郎、前拓務次官北島謙次郎氏に、陸軍の事務を囑託されることになった。兒玉秀雄、櫻井兵五郎兩氏は、特に親任官待遇、北島謙次郎氏は勅任官待遇となつた。

かく南方經營に人材が派遣せられる一方、比律賓においては中央行政機關が組織せられ、比島の行政、治安が維持されてゐる。

比律賓においては一月一日マニラ市が陥落するや、新市長ホルヘ・ヴァルガス氏と、わが軍代表との間に一月七日交渉成立、大マニラ市を皇軍に引渡したのである。次いで一月二十三日、比島方面日本軍最高指揮官は、ヴァルガス市長を招致し、比島中央行政機關を組織すること、中央、地方の行政機關を統合すること、ヴァルガス氏を行政長官に任命すること、同時に中央機關の各部長官を推薦することを命じた。ヴァルガス氏は、命令に基づき、人選して來たので、一月二十六日、日本軍最高指揮官は、軍司令部に各部長官を招致、次の如く任命した。

比島中央行政機關
行政府長官　ホルヘ・ヴァルガス
内務部長官　ベニギオ・アキノ
財務部長官　アントニオ・ラモス

司法部長官 ホセ・ラウレル
 農商部長官 ラフェル・アルナン
 教育厚生部長官 クラロ・レクト
 土木交通部長官 キンティン・パレデス
 大審院長 ホセ・ヌーロー
 行政府主計局長 デオフィロ・ジョン
 行政府書記官長 センフィン・マラバット
 ヴアルガス長官は、一九一四年フイリツピン大
 學卒業、最近は大統領府書記官長兼無任所大臣で
 あつた。また比島體育協會長として、永年比島ス
 ポーツ界につくした功績は、比島民から買はれて
 ゐる。本年五十三歳、明朗な政治家である。他の
 各部長官も、それぞれ比島第一流の人材を網羅し
 たものである。

比島の中央、地方の行政機關も漸次整備され、
 島民も皇軍に協力、生業に努めてゐるので、この
 點は、明朗である。

マレーは、さきにも述べた通り大連昭南特別市
 長、八田、久保田、菊池、久慈、片山、伊丹、助

川、砂川各知事が、それぞれ行政方面を擔任して
 ゐるし、ビルマも、皇軍を歓迎し、皇軍の支接協
 力下に、『ビルマ人のビルマ』を建設せんとして
 前途に光明を見出してゐる。

蘭印、ボルネオ方面も住民はすべて、皇軍を歡
 迎し、皇軍を慈父の如く、兄の如く慕つてゐる。
 それは、同じアジアの民族、東洋民族であるとい
 ふ共通の親しみを持つてゐるからである。

従つて南方作戦經營に當つては、支那事變にお
 けるが如き皇軍に對するゲリラ戦はなく、住民
 は、皇軍に信頼し、皇軍に喜んで協力してゐる。
 彼等南方住民は、すなほであり、愛すべき純情さ
 を持つてゐる。彼等は、東洋の盟主たる日本、お
 よび日本國民を、父の如く、兄の如く、師の如く
 に慕つてゐるのである。

われ／＼は、この南方民族の信頼に應へて、彼
 等を指導し、彼等を保護し、彼等の幸福を圖つて
 やらねばならない。われ等は、如何なる困難、如
 何なる難關も突破して、大東亞戦争に勝ち抜き、

もつて大東亞建設の大事業、大御神業を完遂しな
 ければならない。そして大東亞民族の父となり、
 兄となり、先達となつて、これを慈しみ、これを
 普導して行かねばならぬ大責任があるのである。

大東亞建設の大事業、大御神業を完遂しな
 ければならない。そして大東亞民族の父となり、
 兄となり、先達となつて、これを慈しみ、これを
 普導して行かねばならぬ大責任があるのである。

陸軍の戦果解明

大本營陸軍報道部 平 櫛 孝

筆者に與へられた題材は、大東亞戰爭勃發の昭和十六年十二月八日以降昭和十七年四月七日に至る、滿四ヶ月間において、陸軍が擧げた戦果の解明である。

通論的に系統だてて戦果を解明することは、帝

一、香港 攻略 戦

經 過

帝國南支軍は、昭和十六年十二月八日開戦と同時に機を失せず、東亞侵略百年の英據點香港に對し攻撃を開始した。

即ち陸軍飛行隊は八日午前八時、香港北方の敵飛行場に對する第一次爆撃を行ひ、十二機を撃破し、それと併行して地上部隊は香港の對岸九龍に對して猛烈果敢なる攻撃を開始した。

國陸軍の作戦區域が西南太平洋全域に互るために、不可能事に近いので、筆者は、地域的に分類し、先づ、香港攻略戦、比島戦線、マレー戦線、ビルマ戦線を説き最後に英領ボルネオ蘭印戦線、英領ニューギニア戦線に筆を進めようとする。

而して香港島の完全占領に至るまでの経過を述べれば、香港島の木防禦陣地を形成して、往年の旅順要塞にも勝ると英軍が誇稱してゐた九龍北方地區に攻撃を開始したのが八日の早朝であつたが、十日正午には香港の死命を制する天目山とも云ふべき金山(標高三〇〇米)を激戦の末奪取し、九龍の近代的築城地區を攻略して香港島を完全に大陸と遮断したのは、攻撃開始以來僅々八十四時

陸 軍 の 戦 果 解 明

間の十二日午前であつた。

九龍一帯を完全に掃蕩した帝國陸軍は引續き香港島に對して攻撃の準備に着手し、十四日未明より、陸海軍の緊密なる協同の下に香港島に對して立體的な總攻撃を開始した。まづ、香港島を完全に攻略の態勢をとつた上、十五日第一回の軍使を、十七日には第二回目の軍使を派遣してわが古來の武士道に則つた上敵側の騎士道を尊重した降伏勧告をしたのであるが、百四十萬の香港市民を戦火より救はんとする皇軍の意圖を蹂躪してヤング總督は勧告を拒否した。ここにおいて、我軍は一齊に總攻撃を開始し、十八日一齊に攻撃の砲門を開き、その激烈な砲火は英軍の軍事施設を徹底的に粉碎して、要塞砲陣地を全く沈黙せしめた。ついで同日午後九時五十分、ヴァイクトリア灣内にいささかの間隙もない程に敷設された機雷網をついて、決死の敵前上陸を敢行し、見事に成功、直ちに海岸線一帯に配備された敵第一線を衝き、十九日正午には九龍よりの掩護砲撃の下にプレーマ

ー・ヒル山頂を占領、二十三日にはさらに全馬命山を奪ひ、島内の最高峰で、全峯ベトンで埋められ、傾斜面には死角を利用して洞窟を掘り、掩兵壕、トーチカの帯數條によつて嚴重極まる防禦陣地を成してゐたヴァイクトリア・ピークに向つて最後の猛攻に入つた。敵も死物狂ひの頑強な抵抗を行つたが、わが攻撃部隊はその一つ一つを潰滅して前進、制壓したので、さすかの敵も遂に二十五日午後五時五十分に至り、白旗を掲げて無條件降伏し、遂に香港島は完全にわが日章旗の下に覆伏したのである。

意 義

香港島は英帝國の東亞政策の最先端據地として世界的重要性をもつてゐた地で、佐渡島より稍大きい程度の一、〇二三平方キロの面積をもつた島の島であるが、英帝國直轄植民地として最初に陥落したことは、重大な意義をもつものである。香港は、百年間の英帝國の對支侵略の根據とし

ただけでなく、事變勃發以來五ヶ年間の皇軍の大
陸における赫々たる戦果を以てしても事變の完遂
を期し得なかつた唯一の理由たりし米英の敵性租
界の最重要地として、抗日政權支援の陰謀の集窟
をなし、援蔣物資の輸送、重慶要人の英米政治家
との連絡據點を形づくつてゐた憎むべき地であつ
たのである。その香港が皇軍の威武の下に伏した
ことは、重慶の抗戦經濟力と戦力補充の道を絶つ
たことになり重慶の崩壞の時期の近くなつたこと
を意味するとともに、マニラ、シンガポールの兩
地と英米の東亞侵略の戰略三角形の頂點をなして
ゐたこの地を奪つたことは、マニラ、シンガポ
ールを孤立化せしめて、英米の對日包圍陣を著しく
弱體化せしめただけでなく、東亞の平和確立を妨
げてゐた英米の政治、戰略、經濟上の據點を大陸
から退却せしめて、わが日本帝國の理想たる東亞
解放の第一歩たる、支那の解放なる、の曙光を認
めしめたことに重大意義をもつのである。

ヤング總督が、如何なる世界軍隊の精銳を以てし
ても三ヶ月間は大丈夫もちこたへ得ると放言した
のを上陸以來僅々八日間に葬つたことにより、比
島、馬來における米英兩軍に與へた精神的打撃の
甚大であつた。

香港要塞陥落の經過と意義は右の如くである
が、ここに、皇軍の不屈の精神力と常時における
猛訓練が、長年月に亙る周到な苦心とともに香港
要塞陥落の重大要因をなしてゐたことを一言例に
よつて述べよう。

先づ、香港島に對する敵前上陸であるが、前述
の如く香港島の周囲は鯉魚一匹もぐれぬ程の機
雷原であつた。これでは、舟艇では如何とすも
危険で渡過することは不可能であつたし、播海も
前面に敵陣地を掘へてゐることだし容易でないこ
とは火を見るより明かなことであつた。これに對
して、わが上陸部隊は、數ヶ月前から游泳隊を組
織して、敵陣下を機雷と機雷の間を泳いで敵前上
陸の計畫をたてて訓練を積んでゐた。そして、こ

れには、前のオリンピック選手であつた小池禮
三、伊藤三郎の兩少尉が参加し、香港島の東側、
幅一キロの鯉魚門水道で流速一米餘を泳いで渡
り、對岸に上陸の上、無数の機雷を銃撃して水路
の啓開に任じ、上陸點を死守したのであつた。こ
れは計畫通りに實行されたものである。

又、香港要塞の地形に似た土地に、永久陣地の
模型を作つて演習し、或ひは、香港島の急峻な斷
崖の地形にそなへて、獨特の繩梯子を幾つも作
り、獨特の登攀法をも研究したものであつた。

又、九日夜、九龍の本防禦線突破の端緒をひら
いた若林中隊を一例とする敵トーチカの圍を潜つ
て攻撃する部隊をも、組成し訓練されてゐたこと
を、最後に附加へれば、周到な用意が、不拔の精神
力と相俟つてこの香港陥落の一翼をなしてゐたこ
とを、讀者諸士は察することが出来るであらう。

二、比 島 戦 線

米西戦争によつて領有以來、米國の東亞侵略の
最前線據點である比島に對しても、帝國陸軍は海
軍と緊密な協同の下に航空部隊によつて主要飛行
場を急襲した。而して、合計約百機の敵機を撃墜
破したのである。

かくの如くして十日未明、比島ルソン島北部の
アバソリウイガン附近上陸作戦に成功し、陸海軍
航空部隊による比島敵空中勢力の撃碎に授けられ

つ、マニラに向つて順調な進撃を行つた。

十二日未明には陸海軍の新鋭部隊がルソン島南
部のレガスビイに上陸し、敵首都マニラに對する
攻撃態勢が完成した。

このやうにして態勢を整へつつ、北部ルソン島
に上陸した部隊は十二日にはアバリ方面に進出、
ヴィガン方面の西岸部隊も順調な進撃を續け、南
部ルソン島上陸部隊も、十三日レガスビイ西北方

一帯の要地を攻略した。更に廿二日には、新鋭大部隊が更に、ルソン島北部のリンガエン灣に大舉上陸し、これまたマニラに向け怒濤の如く進撃した。

廿四日には、未明、陸軍大部隊がルソン島東岸ラモン灣に上陸し、ここに、南北よりするルソン島の挾撃態勢は完全に確立し、マニラ總攻撃の準備は全くなつたのであつた。

かくして、廿七日、北進部隊はサンパウロ東西の線に進出し、マニラ南部防禦の二師團を全滅せしめ、リンガエンよりの南下部隊はバンパン河を渡渉してサンホセを占領し、廿九日には機械化部隊はマニラ北方のカバナツアンに突入、卅一日には、南下部隊はアンガツト河の線に侵入、北上部隊はキヤビテ軍港近郊に達し、マニラ包圍陣は刻々壓縮された。

ここに於て、米軍司令部はマツカーサー司令官眞先きに撤退を開始し、政府の機關も移轉を公表した。又、マニラ内の米比軍は、マニラ撤退に際

して市内各所に放火した。かくして二月二日、比島の首都マニラは、皇軍に占領されたのであつた。

マニラ占領の戦略的意義は、極めて重大なものがあつた。

第一に、香港の項に於ても述べた如く、香港、新嘉坡、マニラを結ぶ米英の西南太平洋を支配せんとする三角地帯は、香港の陥落につづくこのマニラ陥落であまるところ新嘉坡のみとなり、米英の所謂三角海面は全くその機能を停止するに至つたこと、

第二に、A B O D包圍陣として軍事連繫を目論んだことが全く米英勢力を二分されたことにより水泡に歸したること、

第三には、パワイ・ミッドウエイ・ウエーキ・グワムを連ねる米國の太平洋進攻作戦の連大な計畫が、パワイの制壓、ウエーキ、グワムの占領、それに引續くマニラ占領で、完全に霧散して了つたこと、

最後に、英領ボルネオ、マレー方面の作戦の進展と相俟つて、南方の蘭印、濠洲方面に對する我が制壓の態勢が完全になつたこと、の四つである。

併しながら、司令官を失つた米比軍の残存部隊はバタアン半島に遁入して最後の抵抗を闘つてゐるが、これに關しては、第二輯に於て稿を改めて説かうと思ふ。

一方、ルソン島のみでなく、陸軍部隊はミンダナオ島にも廿日未明、海軍との緊密な協同の下に

三、マレー一戦線

英國は長年月にわたり、政戦兩略を併用して泰國を彈壓し、これをして反日戦線に導入すべく、執拗なる策動を續けてゐたが、遂に七日の夜間に乘じてマレー國境を突破し、泰國南部に侵入して來た。ここに於て我陸軍は開戦と同時の八日未明、海軍との協同の下に、マレー半島の要衝に上陸を敢行した。

敵前上陸を敢行し、空軍によるダヴァオ附近の敵に對する猛烈な爆撃とともに、敵の頑強な抵抗を排して廿日午後、首邑たるダヴァオを完全に攻略し、約一萬八千に及ぶ在留邦人を救出した。

このダヴァオ占領によつて、全ミンダナオ島の死命を制せられただけでなく、南方への退路をも遮斷された米比軍は、鬼畜にも勝る殘留邦人の虐殺を敢てしたのであるが、これは尼港事件、通州事件とともに、到底、許す能はざる行爲である。

この時、英領マレー東北部に突進した部隊は堅固な海陸の備へを頼んでゐた敵と激戦を交へ、しばしば危険に瀕しながらも勇戦奮闘遂に上陸に成功し、一度上陸に成功するや、損害をものともせず引續き敵の重要飛行根據地に殺到し、これを占領、以て全般の上陸を容易ならしめ、英領マレー一番乗りの偉功を樹てた。

爾餘の上陸諸部隊も直ちに南方に向つて進撃を開始し、南洋特有の錯雑した地形に據つて頑強に抵抗する敵を追つて前進し、一部隊は十二日、約一個師團の敵機械化部隊と遭遇したが、激戦の後、殆どこれを潰滅して、敵戦車二十輛、速射砲十六門、自動貨車約六〇輛を鹵獲した外、多数の俘虜を得る等の戦果をあげ、又、陸軍の飛行機は、地上部隊と呼應して敵弾下不完全な敵飛行場に強行着陸を決行し、上陸行動の直接援護、敵航空基地の爆碎等の活躍をなし、マレー英空軍の主力を制壓するとともに、ベナン港等においては敵輸送船砲艦を撃沈或ひは大破する等の殊勳をたてた。

地上部隊は、十四日にはクラ地峡西岸の要衝ピルマ領内のピクトリア飛行場を猛撃し、まづクラ地峡を完全に制壓し、一方、シンゴラ、コタバル附近に上陸した部隊は十三日には早くもマレー西岸のジツトラ・ラインの防禦線近く肉迫する快速進撃を續けた。而して、十九日には、西海軍方面の作戦に従事した部隊はベナン島を攻略、完全に

これを占領して印度洋制壓の態勢を備へたのである。

ベナンを完全攻略した主力は、直ちにウエレスリイ州を突破してベラク州に進入し、廿三日には、世界一の錫産地たるタイピンを占領、ベラク州首都イボイ周辺に猛攻を加へ、廿七日にはベラク全州を席捲し、廿八日正午にはイボイを完全に占領して、南ベラク州の廣潤地帯を経て遙かセラゴール州突入の態勢を示した。

又、東岸を南進した部隊は、約六千の兵力を備へて頑強な守備を誇つてゐた、クアラクライ(コタバル南方)の要衝を奪ひ、更に前進してクランタン州全部を足下に蹂躪、益々その行動速度を増して、廿一日午前には、東部マレーの最大要衝クワンタンを占領したのである。

航空部隊は、ベナン島、イボイ飛行場を急襲して前述の如き戦果を擧ぐると同時に、地上援護に従事し、廿八日には遠くマラツカ海峽の敵艦隊を攻撃して、船隻二隻を炎上、或はクラン西方の海

陸軍の戦果の明解

上で潜水艦を撃沈、廿九日にも同海上で敵驅逐艦を大破せしめ、廿九、卅日には大擧シンガポールを急襲して油槽群を炎上せしめた。

このやうに、マレーにおける戦闘は全く一方的に進展を示したので英東洋軍司令官ボム空軍大將は更迭され、前陸軍參謀次長パウナル中將が新任された。

廿八日、イボイを攻略した西海岸方面進撃部隊は機械化部隊を陣頭にたててベラー州を急進し、卅日にはセランゴール州の要衝クアラランブル防禦の前衛據點として堅固な陣地をしいたカンバル地區に攻撃を開始した。又、一部の部隊をして北方より攻撃するとともに、有力なる部隊をあてて、スンダキクタ河の右岸地區を南下してカンバル西南方地區に進出せしめ、別に遠く舟艇機動部隊による迂回作戦を用ひてベルナン河口に上陸、敵の退路を遮斷した。ここにおいて敵は總退却を開始し、一月二日にはカンバルの完全占領を

見るに至つたのである。

次で、軍はスタイ、タンジョンマリム方面への追撃を續け、四日にはトロラタを、五日にはスリムの堅陣を突破、七日にはタンジョンマリム前方の陣地によつて抵抗を計つた敵を、航空部隊の支援の下に、戦車部隊を前面にたてて、一擧に十五キロにわたる敵主要地帯の全縱深を急襲突破、約二個師團を殲滅、八日にはタンジョンマリムを完全に攻略したのである。

タンジョンマリムの占領に續き、本道方面と海岸方面の二路からマレー中部の重大要衝クアラランブルへ敵を追ふとともに、一方船艇機動部隊を以て、敵飛行機、潜水艦の攻撃を避けつつ、ひそかにクラン(セラランゴール州)南方のモリブに上陸し、クアラランブルの背後クラン方面に進出せしめた。ために敵は士氣錯亂、部隊は大混亂に陥り、遂にクアラランブルを放棄して退却、十一日正午にはクアラランブルに日章旗が輝いたのであつた。

クアラルンプール陥落の意義は、地形上から見ると、クアラルンプールから東岸のクワンタンに通ずる道路を抑へたことになり、東部への兵力移動の道を杜絶せしめたことを意味し、西方に對しては先のベナン島占領と相俟つてマラッカ海峡の完全制壓の成つたことと、特筆すべきは、我が戦闘機の行動半径の下にシンガポールを置いたことで、以後のシンガポールは我が航空部隊の徹底的な猛爆下にさらされたのである。

又、戦略的観点から見ると、クアラルンプールはシンガポール前衛の最重要據點をなしてゐたのである。よつて、以後のクアラルンプール以南のジョホール・バルまでの坦々たる道路と平坦な平野の進撃は一段の快速を示し、一月十二日にはカジャン、カンバンデシキルの線を突破して、十四日夕にはゲマスに突入、一方セラゴールとネグリスミランの州境を發した鐵牛部隊は、僅々一日間でネグリスミラン全州八十キロを突破して、戦史に未曾有の快速記録を樹てた上、マラツカ州

に突入し、十五日正午には、要衝マラツカを占領したのであつた。

マラツカ占領の意義は、マラツカ海峡の完全制壓とともに、印度洋制海權確保の端緒をなし、インド、ビルマよりのシンガポールへの増援を不可能とし、又、シンガポールに據る敵の、インド、ビルマ方面への海上よりの退路を遮つて、文字通り、シンガポールを孤立無援の状態に陥れたことである。

マラツカを攻略した部隊は、その勢を以て直ちにジョホール州に突入、十五日夜から先鋒部隊はムアール河を渡つて、同河左岸の敵に攻撃を加へた。敵はムアール河、ゲマスの線の強固な陣地によつて頑強な抵抗を示したが、我軍は又々、海上機動の奇襲作戦を斷行、十六日はバトバハ附近に敵前上陸してムアール河左岸の敵背後を急襲した。同時に、主力部隊も四、五百メートルの河幅をもつムアール河を渡河して、廿日にはバクリ及び、バリット・スロン附近のムアール河左岸一帯

陸軍の戦果の解明

の地區を占領し、廿二日にはヨンベン西南方地區に進出した。このムアール河の戦闘では敵の獨立第四十五旅團を殲滅し、十センチ火砲八門、戰車(装甲車)四十輛、自動車數百輛の捕獲品を得た。

廿三日よりバトバハ及びセンガラン附近の約四千の敵を攻撃した部隊は、廿數キロの緩深陣地を突破して、廿六日バトバハを完全占領し、更にレチット附近に進出、約四千の敵に殲滅的打撃を與へ、敵戰車、火砲、自動車、兵器資材等多數を南獲、アエルヒタム、レンギを占領し、廿九日はジョホール水道北方三十キロのポンヂアンブサルの敵を一蹴、卅日にはクライ南側の線に進出、かくて西海岸方面の掃蕩は終了したのであつた。

以上は西海岸方面を南進した部隊の状況であるが、クアラルンプール占領以來中央部方面を進撃した部隊は、十三日にはスレンバンを多數の鐵道資材を押收して、十四日にはタイピンを、それぞれ占領し、十六日以來、ゲマス東方地區に頑強な抵抗を示した敵有力部隊も、我軍の猛烈果敢なる

攻撃を支へきれず十八日拂曉より退却を開始し、十九日には、我軍はバツアナム附近を突破してジョホール平原に入り、廿日にはセガマツトを完全に占領するに至つた。

この部隊とは別に、ラビス西方地區に進出して南進中を續けた部隊は、ヨンベン及びバロー附近の敵を撃退した後、強力な航空部隊の支援を受けつつ廿四日夕、アエルヒタム、クルアン附近に據つた敵を攻撃し、廿五日、アエルセタム、クルアを結ぶ線を占領した。その後主力は廿六日シンパン、レンガムの線を通過し、廿八日午後、卅日とランラン、クライを攻略し、引續き南方に向つて進撃し、ジョホール州最南端のジョホールバルに殺到した。又、別動の有力部隊はカハンを経てゼ balan 方向に轉進した。

最後に東海岸方面を南進した部隊であるが、一月三日クアンタン西方の飛行場を攻略した部隊は、西海岸方面の主力部隊と呼應して進撃を續け十五日にはベカンを占領、一部隊はマラン・カラ

クを経てクアランプールに向つて轉進し、他の部隊はエンダウ河を敵前渡河して廿日にはエンダウを占領の上廿二日にはメルシン北方地區に到達、更に廿六日にはメルシン河を渡過、直ちにメルシンを攻略、ジエマランを経て廿九日マワイを占領、西岸中央の兩部隊と呼應してジヨホールバハル突入の態勢を示したのである。

以上の如くして、一月卅一日、三方面より進撃した我が部隊は、シンガポール對岸のジヨホールバハルに突入、これを占領してマレー半島全部を席捲したのであつた。

敵軍は、シンガポール島に遁入の上、ジヨホールバハルとシンガポール間の、ジヨホール水道に架せられた唯一の交通路たる陸橋を爆破して、皇軍の進撃に備へた。

昭和十六年十二月八日マレー半島北部に上陸以來、ジヨホールバハル完全占領に至るまで五十五日、踏破行程千百キロ、舟艇機動約六百五十キロ、橋梁修理約二百五十、主力の交戦は九十二回であ

つた。

この間の進撃速度は一日平均二十キロとなり、これは戦史に始めての快速であつた。五十五日間の長期に亘つてなほかつこのやうな快速を續け得たのは、電撃戦を以て世界を驚倒せしめた獨逸の波蘭進撃にも例をみないところである。

この原因として第一にあぐべきは、我が機械化部隊の装備の優秀さであり、鹵獲品の敵戦車、自動車、ガソリンがそれを助長し、次に道路網の整備があつたのであつたのである。が、この場合にも皇軍將士の不撓不屈の精神力は没却することは出来ない。

シンガポール攻略

1. シンガポール要塞の防備。

新嘉坡は英國が東亞侵略の軍事根據地として、四億餘ドルの経費と、尤大な鐵量と多年に亘る日子を費して建設したものであつて、英帝國が難攻不落を誇つた大要塞である。軍に要塞の備砲のみ

陸軍の戦果の明解

を取上げて見ても、四十五サンチ加農砲五門、三十七サンチ加農砲二門をはじめ、十五サンチ加農砲以上だけで二十六門を下らず、マレーから遁入して、同要塞に據ることになつた敵の火砲もまた相當の數に達したものであつた。又、敵は我が軍の攻撃時機が近くなるに従つて、無數の臨時築城を施し、遂にジヨホール・バハルから、新嘉坡に通ずる唯一の通路を爆破して、愈々防備を固め、その守備兵力は、我が總攻撃開始當時に於て、正規部隊は五、六旅團、義勇軍二個旅團を基幹とする尤大なものになつてゐた。

以上は大略の説明であるが、一月三十一日ジヨホール・バハルに突入した我が部隊は、ジヨホール水道を挟んで交戦しながら、周到な準備を進め、二月七日夜、先づ新嘉坡島東北にあるウビン島を占領し、二月八日夜、愈々總攻撃の火蓋を切り、九日午前零時四十分、新嘉坡島西北地區に於て、ジヨホール水道の敵前渡過に成功した。この方面の部隊は渡過後相當頑強な敵の抵抗を受けた

が、歩砲共同して九日夜七時には既にテンガリ飛行場の東側に進出し、十日夕には標高四百三十七高地を奪取、更に敵を急迫して十一日早朝敵陣地左翼の支據點たるプキ・テマ山附近に進出しシンガポールを指呼の間に俯敵して敵に降伏を勧告したのである。

他方、ジヨール・バハル方面にあつた我が部隊は、九日夜ジヨール水道の敵前渡過を強行し、次いでマンガイ山附近の敵陣地を攻撃して、これを占領した。この間、我が航空部隊も極めて有効に地上部隊の攻撃に協力したことは無論である。

プキ・テマ山を壯烈極まる激戦の末に奪取した部隊は敵に息つく暇もあたへず攻撃を續け、その快速部隊の一部は遂に、二月十一日八時、シンガポールに突入したのであつた。

プキ・テマを占領された敵は我が降伏勧告に應じないのみか、その東方地區において執拗な逆襲を反覆し必死の抵抗を企圖した。ことに於て我軍

は断乎としてこれを撃滅するに決し、我が第一線部隊は航空部隊及び重砲兵部隊と密接な協同の下に、五日間にわたつて連日猛攻を加へ、遂に二月十五日午後七時五十分、敵英軍をして無条件降伏の餘儀なきに至らしめたのであつた。

新嘉坡陥落の軍事的な意義といふと、新嘉坡が英國の東亞における陸・海・空活動の大根據地であつたことを考へれば充分である。即ち、英軍はこの根據地に據つてこそ、西太平洋と印度洋に暴威を逞しうしてゐたのであつて、これを我が手中に收めた以上、我が軍は作戦の自由を獲得した、ことになり、單に東亞の英大根據地を獲得したのみでなく、印度洋に對する制壓の威力をも獲得することになつたのである。

四、ビルマ戦線

ビルマに對する攻撃も、先づ航空部隊によつて開始された。

以上を第一とすれば、第二は、米英兩軍の直接

聯合作戦の企圖を困難ならしめたことである。米英はその與國を誘つて對日包圍陣結成を企圖し太平洋方面諸國軍の直接聯合作戦のため、陸、海、空軍最高司令部を設ける等、活潑な動きを見せてゐたのであつたがその根據地として最重要地たる新嘉坡の陥落によつて、米英軍は、太平洋に於ける聯合作戦の蹉跌を來し、此の方面における兩軍の直接共同の企圖は極めて困難を加へるに至つた。第三には、重慶軍の米英軍と連衡して行はんとする抗戦企圖を極めて困難ならしめたことである。以上によつて、新嘉坡陥落の意義の重大なりしことが、大體において了解せられたことと考へる。

即ち十二月十三日、陸軍航空部隊はヴィクトリアポイント飛行場を攻撃、他の一隊はメルギ飛行

陸軍の戦果の解明

場を制壓したのをさきがけとして、十四日には、マレー半島に上陸した陸軍部隊がビルマ領内に進駐してヴィクトリア飛行場を占領した。

廿三日來、陸軍航空部隊は戦爆連合のもとに、ラングーン、モールメン港等を屢々猛爆下にさらし、一月に入つて、泰緬國境に待機中であつた陸軍部隊は十七日に國境を突破、テオセリム河を渡つて夜半にはカウメイガン(ダヴオイ東北廿八キロ)附近の陣地を占領し、超速度を以て十九日未明には早くもダヴオイに到着、午後七時にはこれを完全に占領して多數の虜獲品を得た。

更に二月廿一日ミヤワジ附近において、泰緬國境の山岳地帯を突破してビルマに進攻した我が一部隊は、同日夕にはバジヤン及びミンガミラウ附近の敵陣地を奪ひ、ヨークレー地方に入り、天候、地形等の悪條件を克服しながら廿八日にはその先鋒はキヨンドを通過した。さらには、北方より作戦してサルウイン河に沿つて西進したわが進撃部隊は、三十一日にはモール

マン南方高地を占領し、モールメン市周圍に剽到、頑強なる抵抗を見せた敵を掃蕩して、夕刻にはモールメン市を占領した。又、バアン(サルウイン河中流に位する要衝)方面に作戦した部隊は、四日拂曉バアンを占領した。

更にモールメンを占領した部隊の一部は、二月九日サルウイン河の敵前渡過に成功し、十日にはその河口西方のマルタベンを占領し、進撃を續行して、ラングーン總攻撃を開始したのである。而してその先鋒部隊は十五日敵の要衝サトンを一氣に攻略し、餘勢を驅つてさらに猛進、十六日午後にはモールメン北方百キロ、ピリン河西岸において退却收容を急ぎつつあつた装甲車を含む數百の敵集團を撃破して同日ピリンを占領した。かくて、ラングーンを防衛する敵の據點はシツタン河だけとなつたのであるが、無敵の進撃を續ける我が進撃部隊は三月二日、シツタン河の渡河に成功し、三日には要衝バヤジを占領、かくてラングー

ン、ラングーン間の鐵道を遮断して援將ビルマルート
を完全に遮断し、さらに七日ベグーに突入した精
銳は激烈な市街戦の末同日午後五時完全にこれを
占領し、八日午前十時には、ミンガラドンよりの
南下部隊が遂に首都ラングーンを陥落せしめたの
であつた。

ラングーンは抗戦重慶への輸血路たるビルマ・
ルートの起點として、支那事變勃發以來足かけ六
年間、重慶側の抗戦力の動脈の役を果してゐた地
である點に、ラングーン陥落の重大さが發見出來
るのである。

實にビルマ・ルートは、近代戦を遂行するだけ
の重工業力をかく重慶にとつて、第三國からの兵

五、英領ボルネオ及蘭印戦線

現今大東亞戦争の遠因は兎も角として、直接の
原因が如何なる點にあつたかを考へて見れば、そ
れが石油であつたことに想ひ到るであらう。さす

器、軍需品の補給路として、抗戦上の大動脈をな

してゐたものである。而してビルマ・ルートは、
昭和十五年の佛印ルートの閉鎖と前後して、帝國
政府の強硬な英國に對する申入れによつて、同年
七月十八日から三ヶ月間の閉鎖が斷行されたので
ある。が、九月の日獨伊三國同盟に對する回答と
して英國は再び同ルートを開き、以後、海軍航空
部隊による橋梁の爆破にもかかわらず、活潑な輸
送力を發揮してゐたものであつた。

それが、ラングーン占領によつて、全くその機
能を停止したのであるから、これが重慶に與へる
影響は全く大なるものがあるのである。

れば、油田地帯の可及的速かな占領と、之の建設
が必要となつてくることは今更、改めて考慮する
までもないことである。而して、油田地帯として

蘭印の軍略

最も日本に近いのは英領ボルネオであり次に近
いのは蘭印である。

開戦後、約一週間を経た十二月十六日の未明、
わが陸海軍部隊は早くも英領ボルネオの中部ブル
ネイの油田地帯に上陸し、少數の敵を撃破し、敗
敵の放火破壊によつて燃える石油坑及製油所に突
進し、決死の消火作業を行ひ、直ちに復興に着手
し、續いて同月二十五日には英領ボルネオ西部タ
チン附近に上陸、直ちに油田及其他の設備を占
領、更に三十一日及昭和十七年一月一日には相次
いでブルネイ市とラプアン島を無血占領したので
あつた。

蘭印に對しては、米、英に對する宣戦布告以後
も、蘭印の反省を待つたのであるが、彼はいささ
かも反省の餘地なく日本に對して宣戦を布告し、
又、單にそれのみにとどまらず蘭印を聯合軍側の
基地に提供、或は實際に戰鬪行爲をする等、默視
するに忍びない點があまりに多いので、日本も斷

乎、これを討つことに決し、一月十一日、ボルネオ
島東北端のタラカン島に對して敵前上陸を行ひ、
二十四日には、その南方たるバリックババンに上
陸し、以後西方及南方海岸にも續々と上陸、殘敵
を掃蕩しつつ、二月九日首府バンジエマシンを
占領してボルネオ全島を擧定したのである。

本作戦によつて油田地帯よりは、既に内地へも
使用し得る石油が入つてをり、これで、戦争の直
接目的は果したとも云へるのである。

セレベス島に對しては、北端のメナドに海軍部
隊が敵前上陸し、同じく海軍の落下傘部隊と共に
メナドを占領、二月九日には陸軍部隊も協力して
首府マカッサルを占領した。

折しも、シンガポール總攻撃の最盛中であつた
ので、敵の注意は總てシンガポールに集中されて
ゐた。この時にあつてわが陸軍最初の落下傘部
隊は二月十四日、突如としてスマトラ島バレンバ
ンに奇襲降下し、東亞共榮圈に於ける最大にして

且、最良の製油所を大した破壊も受けることなく占領することが出来たのである。パレンバンはムシ河の中流にあり、普通の徑路を辿つてムシ河を溯航したり、或は、陸路を辿れば、その間に時間を空費して、製油所は必ず敵の手によつて大きな破壊を受けだに違ひないこと考へれば、それを未然に防ぎ得たことは落下傘部隊の不滅の功績として高く評價されて然るべきものと考へるのである。

パレンバン占領後、同地は溯航部隊を以て増強され、次いで南進、二月二十日には快速早くも數百軒を突破してスマトラ南端のスンダ海峽の海潮に達し、ジャバ島の首都バタビヤを望むことになつたのである。

この南進部隊が驚異的な進出をしてゐる間突如、東方に於てはジャバ島東側のバリ島に二月十九日陸軍の一部隊上陸し、ジャバは完全に東西より包圍される形勢になつた。又、二十日には一部隊がチモール島に上陸し濠洲との連絡を遮断する態勢を整へたのである。

斯くするうち、我が陸軍は、ジャバ島に敵の敗殘艦隊を置いたまま、大膽極まる上陸作戦を同時に三方面から決行したのである。敵の艦隊を敵の自由行動にまかせて敵前上陸作戦を行ふのであるから、これは眞に決死の敵前上陸であつた。

果せるかな、敵の聯合艦隊は邀撃の態勢をとつて出撃して來たのである。我海軍は陸軍輸送船團を一時待避させて、勇躍敵に猛攻を加へ、所謂バタビヤ沖、スラバヤ沖の兩海戦に於て敵艦隊を全く覆滅したのである。かくて陸海軍の緊密な協同によつたこの敵前上陸は三月一日未明を以て、我主力はバタビヤ西北方海岸に、一部はバンドン北方海岸に、他の有力なる一兵團はスラバヤ西北海岸に各々敵前上陸を行ひ、直ちに敵を急造してバンドンに敵聯合軍の首脳部を捉へて之を包圍し、蘭英濠米の聯合軍をして、三月九日を以て無條件降伏するの已むなきに至らしめたのであつた。降伏命令は全蘭印に傳達され、ここに全蘭印の撤定はなり、我大東亞共榮圏の主要な目的を達し、三

月十二日を以て第二次戦勝祝賀日と定められた次第であつた。

聯合軍司令官ウエーベルは、逸早く逃れて印度

軍總司令官となり、各地にあつた殘軍も逐次降服し、全蘭印は新たに力強く大東亞共榮圏の一環として建設に進みつつある。

六、英領ニューギニア戦線

此方面にも一部の陸軍部隊が活動しつつある、一月二十三日陸海軍部隊はビスマルク群島中の主島ニューブリテン島の首都ラバウルに上陸し海軍部隊は同島ガスマタ及ニューアイルランド島のカピエングに上陸した、此等の占領は云ふまでもなくウエーク島の占領と共に、我南洋委任統治領海面を制すべき基地を得、敵の空中及海上ゲリラ戦に備へると共に濠洲北部を通過する米英の航路及航空路を制せんとするものであり、將來、尙南進すべきものである。

果然三月八日濠洲委任統治領ニューギニアの東端サラマウア及ラエに陸海軍部隊の上陸を見た、此地は山を隔てて英領ニューギニアの首都ポートモレスビーと相對し、空中戦の應酬が盛に行はれ、我は更に濠洲北端ホーン島及ポートグロウイシ等を爆撃しつつあるのは人の熟知する所である。此等孤立せる方面に文字通り懸軍萬里瘴癘と戦ひ暑熱を克服しつつ連続する敵空軍の攻撃に直面しある部隊に對しては實に感謝の外ない次第である。

七、アンタマン諸島占領

アンタマン諸島の占領は、我南洋委任統治領の南進の第一歩として、三月十日に開始された。アンタマン諸島は、南洋の南端に位置し、我が南洋委任統治領の南進の第一歩として、三月十日に開始された。

アンタマン諸島の占領は、我南洋委任統治領の南進の第一歩として、三月十日に開始された。アンタマン諸島は、南洋の南端に位置し、我が南洋委任統治領の南進の第一歩として、三月十日に開始された。

昭南港よりビルマに交通し又印度洋作戦を行ふ爲にはアングマン諸島占領は絶対必要である、我陸海軍部隊の一部は、三月二十三日突如同島に上陸し無血占領して印度洋進攻作戦の第一歩を開いた。

開戦後四ヶ月電撃戦に次ぐに電撃戦を以てし、一舉第一期目標とも云ふべき最少限の大東亞共榮圈を殆ど悉く占領し終つたのは世界の驚異とする所であつて其の基礎をなした數次の大上陸作戦、電撃的難路突破及云ひ合はせた如き一週間に外を以てする要塞攻略は、唯我が無敵陸軍のみなし得る所である。

米英蘭の對日作戦は、開戦後間もなく米太平洋艦隊主力が東亞に到着することを基準として計畫されてあつた結果、意想外のハワイ海戦の惨敗の爲全く全作戦に齟齬を來し、至る所の陸戦も無益の抵抗と化し去つた。此點に於てハワイ及マレー沖海戦は大東亞戦争の緒戦を決したと云ふことが

出来る。しかしながら、古來戦史に於て特に長期

戦に於ても、その勝利者は悉く陸戦最後の勝利者に限られてゐるのに鑑み、支那大陸其他將來生起することあるべき陸戦に絶大の關心を拂ふと共に獨ソ戦其他樞軸側の陸戦の大勝を祈つて已まない次第である。

聖戦僅に四ヶ月、戦争は正に今後に在るのであるから、國民は愈々操守を堅くし堅忍持久、飽くまで政府と一體となり軍隊と心を協せ、御稜威の下最後の勝利を戦ひ抜くことが肝要である。

海軍の戦果解明

大本營海軍報道部 富永謙吾
海軍少佐

宣戦の大詔を拜してより五ヶ月、この間における海軍の擧げた戦果は、大御稜威の下天佑神助の御加護によつて、世界戦史に類例をみない廣大な海域に互つて展開された作戦にもかかわらず、偉大な戦果となつてあらはれてゐることは既に衆知のことである。

大東亞戦争勃發以來現在迄に行はれた主要なる海戦のみを列挙してみても、開戦劈頭のハワイ海戦、マレー沖海戦、ジャバ沖海戦、バリ島沖海戦、スラバヤ沖、パタビヤ沖海戦（大東亞戦日誌第二輯に譲るが、珊瑚海海戦も既に發表された）と五

指に餘り、その他、海軍航空部隊潜水艦作戦による敵國海軍並に航空兵力の撃滅、落下傘部隊による奇襲降下、特別陸戦隊による上陸作戦等々枚舉にいとまない程であるが、いづれもが皆徹底的快

勝の連続であることは、今更の如く、大御稜威の廣大無邊なることに感泣せざるを得ないのである。

海上作戦の主目標は云ふまでもなく敵海軍兵力の撃滅にあり、この主目的は開戦劈頭のハワイ海戦と之につづくマレー沖海戦によつて略々達せられ、以後の海戦は主として西南太平洋にあつた敵殘存艦隊の捕捉撃滅に目的があつたのである。しかしてこの間敵航空兵力も殆ど潰滅せしめ、大東亞海には殆ど敵影を見ないまでになつたのである。

これによつて制海權の獲得と制海權の行使とが帝國の意のままになつたがために、帝國陸軍の勇戦とともに、あの二千數百裡にもわたる史上空前の大上陸作戦が可能となり成功を収めたのであつ

た。
古來、制海權の有無は國家の盛衰と密切な關係があることは何人もこれを否定する譯には行かない事實であるが、帝國海軍による制海、制空の兩權力獲得は單にそれのみに止まらず、日本が勝利

一、ハワイ海戰

ハワイ海戰における戰果は後述するが、先づ、ハワイが米國にとつて如何なる意義をもつ地位にあつたかを述べよう。

元來、眞珠灣軍港を中心とするハワイは、米海軍が太平洋作戦の一大根據地として眞珠灣軍港の築造には十億ドルといふ巨費を投じたばかりでなく、その築造には米國當局が多年にわたつて心血をそそぎ、ジブラルタル軍港とともに、世界の二大軍港として米國が列國に誇つてゐた地である。しかして、ハワイを頂點とし、グワチハーバー、パナマを他の二頂點として形成される三角形は太

の道に一路進出得ることとともに、帝國の國運が隆々として榮えるべきことを明示してゐるのである。
次に、開戦以來の帝國海軍のあげた戰果につき個別的に解明しよう。

平洋三角形防禦線として他國の侵入を絶対に許さぬとした米國の生命線であつた。
又、ハワイの太平洋上の位置は日本からは三千百哩、アメリカ西岸からは二千哩の洋上にあるので、同地が米海軍の對日渡洋進攻作戦の最重要據點にはなるもの日本側よりは、多數の主力艦を以てせねばならぬだけに、ハワイを襲撃するなどといふことは世界の軍事専門家には考へられないことであつた。

このハワイにあつた米海軍の太平洋艦隊は、特に本年は、例年の大演習を中止して眞珠灣に集結

し、同灣内外で絶えず猛訓練を行ひ大艦隊を常駐せしめて、日米間の情勢に備へ攻防至らざるなき備へを誇つてゐたのである。

ハワイに關しては大體簡單な説明を以てすれば以上の如くであるが、我艦隊は數日來の荒天をついて航空部隊と潜水艦部隊を中心とする有力なる部隊を以て、開戦劈頭、即ち十二月八日の日出後一時間半ごろから白晝決死の猛襲を行つたのである。

折よくも、數日來のハワイ方面稀有の荒天に米國太平洋艦隊の主力たる八隻の外有力な部隊が在泊してゐたので、航空部隊による艦船、飛行機、陸上軍事施設に對する雷銃撃及び、警戒嚴重を極める眞珠灣内に決死突入した特殊潜航艇を以て編成された特別攻撃隊の敵主力艦に對する雷撃とともに、戦艦五隻（カリフォルニア型一隻、メリーランド型一隻、アリゾナ型一隻、ユタ型一隻及び艦型不明一隻）甲巡又は乙巡二隻、給油船一隻を撃沈或は轟沈し、戦艦三隻（カリフォルニア型二

隻、メリーランド型一隻、ネバダ型一隻）輕巡二隻、驅逐艦二隻を大破せしめ、戦艦一隻（ネバダ型）乙巡四隻を中破、陸海岸航空兵力に對しては銃爆撃によつて約四百五十機を炎上、十四機を撃墜、さらに多數の飛行機を撃破、格納庫十六棟を炎上、二棟を破壊するといふ古今に比類のない驚異的な大戦果をあげたのであつた。しかも我方の損害が飛行機二十九機と特殊潜航艇五隻のみといふに於ては、右の戦果が如何に一方的なものであつたかがうかがはれると思ふのである。

以上の戦果によつて、時あらば太平洋の波濤を越えて東亞の平靜を亂さんとしてゐた米國の太平洋艦隊の主力艦九隻は全く潰滅し、今春十八隻の主力艦を擁して世界一海軍を自任し世界制覇をうけんとしてゐた米國は、その野望を粉碎され、ノースカロライナ、ワシントン兩艦のみが新鋭戦艦として誇れるだけの大西洋老朽主力艦隊九隻を頼みとする第二流の海軍國に轉落してしまつたので

ある。

二、マレー沖海戦

開戦当日にハワイ真珠灣を猛襲して米太平洋艦隊の主力を全滅せしめた帝國海軍は、更にそれから三日後の十日に、英東洋艦隊の主力たる最新鋭戦艦、プリンス・オブ・ウェールズ號とレバルス號とをマレー半島東岸のクワンタン沖に於て海底深く葬り去る戦果をあげたのである。

即ち、吾が潜水艦は十二月九日午後、英主力艦の出動を發見したので、同方面に作戦中のわが艦隊は決戦を企圖して急速これにむかつたのであつたが、敵が反轉したので距離の関係上、決戦の機會は得られずじまつた。しかしながら吾が航空部隊と潜水部隊との緊密な協同搜索の結果、十日の午前にいたつて、吾が潜水艦は再び敵の所在を確認したので、航空部隊は機を逸せず密雲をついて直ちに攻撃を敢行し、レバルスは瞬時にして轟

沈、同時にプリンス・オブ・ウェールズの左に傾斜進走せんとするのを更に追つて、レバルス轟沈より約二十分後に撃沈せしめたのであつた。

本海戦に参加した吾が航空部隊は僅々十機にも満たない少数であつたにも拘らず、防空防禦は他に比類のない完璧さをもつて水線附近の装甲四十センチとともに絶対不沈を誇つてゐたプリンス・オブ・ウェールズ號と、レバルス號を僅か三機の損害で撃沈せしめたのは、吾が海軍航空部隊が、如何に猛烈な訓練を以て、機材の優秀さとともに世界に冠絶せるものがあつたかを實證するものである。

次に参考として、プリンス・オブ・ウェールズ號の諸性能を書かう。

プリンス・オブ・ウェールズ號は、英海軍の傳

海軍の戦果の明解

統と誇りをもつて、その技術の粹をつくして建造した最新鋭の主力戦艦であつた。かの英巡洋戦艦たりしフッド號を撃沈した獨逸のビスマルク號の追跡にあつたキング・ジョージ五世號とは姉妹艦で基準排水量は三萬五千トン、十五萬二千馬力のバーソン式タービンを据ゑつけ、速力は三十三ノットを越えるといふ戦闘艦としては驚異的な速力を有し、十六年四月に竣工したばかりの英海軍の至寶であつた。

又戦艦として發揮し得る攻撃力の主體となるべき主砲は三十六センチ砲を僅か十門もつに過ぎないが、全く改良された新式砲で、約九百キロの巨弾を齊射し着弾距離は從來の三十八センチ砲より大で、破壊力は四十センチ砲にも勝ると稱してゐたものである。

しかも同艦の最大特徴は、防空防禦力に會て他艦になかつたほどの重點を置いて、二十五聯装といふ世界最初の高角機銃を三基、二十聯装のものを一基、他には自慢の八聯装防空ボムボム銃を四

基据ゑて、以上の防空砲火を一齊に發射すれば毎分六萬發以上の弾力が出せるといはれたものであつた。

以上の如き性能だけを見れば、絶対不沈と誇稱される價値もあると云へるのであるが、これに對して空中よりする魚雷攻撃によつて同艦を撃沈せしめた吾が航空部隊の精銳さと、又、魚雷の偉力の大なることも實に誇るに足るものがあるのである。

前述のハワイ海戦とこのマレー沖海戦の二海戦によつて、東太平洋では米海軍勢力の、西南太平洋では英海軍勢力の、米英兩海軍勢力の主力が共に全滅し、帝國海軍が太平洋の完全な制海權の把握へと進むことになり、マレー沖海戦はこの意味に於てハワイ海戦の上に更に錦上花をそへた感があるのである。

更に本海戦に於ては、英東洋艦隊の旗艦たりし、プリンス・オブ・ウェールズ號を撃沈したことによつて司令長官トマス・フィリップス大將を

始めとして司令部が艦と運命を共にしたために、太平洋における英海軍の残存勢力はその主を失つた統制力のない烏合の衆となつてしまつたといふ

三、ジャバ沖海戦

緒戦のハワイ海戦、マレー沖海戦における海軍航空部隊の猛威は、その後も敵空軍部隊の撃滅に、艦艇の攻撃にと俾力を發揮してゐたが、十七年二月四日またも、米蘭聯合艦隊を捕捉壊滅せしめる偉勳をたてたのであつた。

すなはち、二月三日、ジャバ島の敵主要飛行基地を大擧して空襲し敵の八十五機を撃墜破して、大東亞海に完全制空権を確保したが、かねがね索敵中であつた米蘭艦隊をジャバ海カンダアン島南方三十哩の海上に發見し、機を失せずこれを猛攻し、蘭印艦隊の主力をなす三巡洋艦中ジャバ型一隻を轟沈、旗艦のデ・ロイタルを大破後沈没せしめ、蘭巡ジャバ型一隻と米甲巡一隻を大破、さら

點にも、大きな意味を見出すことが出来るのである。(次のエンダウ沖の海戦についてはバリ島沖海戦の後尾に附することにした)

には五千トン級の敵船舶一隻をも撃沈して、蘭印艦隊を事實上壊滅せしめたのである。

敵艦隊は吾が海軍航空部隊によつて壊滅せしめられる前、驅逐艦數隻を伴つて、從來、根據地にひそんでゐたことから脱して、堂々と出航して來たのであるが、これは、米英側が盛んに放送したデマ宣傳の「マカツサル海戦の勝利」を迂濶にも信じて、大東亞海には日本艦隊の艦影を見ることがなしと安心したためであつた。

蘭印艦隊が事實上壊滅したといふのは、蘭印艦隊は他に二隻の損害をうけない巡洋艦を主力としてもつてゐるが、完全な制空権を日本に奪はれた以上、無敵を誇る吾が海軍に挑戦することは勿

論、吾が航空部隊等による攻撃をも、避けるより外はないので、活動力を失つた以上は蘭印艦隊は事實において壊滅したことになつたのである。

これだけの偉大な戦果をあげながら、本海戦における海軍航空部隊の損害が僅か一機であつたといふことは、さきのマレー沖海戦にあれだけの大

四、バリ島沖海戦

二月二十日午前零時、大東亞戦争勃發以來始めての水雷戦隊による本格的な海戦がバリ島東方のロンボク水道で行はれた。

即ち、ジャバ海戦でバリ島方面の作戦を實施中であつた、帝國海軍水雷戦隊所屬の驅逐艦二隻が、二十日午前零時、ロンボク水道で巡洋艦二隻、驅逐艦三隻よりなる米蘭の聯合艦隊と遭遇したので、敵においては比較にならぬ劣勢であつたにもかかはらず、敢然として攻勢に出で、漆黒の海上に壯烈な夜戦を展開し、僅々十分間の砲戦による

偉勳をたてながら、やはり三機といふ殆ど誰にも考へられないやうな僅少の損害であつたこととにも、帝國海軍航空部隊が、如何に世界に冠絶せる航空部隊であるかを更に如實に示したものであると考へるのである。

第一合戦に於て既に敵驅逐艦二隻を撃沈し、一隻を大破させたのである。ことに於て敵巡洋艦二隻は到底我に對抗し得ずと覺つて、暗夜に乗じて逃走せんとしたのである。何條この好機を逃すべき、吾が驅逐艦はこれを急追し、三時間にしてバリ島附近でこれを捕へ、折から附近に行動中の水雷戦隊の驅逐艦二隻と協力して第二合戦を展開したのであつた。吾が水雷戦隊は、帝國海軍傳統の夜襲戦を絃々相摩す高速攻撃によつて行ひ、敵巡洋艦に對して砲雷撃を加へたので敵は損害を受け、夜

陰に乗じて遁走してしまつたのである。

元來、水雷戦隊はその軽快な行動力を利して敵に肉薄攻撃を行ひ、砲雷撃によつて戦艦等の主力を倒すところに任務があるのである。よつて、巡洋艦を相手に戦闘を展開することは別に不可思議なことではないのであるが、さりとて巡洋艦本來の任務である、主力艦を狙ふ駆逐艦を撃滅することを考へれば、このたびの海戦に於て、猫にも比すべき巡洋艦が鼠にも比すべき吾が駆逐艦に追はれて逃げまはつたことは、如何に敗殘の敵艦とは云へその醜態ぶりは、全く論外の沙汰である。

ここで一應、吾が傳統の水雷戦隊について述べよう。

水雷戦隊の任務が如何なるものであるかは前述の簡単な説明と重複をさけるが、駆逐艦を以て敵主力艦に肉薄攻撃を行ふのを主目的とするのは吾が海軍獨得のものであつて、英米にせよ、ドイツにせよ、帝國海軍が副目的としてゐる主力艦

の援護に用ひてゐるに過ぎないのである。主力艦の援護といふのは、戦場で味方の主力艦が不利な立場に陥つた場合、側方から敵艦隊襲撃の態勢を示して、その不利な立場から味方の主力艦を救ふといふのである。

帝國水雷戦隊の訓練は筆舌につくしがたいものがあるので、次のやうな犠牲のあつたこともあるのである。

昭和二年八月二十四日夜十一時頃舞鶴に向けて美保を出航した聯合艦隊附屬の第一水雷戦隊が美保沖にさしかかつたとき巡洋艦神通と衝突、また同時刻頃軍艦那珂が駆逐艦葦と觸衝した事件等、事故ではなく不可抗力とまでいはれ、米海軍をして、「日本はあれほどまでに猛烈な訓練をするのか」と讚歎久しうさせた等のことである。

このやうに血の犠牲をはらつても襲撃目標は敵主力艦にあるので、バリ島沖海戦の戦果にしても平常の訓練の一端をしめしたに過ぎないものなのである。

海軍の戦果の明解

帝國海軍は、この水雷戦隊を以て、日清、日露の兩役に花々しい戦果をあげたのであつたが、第一次歐洲大戰に於ては各國の驅逐艦は特にとりたてる程の活躍を示さなかつた。

これは前述の通り使用目的の相違から来る使用法の根本的な差がさせたことであるから當然のことなのであるが、この結果として水上艦艇をもつてする襲撃の效果に關し、一般的にこれを輕視する傾向が強くなり、雷撃機が代つて進歩して來たのである。

しかし、帝國海軍は夜戦が輕快艦艇の獨壇場であつて、寡を以て衆を制し得る方法であること、に注目しその訓練を怠るところがなかつた。

その猛訓練の過程に於て、幾多の貴重な犠牲を

生んだことはさきにも述べたが、その結果が、この

バリ島沖海戦の大戦果として帝國海軍の眞面目の一端を表はしたものであり、驅逐艦の任務は潜水艦狩りとか主力艦の危急を救ふとか云ふ云はは補助的な目的を遂行するにあるのではなく、あくまでも敵の主力艦に對する奇襲艦艇として意味をもつものであることを強調したいと思ふのである。

一月二十七日、マレー東岸のエンダウ沖に於て行はれた驅逐艦二隻同士による日英海軍の戦闘に於て吾が方には一弾一片の被害もなかつたにかかはらず、敵一隻を撃沈、一隻を遁走せしめた帝國海軍の砲術の威力は、吾が水雷戦隊の威力を一層強めて、世界に全く比肩すべきもののないことを示してゐるのである。

五、スラバヤ沖海戦、バタビヤ沖海戦

この二海戦の戦果は第一編の大本營發表にゆづることにして、少しく趣を變へてこの二海戦につ

いての若月軍報道班員の手記を引用しよう。

「蘭印敵前上陸の陸軍部隊を満載した輸送船団を護衛したわが艦隊がバタビヤ沖にさしかかった二十七日夕刻、大型巡洋艦二隻、輕巡洋艦一隻、驅逐艦二隻からなる敵艦隊が隊形を整へつつやつて來るのを発見した。小瀬にも敵前上陸を妨害しよう」と輸送船団を襲撃に來たのだ。

すでに、飛行機偵察によりバタビヤおよびスラバヤに敵艦ありと知つてゐたので初めから敵艦隊を撃破して上陸しようといふのであつてみればこれこそ思ふ盡だ。敵発見と同時に輸送船団を一時待避させて直ちに砲撃が開始された。

時に二月二十七日午後六時、彼我の兵力は正に同等だ。開戦以來最初の本格的な海戦が開始されたのだ。一方スラバヤ方面に向つた輸送船護衛中の艦隊も同じく巡洋艦三乃至四隻と驅逐艦を有する敵艦隊を発見した。

「敵艦隊を発見す。輸送船団を待避させこれを撃滅せんとす」と第一報を打電するとともに、同六時砲撃をしながら猛烈なスピードで敵艦隊に割入

つたわが〇〇艦が放つた魚雷は、見事敵巡洋艦二隻に命中、轟然たる爆音とともに敵艦は忽ち沈没した。敵艦の最後を見届ける暇もあらばこそ他艦を求めて砲撃、雷撃だ。彼我相照す探照燈が互に交叉し萬雷の如き砲撃は夜の海を壓して壯絶である。敵の砲撃も極めて熾烈であつたが、全艦艇一丸となつて戦つてゐるわが艦隊に比し、敵は寄せ集めの聯合艦隊の悲しさ、猛烈な抵抗はするものの訓練の不足と技術の拙劣は今やどうにもならぬのだ。徒らに艦隊の指揮は亂れ支離滅裂となつたのだ。この虚に乗じたわが艦艇は巧に一艦一艦を捕へて砲撃雷撃を集中した。

見る見る敵艦は火達磨となつて沈んで行く。一隻また一隻と撃沈され形勢不利と見た敵は何れも煙幕を張つて遁走せんとしたが、折柄月明を利して敵の退路に廻る巧妙な作戦はこれを捕捉して巨弾をぶちこむ。敵はますます亂れるばかり。壯烈なる夜戦も實力の差は如何ともし難く、わが方の一方的戦闘に終始した。

かくて同夜より二十八日早朝にかけて實に巡洋艦三隻、驅逐艦六隻を何れも確實に撃沈、巡洋艦四隻を大破させたといふ大戦果をあげた。

明くれば二十八日、艦隊將兵は戦闘配置についてたまま握り飯をかちつて早朝から荒鷲軍と協力して一日中炎熱下、敵を探し廻つた。二十七日海戦に懸けて決死勇士等は一人残らず古武士の出陣にならつて下着から靴下まで綺麗なものと着換へたが、今は汗と油でどろどろに汚れてゐる。

艦隊の追撃と海鷲の爆撃をのがれた敵艦は二十八日、一旦バタビヤ港及びスラバヤ港に逃れた。わが艦隊は再び輸送船団を引きつれ前進する。

一日(昭和十七年三月)、午前零時、バタビヤに向つた艦隊は敵巡洋艦二隻を、スラバヤに向つた艦隊は巡洋艦三隻、驅逐艦六隻を発見した。

艦隊將兵は勇躍、それぞれ輸送船団を一時待避させて危険から遠ざけた後、猛然と敵艦に襲ひかかつた。再び行はれる日本男兒得意の夜襲戦だ。瞬く間に敵巡洋艦二隻を撃沈してしまつた。他

の艦艇は夜闇に乗じ煙幕を張つて逃走するのを一艦も逃さず撃沈せしむれば已まぬわが勇士は不眠不休の疲れた體に鞭打つてこれが追撃を續けるのだ。この海戦において敵巡洋艦五隻、驅逐艦六隻何れも撃沈、同巡洋艦四隻大破したといふ熾たる大戦果に對し、わが方は驅逐艦一隻に砲弾一發を受けた。しかも、これも傷ついたとはいへ戦闘には何等差支へない。敵を求めて今なほ奮闘中である。ジャバ海海戦はかくして驚異的大戦果を生んだのである。」

以上が若月海軍報道班員の手記であり、兩海戦の様相をつぶさに語つてゐるが、さらに本海戦の特質について述べよう。

この兩海戦はわが巡洋艦隊、水雷戦隊の晝間砲戦、夜間になつての水雷戦隊の肉薄、雷砲撃戦、さらに好機を捉へての潜水艦の襲撃戦、海軍航空部隊の猛攻と、水上、水中、空と三位一體の協同作戦によつた近代立體海戦の典型的なものであ

つて、帝國海軍の卓絶せる戦法、平素の猛訓練を遺憾なく發揮した大東亞戦争勃發以來最初の本格的な海戦である。

しかもこの二海戦が、戦史上特筆さるべき價値のありとされる理由は、最も困難とされる輸送船團海上護衛の任務を、聯合國側が最後の海上部隊と特んでゐたヘルフリツヒ中將麾下の西南太平洋米英濠蘭聯合艦隊と米英本國よりの増援部隊の積極的な妨害を撃破しつつ果し、帝國の意圖たる陸軍大部隊のジャバ島上陸を見事に成功せしめた點にあるのである。

又、ハワイ、マレー沖の兩海戦以來、主力を失ひながらも尙奮動を續けてゐた聯合國側の海軍を、全く殲滅して大東亞海に敵側をして奮動の餘地なからしめたことにも、この二海戦の重大なる意味があるのである。

以上によつて、珊瑚海海戦をのぞく主要海戦を網羅しつつしたわけであるが、帝國海軍があげた

戦果につき、たとへば、潜水艦による敵艦船の撃

沈、敵本土の砲撃、航空部隊による敵航空兵力の撃滅、艦船に対する攻撃、陸上部隊の作戦援護、及び、特別陸戦隊、落下傘部隊等の戦果につき説明を加へようと思ふ。

先づ海軍航空部隊の擧げた戦果についてであるが、開戦劈頭のハワイ海戦、マレー沖海戦に敵の太平洋における主力艦を、眞珠灣内に、決死突入せる特別攻撃隊とともに全滅させた特記すべき大戦果以來、敵の航空部隊を壊滅させて大東亞海上、陸軍航空部隊と共に完全な制空権を得るのみに止まらず他に、敵艦船を得意とする體當りの爆撃によつて撃沈する等、そのあげた戦果は全く枚擧にいとまな有様である。

さて第一にあぐべきはハワイ海戦における戦果であるが、これはハワイ海戦の項を参照して頂くとして、同海戦における敵の航空部隊及び陸上軍事施設に與へた戦果につき説明を加へることとする。

海軍の戦果の明

大本營發表十二月十八日にもある通り敵の陸海軍航空兵力に與へた損害は、銃爆撃により炎上せしめたものが約四五〇機、撃墜せるものが十四機であり、その他に撃破せるもの多数、格納庫十八棟を炎上或は破壊し、一方吾が方の損害は二十九機といふ次第であつた。

當時、航空母艦より出撃したわが航空部隊は、敵の軍事施設、飛行機等に對する攻撃法として、攻撃手段の常套手段たる風上よりの攻撃をなすこととなく、風下より攻撃を行つたのであるが、これは風上より攻撃した場合、風下に煙が流れて次の目標物を覆ひかくすことのないやうに考慮したからであつて、これあればこそ確實に敵機を殆ど覆滅するを得たのであつた。

實戦に臨んで、これだけの考慮を加へつつ敵を攻撃することを得たのは、一重に精神、技術兩面に於ける猛訓練のなすもので、以後の大戦果も別に異とするに足りぬものなのである。

その後海軍航空部隊が活躍したあとを一通りたどるだけでも尨大なものになるので、それは第一編中の大本營發表にゆづつて、委しくはふれぬことにする。

さて、開戦當日の昭和十六年十二月八日には、シンガポールの夜間爆撃、ダバオ、ウエーキ、グワム、比島の主要飛行場、香港の爆撃と實に多方面にわたつて敵根拠地を襲つたのであるが、グワムに於ては軍艦ベンギンを、香港に於ては英驅逐艦一隻を撃沈、ウエーキ、比島に於ては通算して敵機百五機を撃墜破し、翌九日には比島ニコルス飛行場、マレー半島クワンタン、ウエーキ島第二次の爆撃を行ひ、マレー東方海面に於ても活躍して飛行機十五機を撃墜破し、格納庫、兵舎、倉庫等を爆破し、英貨物船一隻を大破させ、さらに十日には、マレー沖海戦、比島マニラ方面を空襲して、比島に於ては敵機八十一機を撃墜破、驅逐艦、潜水艦、特務艦各一を大破、キヤビテ海軍工廠に大打撃を與へ、ニコルス飛行場にも大損害を

與へた。

十一日には、香港を、十二、十三日には比島各航空基地を、十五日にもニコラス、フィールドを襲ひ、ここでも大いなる戦果を収めた。

かくのごとくにして大東亞海上、敵の根據地には海軍航空部隊の鵬翼の及ばぬところなき有様で、攻撃回数を加へる度に敵の勢力は蹂躪され、艦船部隊とともに陸上部隊の輸送護衛、後方補給路の確保、上陸根據地の防衛等の任務は完く、陸軍部隊に後顧の憂ひをなくさせたのである。

開戦當日のシンガポール夜間爆撃以來、シンガポールに對しては、連續的に攻撃を加へて同地敵空軍に、日本軍の進撃に對して何等の妨害をも出さないやうにした外、スマトラや、その附近にも、反覆爆撃を加へて、吾れに敵對する聯合軍の作戰根據を破挫、或ひは外洋の敵の艦艇や輸送船團にも、しばしば徹底的な打撃を與へて、敵側として唯一の恃みとする海上よりする増援軍の輸送と後方連絡補給等を絶つたのであるが、このことは、

シンガポール、スマトラに局限されるべきことではなくて作戰區域が廣大になるにつれて、印度洋、チモール島、さては英最後の牙城ともなるべき濠洲にまで、海軍航空部隊の進攻を受けることになつたのである。

故で、一言したいことは、このやうに海軍航空部隊のあげた戦果が偉大であり、制空權の絶對的な必要性は否定することは勿論、滅殺して考へることも出来ないことは當然であるが、又、航空兵力を輕視して云ふ言では更にならないのであるが、今次のハワイ、マレー沖海戦をとつて航空部隊さへあれば、戦艦その他の艦艇は無用ではないかといふやうに考へることは大きな誤謬であるといふことである。

即ち、第二次歐洲大戰に於て、ドイツは英空軍に數倍する勢力の空軍を擁しながら未だに制海權は英國に握られて、海上に於ては、ドイツ艦隊は自由な行動すら許されてない仕末である。

航空機の發達に伴つて、その影響力が深刻、廣

海軍の戦果の解説

汎、かつ特異になり「制空」は作戰の必要な要件、否殆ど全部に近いものとなり、航空機の成否、兵力の優劣は直ちに全戦局を支配すべき決定要素となつたことは、大東亞戰爭を例にしても判ることであるが、航空兵力が水上艦艇の援助なしには敵の制海を拒否し得ないといふところから、海上兵力の根幹は依然、主力艦によらねばならぬことを忘れてはならないのである。

次に、潜水艦による戦果の概要であるが航空部隊とともに開戦以來、出色の偉勳をあげてゐるが潜水艦は、艦隊や航空部隊と協力して戦果を擴大する一方に、大東亞海、印度洋に敵艦船を求めては撃沈し、通商破壊戦にその隱密性と長期間の遠距離行動の許されることを利用して黙々と大活躍を續けてゐるのである。

潜水艦のあげた戦果の中で先づ第一に推すべきものは十二月八日の特別攻撃隊の盡忠無比の偉勳である。即ち、航空部隊の猛攻に呼應して、少くともアリゾナ型戦艦一隻を轟沈した外大きな戦果

をあげ、翌九日には比島方面に作戰中だつた潜水艦が、マニラ灣で一萬五千トンの米軍用船を撃沈し、十日のマレー沖海戦で英東洋艦隊主力を撃滅するについても、潜水艦が九日、十日と極力搜索を續けて發見通報した賜であつた。

一方、通商破壊の面でも、南方洋上、ハワイ、米本土方面に十二月二十五日まででも撃沈船舶十隻（七萬トン）大破船舶三隻（三萬トン）損害を與へた船舶五隻（約四萬トン）といふ猛威を振るつた他、三十日には太平洋上の米海軍基地に砲撃を加へて敵の軍事施設に大損害を與へた。

この潜水艦の活躍振りは昭和十七年に入つてからますます熾烈になり一月八日、ジョンストン島西南方洋上でのアメリカ水上機母艦ラングレー（一萬一千五百トン）の撃沈、十二日、ジョンストン方面に機動中であつた、ハワイを出航して來たアメリカ航空母艦レキシントン（三萬三千トン）の撃沈と、その戦果はますます目覚ましく、蘭印方面に作戰中の潜水艦は一月二十二日まで敵船

十七隻(十一萬五千トン)を撃沈した。

二月に入つてから以後は二月五日、ジャバ海方面での敵大型驅逐艦一隻の撃沈、二月十四日の米西岸サンタ・ペーバラ附近の軍事施設に對する砲撃、さらには、ジャバ海方面、インド、ビルマ方面に作戦せる潜水艦の敵各種船舶三十萬トン以上にわたる撃沈と、佐久間艇長の魂を胸にひめる潜水艦乗員の沈黙の努力は次々と偉大な成果となつてあらはれ、對米英逆封鎖作戦、敵の航母集團等に對する脅威は、米政府をして手を拱いて悲鳴をあげるにすぎない状態にまで追ひこんでゐるのである。しかもわが潜水艦の作戦に一時たりとも休むことがないのであるから、現在、進展中のインド洋作戦が、全戦局の上に極めて重大な意義をもつて来た今日、インド洋の制海權を全く英國の手から奪ふことは、人的、物的資源をインドにたよつてゐた英國に決定的な敗戦の痛苦をなめさすこととなるであらう。ここにも、わが潜水艦の活躍は今後も大いに期待されるべきなのである。

最後に初陣落下傘部隊の活躍と陸戦隊の勇戦であるが、落下傘部隊がはじめてわが國の戦線にあらはれたのは、一月十一日メナドに上陸した特別陸戦隊に呼應してカカス飛行場目指して奇襲降下した海軍落下傘部隊であつた。

初陣であつたにもかかはらず、たくましい落下傘隊員の攻撃精神によつて、カカスの街はわが手に歸し、更に翌十二日新鋭落下傘部隊の増援を受けて、メナドに敵前上陸した陸戦隊との握手もなり、最初の落下傘作戦は刮目すべき成功を収めたのであつた。第二次の奇襲降下は二月二十日午前チモール島クーバンに行はれた。この場合も、落下傘部隊の任務は、セレベス島の落下傘部隊と同じく、同日、クーバン附近に敵前上陸した陸海軍部隊と呼應して、一舉に敵中のクーバン飛行場を占據するにあつた。

ここでは、再度にわたつて敵戦車、装甲車と遭遇したのであつたが、双方あはせて十五臺を分捕り、主目的たるクーバン飛行場占據のために、二

海軍の戦果の解説

十一日未明、敵の側方を迂回し、二十二日未明、最後の肉弾突撃を敢行することを企圖したが敵が飛行場を退却してしまつたので、直ちに飛行場を確保するとともに敵主力の追撃戦に移つたが、やがて陸軍部隊とも連繫することが出来、所期の目的を完全に果すことが出来たのであつた。

わが海軍に於て始めて實戦に参加せるこの落下傘部隊が、二度の作戦に於て二度とも赫々たる戦果をあげたかといふことは、日本人が生來腰が強いこと武道の訓練によつて、落下傘で降下する場合一番危険な接地をごく平易にやつてのけられるといふことと猛烈な攻撃精神、巧妙な戦術法の三つからなのである。落下傘を作る綱が日本産の生糸に限ると云ふ點をも考へると、落下傘部隊の將來は、日本の軍隊によつて赫々たる戦果を裏付けられてゐると云ふべきであらう。

最後に、上海事變以來世界にその勇名を轟かせてゐる海軍特別陸戦隊の活躍をのべて本稿を終りたいと思ふ。

昭和十六年十二月二十二日夜、特別陸戦隊は、折からの烈風をついて、さきにわが航空部隊の銃爆撃をうけたウエーキ島に敵前上陸を決定したのである。翌年一月十六日にはセレベスのタバンを、同じく特別陸戦隊が占領、さらに一月二十三日、カビエンクに、二十四日陸軍と協同でバリックバハンに、同日、ケンダリーに何れも敵前上陸を敢行し、カビエンク、ケンダリーはそれぞれ二十四日、二十六日に完全占領し、二月に入つてからは、九日にマカツサル(セレベス)ガスマタ(ニューブリテン)を完全占領、三月に入つては、二日、ミンダオ島サンボアンガに敵前上陸するといふやうに、特別陸戦隊による敵地攻略もまた、航空部隊其の他に劣らぬ成果をあげ、無敵帝國海軍の眞面目はここにも遺憾なく發揮されたのである。

この中、最も激戦を展開したウエーキ島攻略戦はわが勇士の鬼神も哭く勇戦奮闘によつて完全占領されたものであつて、何一つ遮截するものもな

い砂濱を肉弾を以て、突撃につぐ突撃を強行した末、二十三日午前十時に至つてわが手に歸したものである。

同島は、米當局が永久要塞を築いてゐたところで、守備兵も海兵が五、六百名ゐた頑強な島であつたのである。それで、大東亞戦争に於ては、海軍部隊が最も苦戦した戦場であつた。

陸戦に於ても、やはり赫々たる戦果をあげることが出来たのは、とりたてて特別な理由があるわけではなくて、海軍全體を流れる傳統の猛烈な攻撃精神と、それに則る猛訓練の所産なのであつて、血の犠牲は大東亞戦にいたつてはじめて、無駄でなかつたことが實證された譯である。

大東亞戦日誌第一輯



定價 壹圓八拾錢

昭和十七年六月八日初版印刷
昭和十七年六月十五月初版發行 (一〇、〇〇〇部)

編者

六藝社

發行者

代表者 岸田信吉

印刷者

福田久道

發行所

馬場巳之吉

配給元

六藝社

東京市神田區錦町一ノ十七番三〇〇一六七八

東京市神田區錦町一ノ十七番三〇〇一六七八

日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二ノ九

(大日本印刷株式會社印刷)